
ブランチア人魔戦記

長村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブランジア人魔戦記

【Nコード】

N8617Z

【作者名】

長村

【あらすじ】

こことは異なる世界の、とある地方にあるブランジア王国。

これは、人間と魔族の戦いの物語。

記憶喪失の少年、シヨーマはあらゆる魔法を瞬時に覚えてしまう『能力』持っていた。望まない力を正しく制御出来るようにと望んだ彼は騎士士官学校において魔法を学ぶこととなった。

そこで出会う、誇り高き少女メリル。勇気ある少年レウス。そして、多くの仲間達。

彼らとの出会いにより、シヨーマの心に目覚める想いがあつた。
出会い、夢を語り、ともに戦い、別れ、そしてまた出会う。
その果てに、何を見えると言つのか。

始まりの1日 (1)

鳳凰歴306年。30年に渡る西と東に並ぶブランジア王国とイーギリス王国の長い戦いは、イギリス王国王都ロドニスへの奇襲作戦の成功により、ブランジア王国の勝利に終わった。

それから3年。復興の続くブランジア王国ではある問題が発生していた。戦争末期より急増し始めた『魔族』の脅威である。精鋭揃いとはいえ、長い戦で消耗し、治安維持活動にも戦力を割いていた騎士団ではこれに対応しきれずにいた。

そこで、300年以上の歴史において、多くの騎士を輩出した名門リヨール士官学校を一般にも開放し、若い力を広く育てることで、急ぎ騎士団の戦力を増加させることとなった……。

人魔戦争と呼ばれる新たな戦いの前哨である。

シヨーマ・ウォーズカは記憶喪失であった。

黒い髪に、見慣れぬ格好、高級そうな眼鏡をしたその不思議な少年は、山の中で倒れていたところを老人オードランに助けられ、少しずつでも自分の記憶を取り戻そうと、彼とその妻の三人で静かに暮らしていた。

しかし彼には、とても静かには暮らせないであろう能力があった。

魔法の『瞬間修得』である。

魔導師を志す者が最初に覚えるのに相応しいとされる初級魔法、『アイスショット』ですら、修得に2週間はかかるのが普通であるところを、彼は教本を一読しただけで修めたという。

初級魔法を容易く修得する……。それは才能ある者にはままたる

ことではあったが、彼の能力はそうではない。高位魔法の『サンダー・ストーム』も同様に一読で修得したというのだ。2度ならば偶然で済ませたところであったが、後の検証により彼はさらに3度、計5つの魔法を同じように瞬時に修得したという。

記憶を失う前の彼は大魔導師であり、『修得した』のではなく『思い出した』のか。とも予想されたが、彼はまだ20にも満たない若者である。それは無いだろう。やはり、本当に彼だけの『特異さ』なのか。判断の難しいところであった。

いずれにせよ『経験の伴わない力』は彼自身をも危険にさらしかねない。そう判断したオードランは、ショーマ・ウォーズカの正体を保留とし、彼を正しく魔法の修練ができる騎士学舎へと預けることを決めたのだった。

「とは言っけどね……」

当のショーマは正直途方に暮れていた。

穏やかに日常生活を送る程度には問題の無かったショーマの記憶喪失ではあったが、都会に出て集団生活を送るともなれば、さすがに面倒も多いに決まっているだろう。

まずは記憶を取り戻してから、と行きたいのだったが、恩人であるオードランのお爺さんの言うことも否定しにくい。自分の記憶を取り戻すことは確かに大事だが、他人に迷惑をかける危険性を孕んだままであることが良いことなわけが無いのだ。

急いで事は仕損じる。何もわからないなら、まずは今ある自分を固めてからだ。

オードランのお爺さんの経験則らしい。

「うん、そうだな。……頑張ろう」

厳かな石造りの門。リヨール士官学校を前にしてショーマは1人、決意を固めていると、

「ああ、頑張ろう！」

「うわっ」

いつの間にか隣に立っていた同世代くらいの少年に同意された。緩やかに波打つ金髪と、育ちの良さを感じさせる柔らかな笑みが印象的な少年だった。もちろん、今の記憶には無い人物である。

「ええっと……」

たじろいでいると、金髪の少年は自分から語り始めた。

「僕はレウス。レウス・ブロウブ。君がシヨーマ・ウォーズカ君だよ。兄から話は聞いているよ」

レウスと名乗った少年は気さくそうに微笑んだ。

シヨーマもブロウブという姓には覚えがあった。オードランと暮らしていた小さな山村であるリウルの村から、シヨーマをこの学術都市リヨールまで連れてきてくれた上、士官学校の入学や生活する寮の手配までしてくれた人物だ。手際良く物事を進めていく様子は、少し見るだけでも彼の優秀さを感じさせた。

なんでも騎士として歴史のある結構な名門の家系だとか。

「あ、ああ。その節は本当にどうもありがとう。こっちも色々大変でさ。本当、助かったよ」

「どういたしまして。……申し訳無いが、兄はあれで結構忙しい人なんだ。だから学校では、代わりに僕が君の助けになろうと思う。ちようちよと同じ時期に入学する事が決まっていたし。構わないかな？」
裏の無い笑顔にシヨーマは安心感を覚える。今の彼にとって、当てにして良い人物がいるというのは、それだけで随分と心を落ち着かせてくれるものだった。

「ああ。ありがたい話だよ。迷惑をかけると思うけど、どうぞよろしく頼む」

そっと手を差し出すシヨーマ。レウス気の良い笑顔ではそれをぎゅっと握り返した。

入学式は式というほど大袈裟なものではなく、学長による挨拶程度で終わってしまった。そんなことに時間を割くなら、生徒達は1秒でも多く教練に励めということである。

「……その髪はこの国の生まれでは無いよね。やっぱり外国から何かの用事でやって来たけれど、不幸な事故か何かで……。つてところかなあ。やっぱり」

シヨーマ達新入生は最初の授業が始まるまで教室で待機中である。退屈をもて余す学生達は、新しい友人達と交流を深めるため談笑中だ。

そんな中シヨーマは、人の少ない一番端の席について、レウスと自身のことについて相談していた。

「でも隣国のイーギリスにもそんな髪の人はいないし、もっと遠くからかな？」

ここブランジア王国や東に隣接するイーギリス王国の民は金髪や茶髪がほぼ全てである。シヨーマのような黒髪はまずいない。よってレウスは彼をイーギリスより、さらに東方からの出身ではないかと予想した。ブランジアの西はかなり広い海しか無いので、海を越えてきたという可能性は低い。ゼロでは無いが。

「でも敗戦の影響でまだまだ治安の安定しないイーギリスの国境を1人で越えられるとは思えない。もしそうなら仲間がいるんだろうけど、捜してくれている様子も無い。君のような目立つ人を捜しているなら噂も聞くはずだがそれも無い。その眼鏡はそこそ高級な物のように見えるし、それなりの身分であるならなおさらだ。」

この国の地理に関する記憶も無いシヨーマにとって、次々と情報を挙げてくれるレウスは心強い。出てくる結果は空しいものばかりだったが。

「うん。……本当、何なんだろうね。俺は」

真剣に考えてくれているレウスに、シヨーマは嬉しさと共に申し訳無さも感じてしまう。

「あまり急がなくても良いよ。今はまず魔法の勉強からしてみたいしよ」

「そうか、うん。わかった。そう簡単に結論は出ないか」

話が一区切りしたので、2人は軽く教室の様子を見渡す。

120名の新入生は3つの教室に分けられ、今は40名の生徒達がこの教室に詰め寄っている。

「本来は貴族や騎士の家系か、その推薦を受けた人しか入学できなかったんだけどね。魔物の増大に対してその考えは改められたみたいだよ。平民からもたくさん志願者がいて、例年に比べると倍以上の新入生らしい」

「へえ……」

と、言われても貴族や騎士、平民の違いなどシヨーマにはよくわからない。これがどれくらい多いのかというのもぴんときなかつた。「でもやっぱり名のある騎士の生まれも多いみたいだね」

「……俺にはわからないよ」

「はは、そうだね。例えば、あそこにいるのはガランマ家の次男だし、あつちで人だかりが出来ているのはララニー家の三男。それから、目の前の席にいるのがドラニクス家のご令嬢。だよな？」

話の流れとはいえ、突然前の席にいた金髪の少女に身を乗り出して話しかけるレウスにシヨーマは少し驚く。気さくだとは思っていたが。

声をかけられた少女はゆっくりとこちらに振り向いた。

「……こんにちわ」

美しく気品のある金髪と、宝石のようにきらめく碧眼、決め細やかな肌とで整った顔立ちの、いかにもな美少女であったが、笑顔のレウスとは対称的な、機嫌の悪そうな仏頂面がそれを減じていた。

「……なにか嫌なことでもあったのかな」

「貴方に話しかけられたせいかしらね」

「ひどいなあ」

2人は軽口を交わしあう。どうやら顔見知りであるらしい。シヨーマが置いてきぼりにされた気分していると、レウスはすぐに彼女を紹介してくれた。

「ああ、こちらメリル・ドラニクス嬢。彼女の家と僕のブロウブ家は昔から家族ぐるみで付き合いがあつてね。なんだか僕は彼女に嫌われているようだけでも」

確かに愛想が良いと言えば良いのだが、裏を返せば馴れ馴れしいとも言える。それがレウスという少年だった。シヨーマにはそれがありがたいのだが。

「メリル、彼はシヨーマ・ウォーズカ君。僕の友人だ」

「あ、どうも。よろしく」

どんどん話を進めてしまふレウスに戸惑いつつも、シヨーマはメリルに頭を下げる。

「……こちらこそ、よろしく」

メリルは短いながらも確かに笑みを返した。明らかに態度が違う対応だが、レウスは特に気にしていないようだった。

ざわつく教室の扉を開き、恰幅の良い初老の男性が入ってくる。

手にはいくつかの資料を持っている。彼が指導教員のようだ。

「はい静かに。……えーどうも。指導教員のボンボーラです。少々遅刻してしまいましたが、数分程度。まあ気にせずいきましよう」

1秒でも多く教練に励めと言われた覚えがあつたが、シヨーマは気にしないでおいた。

「えー早速。諸君らの今後ですが。えー学生諸君はまず目標とする『クラス』を決めてもらいまして、それを目指して、各授業を選択して参加し能力を身に付けていき、最後には是非とも立派な騎士に

なつて頂きます」

『クラス』というのは騎士達に与えられる戦闘スタイルに基づいた称号だ。それくらいはシヨーマも事前に勉強している。

「えーまず、授業には実技講習と筆記講習があり、実技は選択式ですが、筆記は必修ですので、サボったり遅刻など無いよう。こちらでは騎士としての心構えや教養、戦闘行動に際しての戦術や戦略など『クラス』に依らない内容を学びます。

えーそれで肝心なのは実技講習についてです。武術系4科目、魔法系4科目の計8科目から自由に選択して、戦闘訓練を受けてもらいます。

武術系4科目の内訳は『剣術』、『槍術』、『拳術』、『弓術』。魔法系4科目の内訳は『黒魔法』、『白魔法』、『竜操術』、『薬師術』となります。えー内容はだいたい説明するまでも無いでしょうが……」

説明するまでも無いと言われても困る人物は1人いた。

「なあ、武術系4つと白黒魔法はわかるけど竜操術と薬師術って？」
シヨーマは小声で隣席のレウスに尋ねる。

武術系は剣、槍、拳、弓。それらを扱う武術を学ぶ、というのはすぐわかる。白魔法と黒魔法もわかる。それを容易く修得してしまったから彼はここにいるのだから。

しかし竜操術と薬師術は、知らないか覚えていない。字面通りの意味で良いのだろうか。竜を操る？

「竜操術は端的に言えば特殊な魔法技術だね。基本は同じだけど竜族の力を借りてさらに高位の魔法が使えるんだけど、結構難しくてあまり使う人もいないから、僕も詳しくはわからないよ。メリルが詳しいから後で聞いてみると良い」

前の席に座るメリルに目を向ける。彼女はそ知らぬ振りですっとボンボーン教員の話に耳を傾けている。

(難しい高位魔法ね……。結構すごい子だったのか)

「薬師術は薬草の調合を行う『クラス』だけど普通の薬剤師とは違

い、魔法の力を織り混ぜるんだ。普通の魔法と違って薬の力にも頼るから準備に手間がかかるけど、そのぶん利便性に優れる技術だね。魔法の心得はあるけど、それだけで戦うには心許ない人向けかな」
「なるほど。ありがとう」

ボンボーン教員の話に意識を戻す。

「えーどれか1科目を全て修めることで卒業が可能となりますが、実際騎士の称号を得ようとするならば、えー1科目だけでは難しいところですので、別にもう1科目の半分だけでも修める事を薦めます。理想は2科目ですが、……えー少々覚悟がいると思われませぬ。それ以上は体を壊しかねないのでお薦めはしません。若者は無鉄砲が取り柄と言いますが、無理はしないよう」

3科目は相当きつい、と。2科目でもちよつと大変だそうだが、自分の能力を活かせば白魔法と黒魔法での2科目なら比較的簡単かもしれない。それで満足しておこう。そもそも騎士になり来たわけでは無いのだし。

とシヨーマが思っていると、学生達の中から1人が声をあげた。

「先生！ しかしいずれ將軍クラスまで目指すのであれば、3科目以上は目指すべきだと思いますが！」

濃い色の肌をした、気の強そうな男子生徒だった。挑むような目付きでボンボーン教員を睨み付けている。

「……無理はしないようにと言いました。志を高く持つのは良いですが、ここでの教練だけが君の騎士としての全てになるわけでは無いのですよ」

「それでも早いに越した事は無いでしょう！」

……これは食い下がらない。そう素早く判断したのかボンボーン教員の方が先に折れた。

「出来ると思うのなら、精々頑張りなさい。」

……えー、それでは。授業の選択は自由ですがおおよその参加人数は把握しておく必要があるのです、こちらの用紙に名前と希望科目を書いて本日中に提出してください。期限は短いですが戦場でのん

びり悩んでいる暇は無いとでも思って、さくつと決めてください。
えーそれでは本日は解散とします……。この後は興味のある科目の
様子を見学する時間に当ててください」

ボンボーラ教員が退室すると、教室はまたにわかにはざわつき始め
た。

「さっきの彼、すごい剣幕だったな」

「うん？ ああ、そうだね。まあそういう人もいるよ。將軍クラス
ともなれば地位も名誉も得られる富も相当なものだからね」

「地位に名誉ね……」

「それよりシヨーマ、君はどの科目を受けるんだい？ やはり白魔
法と黒魔法かな」

何か話をそらされた気がするが……気のせいだろうと判断した。

「ああ。ひとまずはね。レウスは？」

「僕はその2つと剣術かな」

レウスはしれつと3つの科目を挙げた。

「……大変なんだろう？ あ、まさか」

「気にしないで良いよ。ちゃんと入学する前からその3つを選ぶつ
もりだったからね。」

「……名門ブロウブ家の一員である以上、末の弟とはいえそれは当
然のように望まれることだし、成し遂げる覚悟もあるよ」

それは先程の男子生徒とはまた違う強い意思を感じさせる物言い
だった。

「……かっこいいなあお前」

「そうかい？ 照れるな」

そう言っレウスは本当に照れ臭そうに笑った。

正直な男である。

「あ、メリルはどうするんだい？ 竜操術以外にも受けるの？」

照れ隠しか、レウスは前の席にいるメリルにも話を振った。

「……………はあ」

「どうしたのさ」

「私も黒、受けるのよ」

ため息をつきながらメリルは答えた。

「へえ。それじゃあ3人一緒だね」

「そーね」

嬉しそうにレウスと、そして対称的にダウンナーなメリルであった。ひよっとしてこれが定番の調子になるのだろうか。そんなことをシヨーマは思った。

始まりの1日 (2)

レウス・ブロウブは騎士の名門、ブロウブ家の三男として生を受けた。騎士と、騎士を志す者からは、その名だけで期待と信頼と羨望が集まることを宿命付けられたレウスは、しかし真っ直ぐな心を持ちながら育ち、他者の助けとなれるよう自らを鍛えることを惜しまなかった。

そんな彼はやがて、人魔戦争においてその名を広く知られることとなる。

ショーマ、レウス、メリルの3人は揃って8つの科目を順番に見学して回ることにした。

自分の受ける予定の無い科目も見ておいた方が良く、というのはレウスの談である。

ざっと見てきたところ、武術系4科目は体力向上のための基礎鍛練や、各武具を用いた技能訓練など、傍目にも分かりやすいものだったので軽く済ませて終えた。

現在は白魔法科の行われる教室に向かっているところである。

「あ、そうだメリルさん」

「なに？」

「突然こんなこと言うのもなんだけど、俺、実は記憶喪失なんだ」

「本当に突然ね」

「悪いね。そのせいで……その、非常識なことをしたり、時々変なことを言うかもしれないけど、そういうこと承知しておいてほしい」
「さらっと言ってはみたが、ショーマとしては、実は少々勇気のいる告白だった。」

「まあ、色々込み入った事情がありそうなのは察していたけど……」

メリルの視線はシヨーマの黒い髪に向かっていた。この国では見ないであろうそれは、彼女にとっても気になるところであった。馴染みの無い風貌に聞き覚えの無い家名。レウスが目をかけていたのもただのお人好しでは無いと察してはいた。

「記憶喪失ね……。どんなことが思い出せないの？」

「名前は思い出せたけど、1ヶ月ほど前、リウルの村で目が覚めた時より以前の記憶がさっぱりとね」

「さっぱり？」

「うん。どこで誰とどんな暮らしをしていたのか。全然だめだ」

「それはまた……。重症ね」

「あとはまあ、日常生活はわりと問題無いんだけど、魔法とかは…

…

「そう……」

「これから魔法科の見学だけど、変なことしたり、言ったりするかもしれないけど、驚かないでくれよ」

「うん。それは良いけど……。ていうか記憶喪失のまま騎士志望なの？ 貴方」

「ああ、いやそれはそれでまた色々あって」

「もう着いちゃったよ、シヨーマ」

結局話の終わらない内に白魔法科の教室に到着してしまった。

「ああ、えっと続きは、後で」

我ながら簡単に説明できない事情を抱えているものと、シヨーマは改めてそう実感した。

白魔法科の教室に入ると、担当教員と思われる女性から声をかけられた。

「あら、貴方、ひよっとして例の……？」

女性教員はシヨーマの黒髪を見て判断したらしい。学校へは彼の

能力はすでに連絡が行っているのだ。

「はい。彼がシヨーマ・ウォーズ力です。もう話は聞いて頂けていますか」

「ええ、はい……、あ、では貴方がプロウブ家の？」

「はい。レウスです。よろしくお願ひします」

「わかりました。あ、私白魔法科教員のエルメーラと言います。…皆さんもう他の魔法科には行きましたか？」

「いえ、3人ともここが最初です」

てきぱきとエルメーラ教員との会話を進めるレウス。その後ろではメリルが何やら言いたげな視線をシヨーマへと向けていた。

特別な事情……一般生徒には特に縁の無さそうな。そういうものを先程の会話から推測させられただろう。

「ではこちらに。魔法科ではまず最初に魔導力の測定を行いますので……」

「……………」

シヨーマとメリルは無言のままエルメーラ教員の後へ続いた。

3人の前に置かれたのは無色透明な水晶玉だった。

「この水晶に手を置くと、魔導力の属性と強さが現れます。あんまりに反応が微弱だと、魔法科を受けるのはお薦めできないかなってなっちゃうんですけどね」

エルメーラ教員が説明する。シヨーマには魔導力という言葉に覚えが無かったが、字面から予想くらいはついた。

「まあそんな心配は滅多に無いでしょうけど。……どなたからやりますか？」

「じゃあ僕から」

特に相談もなくレウスが一番手を宣言し、水晶に手を乗せた。

すると、無色透明なはずの水晶の中に、どこからともなく黄緑色の煙のようなものが漂い始めた。煙は水晶の中をふわふわと漂って

いる。

これが魔導力の属性と強さというやつであろうか。シヨーマにはこれがどういう結果なのかも、どういう仕組みでこうなるのかもさっぱりわからなかった。

「はい、もう良いですよー。次の方は？」

エルメーラ教員は結果をメモしながら次の人物を催促した。

「シヨーマ、やってみなよ」

「え、俺？」

「手を置くだけだよ。難しいことは無いだろ？」

「あ、ああ……」

レウスが水晶から手を離すと、黄緑色の煙も消えた。それを見てシヨーマもそつと水晶に手を乗せる。

現れたのは黒い煙だった。

「うわ」

特に何か力を込めたわけでもなく、本当に手を置いただけで煙が現れた。

しかしどこかおどろおどろしさを感じる真っ黒な煙には、少し背筋が寒くなる。

「おお」

「あ、すごいですねえ。全属性ですか」

レウスと女性教員は揃って感心しているようだった。

「全属性？」

「あ、勢いもすごいですねえ」

「え」

黒い煙はレウスの黄緑色の煙と違い、強めの勢いで水晶の中をぐるぐると漂っている。

何が何やらわからないでいると、レウスが解説を始めた。

「これは色が属性、煙の漂う勢いが強さを表しているんだ。全ての色が混ざっている黒はつまり全ての属性を表す。勢いも強いし魔導力の強さも相当な物のようだね」

「要するに……?」

「君にはすごい魔法の素質があるってことさ」

今更と言えば今更な事実ではあった。

瞬時に魔法を修得する能力。それはもちろん覚えた魔法を行使出来るということでもある。実際に強大な魔法を放ってしまったこともある。

……これが魔法の素質がある、と言わなければ何だと言うのか。

だから別段驚くことではない。シヨーマ自身と、その事情を知る者にとっては。

「ふーん……………」

そうで無い者が1人。メリルだった。

「ずいぶんとまあ……すごいものを持つてるのね」

その言葉を驚きと苛立ちの混ざったような物言いだと、シヨーマは感じた。

「ああ、まあ、ね……。自分でも何でこんなことになってるかわからないし。それと……………」

「まだ何かあるの?」

「さっきの話の続きでもあるんだけど……………」

「にわかには信じがたいわね……………」

シヨーマは自分の持つ『瞬間修得能力』のことについて、改めて話した。その能力ゆえ、この士官学校への推薦状が得られたことまで。

「学校側でも、彼に関しては色々と配慮するように言われているんです」

エルメーラ教員が補足した。

「魔法を教える分には楽で良いんじゃないか。なんて冗談めかして
る先生もいるんですけどね。フフ」

エルメーラ教員は呑気そうに笑った。

「……でも、良い印象を持たない人もいるんじゃないかしら。特に
同じ学生なんかは」

しかしメリルはそれほど楽観的では無かった。

「ああ……」

言われてみれば、そういうことは、確かにあるかもしれない。自
分のことばかりで手一杯だったシヨーマは、そういう考えには至っ
ていなかった。

「記憶喪失はともかく、この事はあまりおおっぴらにしないほうが
良いかもね」

「……そんなに隠し通せるものでも無さそうだけど」

「その時はまあ、その時だよ」

「あ、私もそう思いますよ。学校外の人にも、あまり言いふらさな
い方が良いと思います」

「……そう、ですね」

シヨーマが初めて魔法を修得してしまったとき、それがどうい
う物だったのかもわからずに、その魔法、『サンダーストーム』を不
意に発動してしまったことがあった。

オードランの育てている畑の半分ほどを吹き飛ばしてしまい、随
分と迷惑をかけてしまった。彼は笑って許してくれたが、シヨーマ
は自分が恐ろしくなった。もしこれが人の多い場所であつたら……。
そんな折、ちゃんとした学習のできる士官学校への推薦は、不安
もあつたが安堵もあつた。希望があつた。

けれど今、それを疎ましく思う者もいるかもしれない。というこ
とに気付いた。……それは少し、悲しいことに思えた。

「まあ、良いわ。そろそろ私と変わってもらえる？」

「え？」

ぼんやりしていたシヨーマは、メリルが何の事を言っているのか、一瞬わからなかった。

「水晶」

「あ、そっか。ごめん」

ずっと水晶に手を乗せたまま話を続けていたことにも気づいていなかったようだ。

「まったく」

シヨーマが手を離すと、すぐにもメリルは水晶に手を乗せた。さつさと済ませようとばかりに。

メリルの手は細くしなやかで、丁寧に磨かれた爪などさりげないところからも気品のようなものが感じられた。

(綺麗な指だな)

彼女の魔導反応は綺麗な紫色の煙で、勢いはシヨーマのそれより少しゆっくりめ。といった所だった。それでも結構な勢いがあるようだ。

「赤と青の綺麗な2属性ですね。強さもかなりある」

「彼に比べたらどうってこと無いですよ」

「いやいや、新人生でこれは相当すごいですよ」

エルメーラ教員は素直に感嘆しているようだった。

「彼女はドラニクス家の生まれなんです」

「ああ、そうだったんですか。いやさすがです」

メリルは横からのレウスの評価に澄まし顔であったが、よく見ると笑みを押さえようとしているようにも見える。

「はい、それではこちらが結果の控えです。別の魔法科目を見に行くときはこれを見せてくださいね。もう1回検査しなくても済みますので」

「ありがとうございます」

3人は先程の結果が書かれた紙を受け取ると、次は教室の様子を見学し始めた。

「この教室では魔法の術式や実戦における使用ノウハウなんかを学ばんです。実際に発動する訓練は別の場所で行われる事が多いですね」

教室といってもボンボラ教員の話聞いたあの教室とは趣が異なり、特に目立つのは大量の本と本棚である。

「あ、その辺にあるのは魔法の教本ですから……ウォーズカ君は読んだだけで覚えちゃうんですね……。あんまり迂闊には開かない方が良いでしょう……」

「あ、そ、そうですね。気を付けます……」

「ちゃんとした授業は明日からです。今日はこの辺で」

「ありがとうございます」

見学を済ませ、教室から退室しようとする。

「あ、シヨーマ、彼だよ」

レウスがさきほどの水晶玉で魔導力の測定をしている生徒に気が付いた。

「ああ……」

ボンボラ教員に噛みついていた濃い肌の色をした男子生徒だった。何やら渋い顔をしている。

「おーい」

レウスはさっそく近づいて声をかける。

「……はあ」

またか、とため息をつきながらメリルは彼の様子を目だけで追う。「君もこれから魔法科の見学かい？ 良かったら一緒にどうかね。同じ教室に集まったよしみで」

レウスは気さくに話しかけている。シヨーマとメリルはそれを少

し離れた場所から見ているだけだ。

「いつも……あんな調子なの？」

「……そうみたいね」

「僕はレウス・ブロウブ。君は？」

「ブロウブ……？」

男子生徒はその名に思うところがあるのか、少し考えた後、

「デュラン、だ」

家名までは名乗らなかった。

しかしレウスは気にすることなく笑顔で手を差し出した。

「デュランか。よろしく！」

デュランは水晶に乗せていた手を下ろし、ゆっくりと握手をかわした。

「白魔法ってことは、君はやはり……『聖騎士』を？」

「ふん……。見たらどう？ 今の反応。微かに真つ白な煙が見えただけ。魔法の才能はからつきしってことさ。そんなんで『聖騎士』なんて……」

「鍛えれば伸びるものだよ。そう簡単に諦めない方が良くと思うな」

「どうだか……」

デュランは寂しそうに笑うと、そつとレウスの手を離れた。

「俺は一人で回るよ」

「そうかい？ ……お互い頑張ろうね。それじゃ」

「ああ」

デュランと別れたレウスが、ショーマとメリルのもとに戻ってくる。

「駄目だったか」

「うん。……でも想像してたより良い人そうだったよ」

「ふっん」

レウスは彼を気に入ったようだった。少し話ただけだろうに、

そうわかるものなのだろうか。シヨーマにはイマイチ疑問だった。

「まあいいわ。早く次、行きましょうよ」

こうしてちょっととした出会いを経て、3人は次の教室へ向かうのだった。

始まりの1日 (3)

メリル・ドラニクス。『竜操術』と名付けられた新しい魔法の体系の開祖、ドラニクス家の長女である。

騎士としての有名を馳せ続けるブロウブ家とはまた別方向の名家で、戦場での活躍に加え、魔法の研究者としても一家言を持ちその資産を伸ばした。

そんな安定した一族と優秀な兄達の庇護のもと、これでもかと甘やかされて育った彼女だが、持ち前の意思の強さで自ら騎士の士官学校への入学を志願したのだった。

「竜操術とは竜と心を交わし力を借り受けることで、既存の魔法を凌駕する新たな高位魔法技術。ご存じですね？」

「ええ、もちろん」

「そのためにはまず心を通じあわすことの出来る『竜』を見付けることが必要です。例えば術そのものを修得したところで竜がいなければ、何の意味もありません」

「私には既に10年を共にする『友』がおります。それについても問題はありませぬ」

「よろしい。」

……この調子ではもう教えることなんて全然無さそうだね」

「そんなこと言われても困るんですけど」

ここは竜操術科目の教室。そして今のが担当教員アウディと注目の新入生メリルのやりとりである。

すでに入学前から、独自に竜操術への修練に励んでいたメリルにとっては、ここで行われる授業で得られる物など正直なところ、少

ないのだ。

「まあ、こちらに注力する必要が無いのなら、同時に別の科目を受けてみるのも良いと思いますよ」

「ええ、最初からそのつもりです」

アウデイ教員の薦めに凜と答えるメリル。

「やはり……、騎士を目指されるので？ 竜操術以外にも得手があるとなれば、まさに引く手数多でしょう」

「そこまでは考えていませんが、ドラニクスの名に恥じない人間でありたいとは考えています」

「ご立派です」

竜操術科目を後にしたシヨーマ達は、続いて黒魔法科目の教室に向かっていた。

「教員の方がぺこぺこ頭下げて来るなんて、やっぱりすごいんだな」

シヨーマはメリルの見えざる実力の片鱗を感じ、素直に感心するばかりであった。

「……貴方ほどじゃないわよ、きつとね」

「俺のとは事情が違うよ」

シヨーマの能力は、彼自身が修練の末勝ち得た物ではない。少なくとも記憶の無い今のシヨーマの物では。

メリルの『今』は、恵まれた環境があったのは確かだろうが、勝ち得たのは彼女自身の努力の結果に違いのないのだから。力はあるけど、過去の無いシヨーマにはそれが羨ましくも思える。

「本当に、すごいな。って思うよ」

「……………ふん」

誉められると、メリルは怒っているような、照れ臭そうな、複雑な顔をしてそっぽを向いてしまった。

黒魔法科目は、今まで回った科目に比べかなり多くの人が集まっていた。

「盛況だな」

「人気あるからね、黒魔法は。戦場で多くの戦果を上げやすいし、後衛だと危険が少ないって考える人も多いらしい」

「なるほどねー」

「最初は混みそうだったから後に回したけど……。どっちにしろ窮屈な思いをしそうだね」

ふとメリルの様子を伺うとなにやら仏頂面になっていた。

「嫌だな……」

「メリルさんは……人混み苦手なのか」

「うん……」

さつきまでは誉められて上機嫌だったようだが、今はダウンナーな雰囲気だ。

「しょうがないよ。我慢しよう」

「はあ……」

レウスは笑いながら彼女の肩を叩いて言った。

なんとか教室に入ると、教員の案内で空いている座席につくよう指示がされた。込み合っているため3人並ぶことのできる席は無く、シヨーマはレウスとメリルからは離れた席に着かされてしまった。

（まあここにいる間だけだし我慢するか……）

せめて目立たないようにしようと思ったが、しかしそうもいかないうようだった。

「ねえねえねえ、あなた、噂になってる彼よね」

隣の席にいた女子生徒から声をかけられてしまったためだ。

「何の、ことかな……」

「またまた〜。プロウブ家とドラニクス家の人間を侍らせてる異国人がいる、ってすっかり話題だよ〜?」

「ためにシラを切ってみようかと思っただが無駄だったようである。実はどこかの王子様? なんて言われてるけど……実際の所、どうなの?」

興味津々で仕方が無いようだ。観念して彼女の方を向く。

女子生徒は先程の口調から想像した通り、快活そうな表情と瞳をしており、胸元まで伸ばした赤みの強い茶髪と、その髪が乗るほど自己主張の激しい胸が目を引きく。

(どこ見てるんだ俺は……)

総合的には、メリルとはまた違った印象の美少女と言えた。

「う、うん。実はちよっと、記憶が、無くてね……。彼らには良くしてもらってはいるけど、王子とかでは無いし、侍らせてるとかも、無くてね。うん」

変な事を意識してしまい、しどろもどろになってしまふ。

「記憶、喪失……? なんだか思いの外やんごとない事情だったのね……」

ぶしつけな物言いだったことを彼女は恥じているようだった。

「そんな、深刻にならなくても良いよ」

「そう? ごめんなさいね」

謝られると逆に申し訳無くなってくる。

しかし彼女はすぐに立ち直ると、

「あ、私、セリア。よろしくね!」

また明るい笑顔で自己紹介と共に右手を差し出した。

「ああ。シヨーマ・ウォーズカです。こちらこそよろしく」

シヨーマも右手を差し出し握手をかわした。見た目の快活さとは裏腹に繊細で儂げな指先のように感じられた。

シヨーマとは離れた席になってしまったレウスは彼の心配をしていた。隣の席についているメリルはその様子にまたため息をつく。

「いちいち気にしすぎでしょ……」

「そうかも知れないけどさ」

メリルにもその気持ちはわからないでもないのだ。しかし今日は入学初日であり、この教室は人の目も多い。

「確かにあの能力に目をつける誰かがいないとも限らないけど。今はまだ大丈夫でしょう」

シヨーマ本人がこの場にはいないのを良いことに、メリルは気になつていたことを確認しようとする。もちろん声は潜めて。

……教本さえあればいかなる魔法も修得できるというならば、目をつける輩も遠からず出てくるだろう。その上で記憶喪失であるというなら、何かと御しやすいことだろう。あること無いこと吹聴すれば、信じる根っこを持たない人間は簡単に騙せるものだ。

つまるところ、誘拐してくれと言わんばかりの存在なのだ。シヨーマ・ウォーズカは。

特に戦争が終わつてまだ3年。敗戦したイギリス国軍の残党が良からぬことを考えている可能性は高い。

だが、それを見越した上でのブラウブ家だろう。彼らが背後に付き、見習いとはいえ直系の血を引くレウス自身が護衛に付くとあれば賊もそう易々とは手を出せまい。

「……彼、本当のところ何者なの？」

「まだ何もわからないよ。……ただ彼の保護を兄さんに頼んだのは、かのオードラン伯だ」

「……………ええ？」

あらゆる意味で思いもかけなかった名前に、メリルは眉を寄せる。「彼の正体は我々の想像以上に大きな物をもたらすかもしれない、つて……グローリア兄さんは言っていた」

「貴方の大お兄様が？」

「うん。オードラン伯に会いに行ったのはブレアス兄さんだけど、伯からの話をブレアス兄さんに伝えられて、そう思ったそうだ」

「そうなんだ……。あの人が言うなら本当なのかもね……」

2人の、含むところの多い会話はそこで終わりとなった。

「はー……人多いな……」

後は独り言のみとなった。

黒魔法科目担当の教員、インギスが教壇に立った。

「あ、シヨーマくん、あれがインギス先生だよ。現役の黒魔法導師の8割はあの人の指導を受けたんだって。すごいねー」

「へえ……」

あの後延々喋り続けるセリアの勢いに辟易しつつあったシヨーマは、教員の登場でやっと黙ってもらえそうだと安堵した。

「本年も積極的な志望者が多くて結構です。しかし」

恰幅の良い体格をしたインギス教員は一旦言葉を区切り、息を吸い直した。

「1ヶ月もすれば半分も残らないでしょう。そして、1年で学科を全て修了出来るのは10人もいないでしょう。私はそれが実に悲しい。……君達には期待しています。どうか私を悲しませないで欲しい」

(脅しかい……)

「黒魔法とは『破壊』の力です。ただ壊すだけです。黒魔法とはそれしかできない。

……今この国は戦争の『破壊』から立ち直ろうとしている。君達も辛い想いをしたことがあるでしょう。しかし君達は、その力をこれから学ぼうとしています。どういふことかわかるでしょうか」

(残念ながらあんまりわかって無いやつもいます……)

「力の使い方を知る者は、自然と力の抑え方も知るので。君達ならきつとわかってくれると信じています。」

……それでは、明日からの授業でまた会いましょう」

「記憶喪失の人間には色々刺さる物のある演説だったね……」

インギス教員の話聞き、シヨーマの笑みは少しひきつっていた。

「あ、そっか……。シヨーマくん、戦争の記憶も無いんだ……」

セリアは同情的な視線を向ける。

「でも嫌なことも忘れてるってのは……ちょっと羨ましいかも」

「……君にも、何か嫌な思い出が？」

セリアの明るさからは、とてもそういった物は感じられなかった。シヨーマはなんだか意外に思う。

「お父さんが戦場でね……。命こそは拾ったけど、脚をやられちゃったの」

「そうなんだ……」

「少し移動するだけでも一苦労だね。……もし私が一緒に戦えてたら、きつとお父さんを守ったのにな。無茶苦茶な話だけど、やっぱり気持ちを抑えきれなくてさ」

「その気持ちひとつでここまで来たんだろ？ ならすごいことじゃないか」

「へへ、そうかな。当のお父さんには反対されただけだね」

「はは……」

彼女と話しているうちに、教室から人は退出し始めていた。

その人の流れを遡って、レウスがシヨーマのもとへやってきた。

「おーい、シヨーマ。早く出よう。人が多いから入れ替わりで次の

見学希望者が入るみたいだ」

「ああ、そうなんだ」

「あ、あ、あじゃあ私はこれでっ!」

「え、ああ、どっか行く場所でもあるのか?」

そそくさと席を立つセリア。

「うん、まあ、ね。それじゃっ」

レウスはまた一緒に行かないかと誘ってきそうだし、そうなる前に素直に見送ることにした。

「ああ、それじゃあ」

去っていくセリアを二人で見送りながら、レウスが尋ねる。

「……今の子は?」

「ああ、ちよつと仲良くなったんだ」

「へえ……。可愛い子を捕まえるもんだね」

「そういうのじゃ無いって……」

こういう冗談も言うんだな、とシヨーマは素直にレウスの人物像に1つ要素を追加した。

最後に薬師術科目を軽く見学し、志望科目書を提出すると、今日はおもつやる事が無くなった。

3人は揃って、朝、シヨーマとレウスが出会った門の前で別れの言葉を交わす。

「今日はありがとう。君達に出会えて本当に良かったよ。1人じゃ色々不安も多かっただろうし」

「ああ、こちらこそ。……何なら寮まで付き合おうか?」

「そこまではいいよ……。そういえば、レウスはこの寮なんだ?」

「僕は寮じゃ無いんだ」

「そうなのか?」

リョール士官学校の入学生は、基本的に全て寮生活だったはずだ。

「ああ。ブラウプ家の別宅があるんだ。この街にいる間はそこに住むことになってるんだ」

「別宅って……」

「私もね。……一部の名家は寮生活しなくても良いことになってるの」

レウスの説明にメリルが補足をした。

「……やっぱお金の力？」

「そういうのもまあ、無い訳じゃないけど。それなりの地位を持つならそれなりの場所で『保護』される必要があるってことよ」

「僕個人としては寮生活でも良いんだけど、周りが認めてくれないつてのもあるね」

「ふうん……」

どうやら名家にも色々と面倒な事情があるようだった。シヨーマはあまり深くは気にしないでおくことにした。

「まあいいや。それじゃあ、また明日」

時はすでに夕陽が差し出す頃であった。

「ああ、また明日」

「ごきげんよう」

そしてシヨーマは2人に背を向けて歩きだした。

「……………良いの？」

「彼の寮はカターマさんのところだからね」

「ああ……ちゃんと対策済みってわけ」

学生寮といっても1つの建物ではなく、いくつかに別れており、学生達はそれぞれ振り分けられて寮生活を行っている。

レウスの言う『カターマさんのところ』というのもその1つで、リヨール市内に別宅を持たない一部の名家が暮らす、比較的豪華で警備も厳重な寮のひとつだ。学校の敷地に隣接しており、校門から

寮まで警備兵が常に配置されている徹底ぶりだ。

「お疲れ様です」

「ああ、お帰り」

警備兵にもいちいち挨拶をしながらシヨーマは寮へ向かう。

ホテルのような佇まいのこの『一号宿舎』は名家出身の学生が多いが、あくまで学生のための寮であり、『自分のことは自分で』がモットーである。メイドなどいるわけないし、食事も自分で用意する必要がある。

寮生はまずロビーで番をしている女性、リノンから部屋の鍵を受け取る。外出の際は鍵を預けるのもここのルールだ。

「ただいま戻りました」

「あ、お帰りなさい。シヨーマさん。すぐに鍵用意しますね」

リノン・カタマ。寮の総管理者の一人娘である。肩口で切り揃えられたショートカットの茶髪をした、落ち着いた物腰の女性である。今年20になったばかりだが、見た目のわりに大人びているし、最近美人に磨きがかかってきたと、毎日彼女と顔を会わせる警備兵達も話題にしているらしい。

「メイドはいないがリノンさんがいる」

何の話をしているんだか。

「あ、名前……、もう覚えてくれたんですか」

「ふふ。大事な寮生さんですから。特にシヨーマさんは印象的な方ですし」

「はは……」

つい髪を押さえてしまう。美人に名前を覚えてもらえるのは気恥ずかしさもあるが、悪くない気分だ。

「……見た目だけじゃないですよ。なんだか、独特の雰囲気を感じます。……はい、どうぞ」

鍵をそっと手渡される。わずかに触れた指に、少しどきどきして

しまっ。

(指くらいでなんだよ……)

「そ、それじゃあ」

「はい」

独特の雰囲気……いまいち実感は無かったがそういうことを言われると鼻がむずがゆくなるのだった。

広すぎず狭すぎずの部屋には、しっかりとしたベッドに机にランプと、この街に来る際持ってきた手荷物の入った鞆があるくらいだった。

名家のための寮にしては質素が過ぎるかもしれないが、シヨーマにはいちいちそんなことを感じる記憶は無かった。

トイレは各フロアで共有とはいえ、個別の風呂場とキッチンがあるのは贅沢な方だろう。

とりあえずは上着を脱いでベッドに横になる。思った以上に疲れがあったようだ。すぐに眠くなってしまっ。

(いかん……これは寝る……)

ゆるゆると立ち上がると、部屋に起きっぱなしにしておいた鞆に手を伸ばす。

記憶を失ったシヨーマが、その時持っていた持ち物の全てだった。彼の身柄に関わるかもしれない物だ。とはいえ、大した物は入っていない。

財布……。いくらかの硬貨や紙幣が入っていたが、このブランジア王国の物ではないし、もちろん近隣国の物でも無い。そしてブランジアのお金は全く入っていない。シヨーマが別の国の出身という証ともいえる。

水筒……。この国では見ない透明な薄い素材で作られた物だった。ガラス製ではない。蓋もネジのように回転させて開閉する仕組みであり、この国ではこのような構造の水筒は使われていない。

中の水は紅茶のようである。半分ほど残っているが、成分を解析すれば何かわかるかもしれないと、オードラン老人に言われたので残したままだ。腐らないと良いけど。

耳当て……。のような物。今一つ用途がわからない物だ。左右をつなぐバンドからさらに別の糸が垂れているが、どこかに結ぶのだろうか。

鞆の中の物では無いが、今身に付けている眼鏡。それ自体はあまり珍しく無い物だが、レンズの度に対する薄さや軽さなどの精度がかなり高いらしく、高級品であることが予想される。

今着ている服も、この街で買いそろえた物だが、目を覚ました時に着ていた服はやはり見ない素材であったという。

……。それから最後に、手のひらに収まるサイズの黒くて四角い板、というか、薄い箱。

あちこちに突起があったり、文字のようなものが書かれているが、記憶に無いためこれが何を意味するかわからない。

何か重要な物だったような気がするのだが、どうにも思い出せない。自分はこれを大切にしていたような気がするのだが。

恐らくショーマの正体を教えてくれる物だという予感があった。

……。何なんだろう、これは。

結局分かることは、相当遠くの、知っている人がほとんどいないような国から、たった1人でやって来たのかも知れない、ということ。そんなこと、有り得るのだろうか。

結局今日も何かを思い出すことは無く、そのまま遅い来る睡魔に身を委ねてしまった。

……明日からは本格的に騎士としての修練が始まる。

……今日出会えた人達。レウス、メリル、セリア。教員の先生達。それから、直接会話はしなかった、デュラン。

……彼らとは仲良くやれるだろうか。

……少しずつ、ショーマの新しい生活は動き出していた。

目指すべき道 (1)

リヨール士官学校の授業が始まりかれこれ3日目。

黒魔法科では待望の、実際に魔法を発動する実践訓練が行われる事となった。2日目までに初級魔法『アイスストーン』と『ファイアボール』の修得が完了した生徒が参加を許されている。

この時点でそれが叶っている学生はまだ少ない。初級魔法とはいえ2、3日程度で修得はできる物では無いのだ。今この訓練に参加しているのは、独自に魔法の教習を受けられるつてを持っており、入学前から魔法に触れていたか、よほど魔法の才能があるか、どちらかだった。

シヨーマ、レウス、メリルの3人もそうだった。入学の日に出会ったセリアは、いまだ教室で教本と睨み合っているところだろう。

そもそもまず『魔法』とは、程度の差はあれど誰もがその身に持っている『魔導エネルギー』と、空气中に漂う『マナエネルギー』を掛け合わせて産み出す『魔力』で『術式』を組み上げることによる発動する。

発動させたい魔法に必要な魔力を練り上げる工程と、すでに定められている術式を正しく組み上げる工程の2つが必要というわけだ。これらは論理的かつ正確に行えば失敗することは無い。教本にあわせて丁寧にやれば良いだけのことだ。

シヨーマの『能力』とは、魔法教本に書かれている『魔力』と『術式』の内容を瞬時に理解し記憶することと、その2工程をまるで機械仕掛けのように正確に実演させることだ。と推測されていた。

特にこの『瞬時に理解する』という点がこの能力の特異点である。

魔法教本とは、ただ紙にインクで文字を書き記しただけの本では無い。記された文字はインクの成分に織り混ぜられた魔力によって、読者の正しい認識を妨害しようとするのだ。だから魔法の心得が無い人間には読むことは出来ても『理解』することが出来ない。

この仕掛けは元々、まだ技術としての魔法が体系化されきっていなかったころ、魔導師達が自分達の研究成果を外部に漏らさないため、錠前のような意味合いで仕込んだものだと言われている。

魔法の存在が一般化したこの時代においては、そういった意味合いは薄れていったが、それゆえ多くの人が触れやすくなったため、安易に危険な力を持たせないよう、この仕掛けは未だ残り続けている。

学生にとっても苦勞の果てに得られる達成感として、良いか悪いかはさておき、受け入れられていた。

つまりシヨーマの能力とは、魔法を学ぶ上で最も手間がかかり、最も重要な過程を飛ばしてしまうということなのだ。

魔導師はえてしてプライドが高いと言われるが、それは初級魔法であろうと常に苦勞があり、それを乗り越え続けたからこそ、自身のこれまでに高いプライドを抱くためだ。

だからこそ魔導師としてのシヨーマ・ウォーズカは、その能力以外の面でも『異端』と呼ばれるようになるのだが。

「それでは、始めてください」

「はい！」

シヨーマは黒魔法科の実践指導を担当するポリー教員の言葉に頷いた。

……意識を集中し、体の中の魔導エネルギーを呼び起こす。そし

て空気中に感じるマナエネルギーと混ぜ合わせていく。練り上がった魔力は、手にした修行用ワンドの先に込めていく。その作業に淀みは無い。

そのままワンドを振り、虚空に向かい魔法の言葉で文字列を書き込む。術式である。

そして術式に魔力を込めると、その成果が浮かび上がっていく。

大気中の水分と魔力が集まり凝縮し、水の滴が出来上がった。さらに魔力を込め、その水を凝固させると、氷の礫が完成した。

「よろしい。それでは射出してください」

「……はい」

ワンドの向けた先に、氷の礫が浮かんでいる。魔法は発動されたが、行使はされていない状態だ。これを一般的に、魔法の待機状態と呼ぶ。

余談だが、このように魔法を使うのにはいちいち時間がかかる。

熟練していけば効率良く魔力の練り上げや術式の組み上げは手早くできるようになるものだが、ショーマの能力ではそのための『経験』までは補えない。

だからこそ実戦における魔法使いの戦法とは、この準備時間のラゲをどう扱うかが重要になる。

基本的には安全地帯を確保し、このように待機状態で相手の接近を待ち迎撃するというのが一般的だが、威力を削って高速発動を目指す者や、周到に罠を張り、発動までのタイムラグを考慮した上で敵を誘いだし一網打尽にするという者などもいる。

「『アイスストーン』！」

掛け声と共に魔力の噴射によって射出された氷の礫が、約10メートルほど先に置かれた的にめがけて飛んでいく。

「あ」
「が、命中せず。」

「まあ、魔法自体は問題無く発動できましたので良しとしましょう」
「は、はい」

ポリー教員と一緒に苦笑する。魔法は確かに問題無く使えた。そこはそういう物だと、自分の未知の能力をある意味信賴していたシヨーマは特に気にしなかった。しかし命中させられるかどうか、使いこなせるかは、自身の技術次第なのだ。

これから先、覚えなくてはならないことはたくさんあることを改めて実感する。

これが初級魔法、『アイスストーン』である。

気体から固体までの水分の変化は、魔力の凝縮と似ておりイメージがしやすく、出来上がった礫を投擲しぶつけるという単純な攻撃手段は、比較的簡単に修得できるため、最も入門に適した魔法だと言われている。

ただこの魔法は威力が小さく、それこそ小型の弓矢でも撃つた方が威力としてはましなものである。実戦においては魔導師の攻撃手段としては下位の評価であり、むしろ近接職の牽制技として補助に使う者の方が多い。

バン、と木の板を撃ち抜く乾いた音が響き渡る。

メリルの放った『アイスストーン』が的を貫いた音である。

「これは、お見事」

ポリー教員は思わず手を叩く。

メリルの魔法はシヨーマのようなただどしいものではなく、補

助ワンドに頼らない指先1つでの術式の書き込み、1秒未満での高速発動、そして正確な狙いと木の板を貫く充分な射出速度が合わさった、見事と言う他無い華麗な一撃だった。

「すごいじゃないか」

「ふふ。これくらいどうってことないわよ」

シヨーマの賛辞を、メリルは美しい金髪を優雅にかきあげながら受け取った。当然のようでないながらも、どこかまんざらでは無さそうな様子である。

他の生徒からもわずかに歓声は上がっていた。だが誰よりシヨーマは先程の自分の未熟さを実感したばかりであることから、メリルの凄さは彼ら以上にその身に感じていた。

続いてレウスや他の生徒なども『アイスストーン』の実習を行った。それが済むと次は『ファイアボール』である。

炎の塊を射出する。という『アイスストーン』に似たタイプの魔法ではあるが、氷の礫という固体ではなく、魔力を燃料に発火を起こし、そのまま炎そのものを射出するという点が大きく異なる。固体では無いため練り上げや射出の難度が上となるが、対象に炎を燃え移らせる事が可能なため、攻撃力もずっと上だ。

しかしシヨーマにとっては魔力の練り上げも、術式の書き込みも、炎の射出も『アイスストーン』の時とほぼ同じ感覚で行える。初級魔法も上級魔法も彼にとってはどれも等しく正確無比に発動できるため、難易度の差に意味は無いのだ。

(さっき外したのを意識しつつ狙いを付けて……)

ワンドの先に浮かぶ炎の弾。それよりももう少し前方に意識を向ける。

「『ファイアボール』！」

掛け声と共に炎の弾を射出する。今度は見事命中する。

込めた魔力はそう多くなかったため、木製の的には火こそ燃え移らなかつたが、若干の焦げ目が残った。

「おお、今度は上手く行つたじゃないか」

様子を見ていたポリー教員は成功を祝った。

「ありがとうございます」

シヨーマは喜ぶが、良く考えればシヨーマとしては『アイスストーン』と同じ調子でやっただけであり、違いと言えば的に当たったか外れたかしか無いことを思い直す。その程度で喜ぶものでは無いだろうと。

続くメリアはさつきと同様に、見事な『ファイアボール』を披露した。

意外だったのはレウスの放った『ファイアボール』は、発動こそしたが、的に命中する前にかき消えてしまった事だった。

「レウスの属性は黄緑。炎系の魔力を練るのが苦手とされる属性なの」

「ああ、属性つてそういう物だったんだ……」

「そう。私は赤と青の2属性を併せ持った紫の属性。炎と氷は得意分野つてこと。……ちなみに貴方は、全部得意なはずよ。すごいわね」

「ど、どうも……」

参加した学生全てが2つの魔法の実習を終えると、正式に修得したことがポリー教員によって認定された。

「さて、これで君達は本当に黒魔法の道への第一歩を踏み出したと言つて良いだろう。黒魔法は扱い次第でも危険な起こしかねないものだ。正しい知識と正しい理念を持ち続けることを忘れないように。……それでは本日は解散！」

「ありがとうございます！」

今日の授業は終わり、3人はこの後はどうするか話していた。

「僕は剣術科にも行っておこうと思うんだけど、どうする？」

「俺は……ちよつと黒魔法科に用事が」

「私は帰る」

3人とも意見がバラバラだった。

「はは。それじゃ今日はここで別れかな」

「そうだな。また明日」

「うん、それじゃあ！」

レウスは早足で剣術科目の訓練場へと向かっていった。

「それじゃあ、俺も」

「ええ……。……頑張つてね」

シヨーマはメリルが何か言いたげなように感じたが、自分にも用事があるのでここは深く考えず、黒魔法科の教室へ向かうことにする。

「ああ、また明日」

廊下を曲がって彼の姿が見えなくなるまで、メリルはそこでじっとしていた。

教室へ入ったシヨーマは、セリアの姿を探していた。

「おーい」

セリアの方からこちらに気付いて手を振ってくれた。彼女の隣の席に座る。

「ねえねえ、どうだったどうだった？」

昨日の授業で実践訓練を受けることが決まった時に、終わったら様子を聞かせてくれと頼まれていたのだ。

「うん、まあ……何て言うのかな。普通……？」
「何よそれー」

曖昧な表現をするシヨーマにセリアは口を尖らせる。

「もつところ、派手にドカーンとやったとか、無いの？」

「初級魔法を2つ試し撃ちしただけだよ……知ってるだろ？」

「そうだけど。じゃあ、こっそり秘密の魔法教えてもらったとかは？」

「無いよ」

「なんだー」

心底がっかりそうな顔をする。彼女は良く表情が変わるので話を
していて楽しい。

「セリアはどうだい？ 教本読み取れそう？」

「んー、まだ1割ぐらい。全然進まないよ……」

「まあ、ゆっくり頑張ってみようよ」

「……何かコツとか無いかなー」

「と、言われてもね……」

一瞬で理解してしまうシヨーマにとってはコツも何もあつたもの
では無い。他人の指導に向かないのはこの能力の欠点の1つかもし
れない。

「この調子だと初級魔法1つに1ヶ月かかっちゃうよ……」

「ま、まあ読み進めて行けば、自然にコツがつかめてペース上げら
れるかもしれないし。そこまではかからないんじゃないかな……」

「そうかな……」

「そうだよ……たぶん」

「そこは『たぶん』なんてつけないでおいてよー」

「あ、ああごめんごめん」

上目使いで若干睨むような形で怒られてしまった。声と口許は笑
っていたが。

「ふふ。そうだね。……うん。諦めないで頑張ってみるよ」

本当に悪いと思っているかのようなシヨーマの様子に、セリアは

無邪気な笑みをこぼすのだった。

シヨーマはその後セリアと別れ帰路に就こうとした。が、その前にふと思いつき立ち剣術科の様子を見てみようと思いついた。

そこではレウスと、例の男子生徒デュランが木製の剣で打ち合いの稽古をしていた。

「ハアッ！」

攻め立てているのはデュランの方だった。迎え撃つレウスは冷静にその攻撃をさばっている。

「まだまだッ！」

デュランは壁にかけられていた剣を取り、左手に構えた。2刀流というやつか。

連激の勢いは増したが、なおもレウスはそれをさばき続けている。「一撃ごとの重みが無くなっているよ！」

「くッ！」

その言葉に乗ってしまったデュランは、力を乗せて大きく剣を振る。だがそれは手数を活かした戦闘スタイルを殺してしまった。振りの大きい一撃は容易く回避され、返り討ちにあう。

「それで大振りになってしまっただけは意味が無いだろう」

「ぐ……ッ………あ」

脇腹に一撃をもらってしまい、苦しそうにつづくまるデュラン。その様子でレウスは表情を歪ませる。

「……一休みしないかい？」

「俺から仕掛けたんだ……そう簡単に止めるか……ッ！」
だがデュランは諦めず立ち上がるようにする。

さすがにまずいんじゃないか、と思ったシヨーマはたまらず声をかける。

「おい、レウス……」

「彼は止めない、と言っているんだよ」

レウスは既にシヨーマには気が付いていたようで、「こちらも見ずに言葉を遮った。

「いや、でもさ……」

「……………ッ！」

今度はデュランが言葉を遮った。言葉ではなく、視線で。

(こわ…………)

あの形相は聞く耳など持たない。といったところだろうか。

「……………い、いやでもさ？」

「ただの稽古だよ。お互いわかってやってるんだ」

「ああ、もう……………わかったよ……………。ほどほどにしておけよ……………」
レウスとはまだ短い付き合いだが、必要以上に痛め付けるような性格では無いと思う。見捨てるようで気が引けるが、ここはレウスの判断に任せて、シヨーマはこの場を後にする。

帰りの道を行きながら、デュランはなぜあんなにも必死になっているのか、それを気にしていた。2人はつい先日出会ったばかりなのに。その数日でデュランはレウスにああも食い下がるような事情ができたということなのだろうか。

寮に戻ったシヨーマを、今日もリノンが優しい笑顔で出迎えた。

まだほんの数日のことなのに、なんだかこの笑顔が当たり前のよう
に感じられる。リノンはそんな、不思議な暖かさを持っている女性
だった。

「お帰りなさい、シヨーマさん。今日は魔法の練習をなさったんで
すってね」

「ただいまリノンさん。知ってるんですか？」

「ええ。さっき戻ってらした方々が話題にしてたんです」

「ああ、そうなんだ」

シヨーマはあの後寄り道してたので遅くなったが、すぐに戻ってきた生徒もいたのだろう。

「……魔法、ちゃんと出来そうですか？」

「え？ ええ。大丈夫ですよ……たぶん」

そう尋ねてくるリノンの表情はどこか不安そうだった。

「シヨーマさんも、きっと騎士になって……私達を守ってくれるために、戦ってくれるん……ですよね」

(……………え)

別に騎士になりたい訳では無かった。誰かを守るために戦いたいとも思っていない。あくまで士官学校で学ぶ理由は、自分の能力で誰かに迷惑をかけたくなかったというだけだ。

けれど、この人にまっすぐ見つめられてそんなことを聞かれては、否定できなかった。

「……………頑張ります」

いまひとつ頼りがいの無い台詞だと、我ながら思うシヨーマであった。

「……………ふふ。ありがとう」

そんなシヨーマにリノンはまた優しい笑みを向けてくれた。

「あ、鍵……。すいません話し込んでしまっ」

「い、いえ、そんな……。あ、それじゃ、これで」

鍵を受けとると、つい慌ててその場を立ち去ろうとしてしまう。

そんなシヨーマの背中にリノンは聞こえるかどうかという声でささやいた。

「私は、シヨーマさんに守ってもらえたら、嬉しいです」

部屋に戻ったシヨーマは、そのままベッドに倒れこんでいた。

（なぜ俺にそんなことを……。あの言い方だと気があるように思っ
てしまうぞ……。ああいやきつとそう、社交辞令かなんかだろうそ
うに決まっている変な意味なんて無いしこんなことで浮かれたらみ
つともないし恥ずかしいああでも）

去り際にかすかに聞こえたリノンの言葉をつい深読みしてしまう。
確かに美人で優しそうな人だし、好意を向けられたら意識はしてし
まうだろう。もちろん嫌だなんて思わない。

（でもまだ会って数日だし、交わした会話も全然多くないし。いく
らなんでもその程度でそんなことあるわけ……）

などと考えていると何故か頭にはメリルとセリア、最近出会った
少女達の顔が浮かんでくる。

（なんでだ……）

確かに2人とも方向性は違えどリノンと並ぶ美少女と言える。急
に目を引く女性に立て続けに出会ったものだから頭が変になったの
だろうか。

（いやいや違う。そもそも記憶を失って以降、人との交流自体がま
だ少ないし、特に多かった人物が浮かんでくるだけだ、うん）

そう考えたらオードランのお爺さんやその奥さん。レウスなんか
の顔も浮かんでくる。それから……。そうだ。そのレウスに突っかか
っていた彼、デュランのことも。

思い出すとまた彼のがまた気になり始めた。あそこまで必死
になる理由とはなんなのか。

自分には、何の過去も無いからだろうか。

……過去が無ければ、未来への願望も無い。

記憶は取り戻したいが、それはあって当たり前前の物だ。誰だって
失えば取り戻したいと思うだろう。それは今考えている物とは違っ
と思う。

つまり、そう。セリアのように、過去の後悔から未来への願望を
抱いたような。多分デュランにもそういう何かがあるのだと思う。
そういう物を、シヨーマは持っていない。

……だから、他人の願望に興味を持つのかもしれない。自分は持てなくても他人のを知れば、持てた気になるから？
……わからない。

私は、シヨーマさんを守ってもらえたら、嬉しいです。

それなら。

シヨーマ自身の願望。記憶を取り戻すこととは、また別の何か。それを、探してみようかと思っただけ。

目指すべき道 (2)

朝。いつもと変わらぬ笑顔でリノンはショーマを見ている。

「おはようございます。今日も頑張ってくださいね」

「おはようございます……。えっと……。その」

昨日かけられた言葉が気になってしまっ。どう相對したものか。

しかしリノンはまるで変わることに無い様子で、やっぱり自分の考えすぎなのだと思うってしまった。

「あ……。鍵です……。はい、これ」

結局そんな事務的な会話しか出来なかった。

「はい。お預かりします」

「そ、それじゃ」

「はい。お気をつけて」

かくして、なんとなく逃げるようにショーマは寮を出てしまった。

黒魔法科。

今日は実践ではなく、教本を読んでまた新しい魔法を修得する日だ。

黒魔法科の授業内容は、教員の解説を聞きながら、配布されたり室内に蔵書されている教本を、自分で解読しながら読み込み、それぞれ自分のペースで修得していく。出来たと判断したなら教員にその結果を試験してもらい、合格を貰えれば定期的に行われる実践訓練を受けられる。そこで実際にその魔法を発動し、成功できれば正式にその魔法の修得が認定される。

それとは別に戦術、戦略考察を主とした講義もあり、そこでは訓練の手を止め、戦場での立ち回りなどが指導される。

最終的に規定以上の魔法を修得し、魔導師としての知識が十分に

あるかを確認する筆記試験をパスすれば、黒魔法科は修了とされる。
ちなみにこの辺りは白魔法科もほぼ同じである。

シヨーマはまず知り合いの姿を探す。すぐにセリアが見つかったが、どうやら別の生徒と話している様子であった。

どうしたものかと迷っていると、向こうの方から見つけられてしまった。シヨーマの気をよそに、早く来いと手を振っている。

「……おはよう」

「おはよう。……ねえねえねえ、この人がほら例の」

挨拶をすると早々、セリアは一緒にいた女子生徒達にシヨーマのことを紹介しようとする。

「れ、例の王子様ですね！」

「だから違うって！」

「あ、ごめんごめん。彼が例のシヨーマ君」

「どうも」

「で、この2人はミモットとコニー」

「シヨーマさん……ですよね。私はミモット。セリアちゃんから聞いてます」

「コ、コニーって言います。ど、どうも……へへ」

セリアから紹介された2人は挨拶する。

「シヨーマ・ウォーズ力です」

倅ってシヨーマも挨拶を返す。

「昨日あの後色々考えてね、この際集まって一緒に読んでみようかってことになったの」

セリアが現在の様子を語る。

「首尾は？」

「まあまあ……ってところ？」

「まあまあか……」

曖昧な表現だった。今日も四苦八苦は続きそうである。

シヨーマも一緒になって悪戦苦闘していると、

「おはよう」

いつの間にか隣の席にメリルが座っていた。

「うわ、びっくりした」

セリア達も驚いていたようだ。もっとも彼女らは、かのドラニクス家の人間が、という点に驚いたのだが。

「……随分と仲が良さそうね」

「え、あ、いやこれは……」

どこか不機嫌そうな声音に若干顔がひきつる。何か嫌なことでもあったのだろうか。

「あ、この子達、教本が難しくて悩んでてさ、手伝ってやれないかと」

「ふうん……？」

セリア達に目を向けるメリル。

「あー、あ、あの、その」

つい気圧されるセリア達。

「何かしら？」

言いたいことがあるなら言ってみるとばかりに、メリルは鋭い視線をセリアに突き刺す。間の席にシヨーマを挟んで。

一方でセリアはいつものはつらつさはどこへやら、思いっきり目が泳いでいる。

（何この状況……）

ミモットとコニーは声も出ないようであった。これではいじめのようではないか。

だが均衡を破ったのはセリアの方であった。

「あああ、あの！ わた私達だけじゃ、あの、これ、魔法教本、その、ちんぷんかんぷんで！」

「……………」
「あ、でも全く手がつけられないほどでは無いんですけど、この調子じゃ初級魔法にどれだけ時間かかるか知れたものじゃないな」
「て、ああああのその」

「……………」

「おおお、……………」 お力を、ドラニクスさんの、お力を貸して貰え、い、頂けたらなんとか、なるかも知れないかなって！」

「私の力を？ 貸してほしい？」

「は、はい！ 貸してほしいです！」

「あ、お、お願いします！」

「お願いします！」

物凄くしどろもどろになりながらも、セリアはなんとか力を貸して欲しい。その言葉を口にした。その様子に驚くばかりだったミモツトとコニーも、最後には一緒に頭を下げた。

対するメリルは悠然と構え、実に落ち着いた物だった。

さすがに異様さを感じたシヨーマだったが、メリルにはそうでも無かったようだ。鋭い視線のままセリアの頼みの言葉を、時折誘いながらじつと聞いていた。

しかしてその返答は、

「良いわよ」

えらくあっさりしたものだった。

「え、良いの？」

驚いたのはシヨーマもであった。

「自分達では手に余るかもしれない、と、ちゃんと認めた上で私に頼ったのでしょうか？ ならば責任を持って手を差し出すのが上に立つ物の務めです」

「上って……………」

確かにメリルの家は上等な名家らしいが、同じ学生だろうにそこ

まで態度がでかくて良い物かとシヨーマは思ってしまった。

「あ、ありがとうございます……」

だが当のセリア達は安堵して、すっかりおとなしくなってしまうていた。

「本当は最初の1冊は自分の力で読み取ってほしかったけど、まあ良いわ。」

……じゃさつそく始めましょう。まずは文字に込められた魔力の属性を把握することから始めるのが良いわね。『アイスストーン』は教本も含めて初心者向けとして作られているから、使われている属性も分かりやすくだら1つよ。何か分かる？」

さつそくメリルはヒントを与え始めた。

「えっと……なんだろ」

「青、でしょうか」

セリアにはわからなかったようだが、ミモットが答えた。

「そう。正解。自分の属性に近いと分かりやすいと言うけど、慣れればその辺はあまり問題は無いわ。」

属性が分かったらそれに対応する方法で、今度は自分の魔力を流し込むの。同じ属性なら文字の魔力を濃くするように、半属性なら割り込んで押し出すように、といった具合ね。ぼんやりとした状態の魔力を感じられやすくなるのが目的。やってみて」

「あ、はい！……んん、ちょっと、難しいですね」

「最初の内はゆっくり丁寧に心を上げると良いわ。何度もやっつくうちに慣れてくるから諦めないで。」

……よく言われる、修得に2週間前後かかる。というのはね。この事に気付くまでに1週間。そして後の1週間で全文を読み取るから、と言われているわ」

「じゃあ私達は……」

「まだ1週間かけて、焦らずじっくり頑張る必要があるわね」

「おお……！」

メリルの指導を受け、セリア達3人は感銘を受けているようだった

た。1ヶ月かかるかも、なんて弱気だったのを思えば、それも当然だろうか。

「良かった……。正直絶対断られると思ってました……。これで何とかなりそうです」

「貴方達はその姿勢が良かったから、応えたの。調子に乗っちゃダメよ」

「……あ、はい！　ありがとうございます！　もうちょっと頑張ってみますね！」

「『もうちょっと』じゃなくて『最後まで』」

「はい！」

「正直俺も意外だったよ」

せつせと教本を読み解いている3人を横目に、シヨーマはメリルに話しかける。ひよっとして教えたくてしょうがなかったのでは？とすら思った。

「上に立つ者の務め、って言ったでしょ」

「そこが良くわからないんだけど」

「ああ……」

メリルはそういえばシヨーマが一部の常識も忘れていることを思い出した。

「この国では、貴族と平民の差が強いつてのは、分かる？」

「平民は本当は士官学校にも入れてもらえないし、寮も分けられるんだろう？」

「そんな程度じゃ無いわよ。もっと過激な考えをする人もいるし。

平民を人間扱いすらしないという貴族も珍しく無いわ」

「そんなに……？」

「その辺の考え方はまあいくらか違いがあるけど、少なくとも到底埋められない貧富の差なら、確実にあるわね。」

……私は生まれつき何でも持つてる富裕層の側で、貴族も平民も平等であるべき。なんてまったく思わないくらい、身も心も貴族であるつもりだけれど、だからこそ貴族は……、「力」を持つている者は、持っていない者に「責任」を負うべきだと考えるわ」

「『責任』？」

「例えば武力であるとか、権力であるとか。財力等も。使いようによつては人の命くらいなら簡単に左右できてしまう。そういう『力』を正しいことに使うという、『責任』。

と言つても、ただ無闇矢鱈に施しを与えれば良いつて訳でも無いわ。

力を持つ『強い者』は力を持たない『弱い者』をただ無条件に守るため、その力を行使すれば良いのではない。それは結局『弱い者』による立場を利用した『強い者』の支配と言う、逆転構造なだけ。

だから、強い者は『力』を真に必要としている者を見極め、必要な分だけを与え、あとはその者自身の『力』に託すの。さつき私が彼女達にしたようにみたいだね。

弱いことを自覚し、強い者に頼る。強い者は力を無闇に振りかざさず、助けを求める声に応える。助けられた者は、結果を果たすこととでその恩に報いる。

当たり前のことを認め、真摯に受け止める。それが『責任』という物。強い者と弱い者のそれぞれにとってね」

「……自分じゃどうしても出来ないことには力を貸すけど、出来ることには貸さないってことか。助けてもらった側は、ちゃんとそれを活かして最後まで目標を達成させる」

「かいつまんで言えば、そういうことね」

少し長い話を聞かされてしまったが、メリルの心根にしているものがどこか見えた気がした。

「貴方はどうなの？」

「え？」

「貴方は自分の『力』を責任持って扱える？」

……その問いかけは、何か大事なことを試されている。そう、感じられた。

考える。

メリルの言うことに賛同するならば、力に責任を持つということ
は、自分の『能力』をただ制御できれば良い。という考えでは間違
いだ。『とりあえず誰かに迷惑をかけるようなことが無ければそれ
で十分』という考えではいけない。もしこの『力』を求める者がい
たとしたら、それに応えて初めて『責任』を持ったと言えるだろう。
だが、それはシヨーマが『強い者』であるならの話だ。

そんなことは無い。力なんて欲しくなかった。誰にも迷惑をかけ
ないようしつかり押さえつけて、静かに暮らすならそれで良いだろ
う。誰かの助けになんて応えられない。自分は『弱い者』なんだ。
……そう言っつて否定の意思を表せば、その意見はきつと認められる
だろう。

どちらを選んでも、きつと彼女は受け入れる。

ならば、選ぶのは、シヨーマがこの『力』をどうしたいか……。
それによる。

それなら……。

「持ちたい。と考えているよ」

選んだのは『強い者になりたい』だった。

「……でも今ははつきり『持っている』とは言えない。今の俺には
……自分を支えられる物が無いから。目指すべき物を、見つけれ
ていないから」

それが偽りの無い今の気持ちだ。他人に迷惑をかけたくないとい
う考えは、結局のところ過去の経験から来るものでは無い。あくま

で記憶が無いなりにだが、一般的で常識的な感覚によるものだ。
何より、支えに出来る物を探そうとは、昨日決めたばかりだった
のだから。

私は、シヨーマさんに守ってもらえたら、嬉しいです。

あの言葉に応えたいと、思った。

「そう……」

メリルはそれを聞くとしばし黙考し、

「悪くない答えだと思っわ」

優しく微笑んで、シヨーマの意見を認めた。

「……ありがとう」

「……そうね。じゃあ、そう思うならさっさと行動しましょうか」

「えっ？」

「ちゃんと責任、持てるよう。まずは下級魔法から順に使いこなせるようにしていきましょう」

メリルは椅子から立ち上がる。

今は、授業中だった。

「あー、ところでレウスは……？」

「今は剣術科に行ってるわ。ここに来る前会って話したから。何か気になることがあるみたい」

(デュランのことかな……)

「それよりさっさと覚えるだけ覚えて試験受けて実践しに行くわよ」
メリルは本棚から下級魔法の教本を見繕い積み上げていく。

「俺は覚えることより経験を積みたいんだけど」

「覚える物覚え尽くしたらいくらでも実践させてもらえて経験積み

るんじゃない？ 下級魔法なんてそんな扱いに困るものでも無いし、それならさっさと済ませて中級上級に時間をかけるべきよ」

「そ、そういう物かな……」

それにしてもなぜこんな協力的というか、強制的なのだろう。そんなにさっきの問答が気に入ったのだろうか。

「それに貴方の言っていた……不用意に魔法を発動させて迷惑をかけたくない？ って言うのも、正直、志が低いと言えるわね」

「う、わかってるよ……。俺も『責任』、てやつを持ちたいし」

「なら口答えしないでさっさと読みなさい」

「はい……」

初級魔法教本、13冊が積み上げられていた。

「目が疲れる……」

魔法教本を読み解くという行為自体に苦は無いても同然なのだが、13冊の本を一気に目を通すというのは普通に疲れる行為だった。

ちゃんとこの後の白魔法科でも下級魔法はさっさと覚えておくのよ。良い？

白魔法科には参加しないメリルは釘だけ刺して、自分は竜操術科の授業に行ってしまった。

白魔法は人の怪我を癒したり、瘡気を被ったりと、割と分かりやすく人の役に立つ魔法が多い。『責任』を持つならこちらの方が活躍の機会は多いかもしれない。

「やあ、シヨーマ。おはよう」

授業が始まるまで教室で待機していると、レウスに声をかけられた。

「ああ、おはよう。剣術科行ってたんだって？」

シヨーマも挨拶を返す。

「ああ。昨日は中々良い経験が出来たからね。体を動かしたくて」

「あ、昨日の……結局どうなったんだ？」

攻め立てていたのはデュランだったが、結果自体はほとんどレウスによる一方的なものに見えたが。ていうか、良い経験って……。

「結局彼の方がダウンしてしまったよ。回復魔法もかけておいたし、大丈夫だろう。今日は来てくれなかつたけど」

「お前が痛め付けすぎて嫌になつたんじゃ……」

「そのくらいでへこたれるような人物じゃないさ。剣を交えればそういうのはわかる」

「そういう物が……？」

楽観的などころがありそうなレウスだ。なんでもかんでも好意的に考えているだけじゃないかとも思ってしまう。

「それより君もなんだかお疲れ気味のようだね」

「ああ、まあ……ちよつと積極的になつてみようかと」

「へえ……？ 聞かせてくれよ」

「ああ……」

それからというもの、時間は矢のように過ぎていった。

やりがい、とでも言うのだろうか。これから進みたいと思えることを見つけたシヨーマは、駆け抜ける様に日々を過ごしていた。

そして入学から約4週間。シヨーマは中級魔法のいくつかまでを修得し、一番最初に覚えてしまった上級魔法、『サンダーストーム』を含めた実践訓練を行うため、士官学校から少し遠出した場所にある、廃材置き広場に來ていた。

ちなみについ先日、無事3つ目の初級魔法を修得し、一緒に参加できそうだと喜んでいたセリアは、シヨーマとは別の場所で行うことを知り、とても残念がつていた。

今日の実践は広範囲に効果が及ぶ黒魔法を修得した者のためであり、シヨーマを含めて4人のみの参加となっていた。他の参加者は

双子のリシウス・オーディナ、サーナ・オーディナの兄妹と、竜操術科の合同授業として参加しているメリルである。

指導教員は黒魔法科からラーニヤ教員と竜操術科からアウディ教員が参加し、さらには大きな魔法を使うため、補助員として騎士団から派遣されたルーシェ・ヴィアンヌが参加していた。

「騎士の人まで来るのか……」

「失礼の無いようにね」

シヨーマはメリルと囁きを交わした。

……思えば不意にこの『サンダーストーム』を放ってしまったことが、今ここにいることの始まりだった。

この力を制御する。それが最初の思いだった。今はもっと、『活かす』ことを考えている。

「それではさっそく始めましょうか。まずはシヨーマ・ウォーズカ君」

「はい」

上級魔法『サンダーストーム』……。暴風を巻き起こし対象を閉じ込め自由を奪い、その中に強烈な雷撃を次々と撃ち込む黒魔法だ。その威力はまさに破壊的。大軍勢を一撃で凪ぎ払うとも言われているほどだ。

ゆっくりと魔力を練り上げる。以前は慌てていて、ほぼ無意識にかつ急速に練り上げてしまっており、精度がかなり雑だったことが今ならわかる。

続けて術式を組み上げる。こちらはそう形が崩れたりもしない。落ち着いて確実に行う。

「うん。出来ましたね。では一発派手にやっちゃっていいですよ」

正直なところまだ怖いという気持ちはある。あの時の失敗。死傷者こそ出なかったものの、ずいぶんと背筋が冷える思いをした。学校の授業が始まってすぐには積極的になれなかったのもそのせい

だ。

でも今は、違う。

「『サンダー……ストーム』!!」

目標と見定めていた廃材の一角を中心に、風が巻き起こる。一瞬にして砂と廃材を巻き上げ、暴風へと成長する。そして激しい雷鳴が数秒間に渡って鳴り響く。

やがて風がかき消えると、その場はまさに焦土。雷撃を受けいくつかの廃材には火が燃え移っていた。

「はい。良く出来ました。もうちょっと強く魔力を込めても良かったですかね」

「あ、はい。ありがとうございます」

「はい、では次はオーディナ兄妹方。……今日は人数が少ないのでたくさん練習出来ると思いますよ」

シヨーマの様子に、満足がいつていないことを見抜いたラーニヤ教員は助言をする。シヨーマとしても、今日はそういう期待をしていた。

「まあ、これからって感じかしらね」

そっけない感じでメリルはシヨーマの『サンダーストーム』を評価した。

「そうだね。これからだ」

シヨーマは軽い言葉でも真摯に受け止める。

その様子にメリルは意外そうな顔をしたが、すぐに少しだけ不機嫌そうな顔になり口を尖らせた。

「……ふんだ」

その様子にシヨーマは笑みをこぼす。

「ほら、そろそろメリルも準備しなよ」

「わかってるわよ」

いつのまにかさん付けやめてるし……。

ひっそりと誰にも聞こえないよう、セリアはひとりごちた。

若い騎士候補生達を見つめる騎士ルーシエには狙いがあった。

既に抜きん出た才を持つ者を見極める。それこそ將軍級の器の持ち主。はたまたもつと大きな、国を動かしていくことになるであろう、未来の力を探し出す。

騎士団大隊長の1人、ブレアス・ブラウブの命であった。

せつかくだ。そろそろ戦を経験させて良いと思える者を見繕ってきてくれ。

……まだ学び始めて1ヶ月弱。さすがに時期尚早すぎるとルーシエは考える。だが、將軍級ともなりうる者ならば、たかが中隊長の自分の考えよりずっと上を行くのかも知れない。いや、そうでなくては困るのか。

……慎重に見定める必要がある。ルーシエはまずはこの4人の若者達をくまなく見定めることとした。

第1小隊、集う

リヨール士官学校新1期生が入学して1ヶ月半が経ったその日。彼らの中から特別に選抜された16名が召集を受けた。

ブランジア王立鳳凰騎士団による、13箇所もの魔族の拠点への総攻撃作戦。その拠点の1つが騎士候補生に任されることとなったのだ。

講堂に集まった彼らの前にボンボーラ教員が立つ。

「えーこれは諸君らにとつて、初の実戦となります。急な話ではありますが、どうかこれは好機だと思ってください。人より早く、1つでも多く経験を積んだことは、いずれ騎士となった時、大きな財産となるのですから。」

……まさか辞退したいと言う者はいませんか？」

拒否など認めない。という調子であった。

何より、自ら士官学校に志願したのなら、誰もがいずれ戦闘行為に参加することは、すでに覚悟の上のはずなのだ。普通は。

とはいえまだ入学して1ヶ月半の新人。自信のある者無い者、混在していた。思いもかけない急な実戦への参加命令に、戸惑いを隠せない者は多い。

「不安ですか？ ですがまあ、今回の任務は正規作戦のついでのような物。1番の目的は君達に経験を積ませることなのです。えー攻撃対象の拠点は小さいものですし、支援者として騎士団から中隊長を勤めている方が2名派遣されています。彼らがこの作戦に随伴します。危険はほぼ無いと言って良いでしょう」

ボンボーラは傍らに立つ2人の騎士に手を向ける。

「紹介します。えーこちらは『黒騎士』のクラスを持つルーシエ・ヴィアン又殿。そしてこちらは同様に、えー『白騎士』のクラスを持つロックス・バネン殿です。彼らがいる限り、少なくとも作戦に失敗は無いです。安心してください。……とはいえ、あくまで

も作戦の主役は君達です。自分達の身は自分達で守り、自分達の敵は自分達で倒す気でいるように。

えーそれではよろしくお願いします」

真紅の甲冑に身を包む女性騎士、ルーシエから作戦の具体的内容が発表される。

「紹介に預かった騎士、ルーシエ・ヴィアンヌだ。

今回君達が攻撃する目標は、ここリヨール士官学校より南方へ8時間ほど行った場所に存在する廃村に住み着いた魔族どものねぐらだ。事前調査からの危険度判定は最下位のDランクとなっている。

明後日0800時よりここを出立し、途中、簡易拠点を設置し夜営を行う。ここで小隊を直接攻撃部隊と拠点防衛部隊の2組に分ける。攻撃開始は翌昼前ごろとなる予定だ。

目標の廃村では敵拠点が2ヶ所に別れているため、片方を殲滅した後、小隊の役割を入れ替え、もう片方を殲滅にかかる。どちらの小隊にも攻撃と防衛を経験してもらおうわけだ。

両拠点を攻撃し終えるのは夕方ごろの予定だ。もう一晚をそこで過ごしたら、拠点を撤収し、リヨールへと帰還する。以上が作戦の概要だ。

それでは隊の内訳を発表する。既に教員方と会合を済ませ君達の戦力バランスを考慮し、小隊長を含め決定してある。ではロックス、よろしく」

「はい。騎士、ロックス・バネンだ。……まずは第1小隊。小隊長、レウス・ブロウブ。以下、バムス・ワグマン。デュラン・マクザス。ローゼ・クラリア。メリル・ドラニクス。フィオン・マニ。セリア・フォール。そしてシヨーマ・ウォーズカ。以上8名だ。

続いて第2小隊は、小隊長、リシウス・オーディナ……」

初の実戦。急に召集を受け、小隊を組まされさあ戦えと言われて、

不安に感じるところは多かった。だが実際はショーマとは割と仲の良い人物が多く、いくらか安心感があった。これが初めて顔を付き合わせる者しかいなかったら、記憶喪失のことやら、能力のことやらから、いちいち説明するところから始めなければいけなかったかも知れない。バランスを考慮した、とはもしかしてそういう要素まで気にしているのだろうか。

だが、少々解せない部分もあった。

ブロウブ家のレウスは実際実力もあるし、リーダーとしてのカリスマもある。納得だ。

早くも魔法系科目では学生トップクラスの座となったメリルとショーマ本人の選抜にもまあ納得ではあった。

顔を合わせたことの無い面子は未知数なので置いておく。

そう。果たして、デュランとセリアは抜きん出るほどの物を持っていただろうか。しばらくデュランのことは見ていなかったから、案外急成長しているのかもしれないが。

となると問題はまあ、セリアだ。メリルの助力のおかげか、全くの素人にしては、今の彼女の修得済み魔法は多い方と言えた。だが名家出身者には彼女より上の実力者はもつといただろう。

案の定セリアの様子をうかがうと、自分は場違いなんじゃ？とばかりに居たたまれない様子でいる。私語は禁止されているので何も言ってもやれないのが申し訳無い。

果たして、このメンバー選抜にはどういう意図があるのだろうか。

小隊の内訳が発表されると、作戦に必要な物品の準備に関する説明がされる。

戦闘用装備と、行軍、夜営などに必要な資材、食料などは、申請を行って学校の備品を借り受けることを許可する。自前で用意する場合は整備、確認を必ず行っておくこと。その点も含めてこの後、

小隊メンバーで打ち合わせを行い、お互いのことを確認しておく。

作戦が開始されたら行動の指針は2人の小隊長に委ねられる。随伴する騎士はあくまで付き従い、いざという時に助言や戦闘援護をするだけとする。

それから作戦内容の詳細は基本的に外部へは漏らさないこと。など。

「説明は以上。進軍開始の明後日0800時の30分前には装備を整え、校内中央広場に集合せよ。何か質問はあるか」

「はい」

不機嫌そうに眉を寄せている男子生徒が手を挙げた。

「名前を」

「バムス・ワグマン」

武門に秀でた名家の1つ、ワグマン家の嫡男であった。いずれ家を継ぎ一族を担うことになる、若い輝きの持ち主だ。

「よし。聞きましょう」

「メンバーの選抜理由について聞きたい。……まだまだ実戦で使えそうも無いヤツが混ざっているように思えるが？」

セリアがその言葉に、びっくりと肩を震わせていた。あの物言いはシヨーマもムツとなる所はあったが、今は大人しくしておく。実際、シヨーマもその質問の回答には興味がある。セリアには後で何か言葉をかけておこうと決めた。

騎士ルーシエが答える。

「教員方と会合を行い、作戦に参加するのに十分必要なだけの修練を積んだと認めた者から選出している。問題は無い」

「だったらもつと使えそうなヤツもいたと思うが？」

「成績優秀な者から順に選抜したわけでは無い。小隊内の戦力バランスを考慮して決めさせてもらった」

「答えになっていないな」

言い訳じみた回答に、バムスは納得しない。

「では言おう。……例え現在の段階で未熟であっても、今後の成長を期待させる者から数名を選ばせてもらった」

「足手まといを抱えろってことか？　だがその今後の成長とやらも死んだらそこでお仕舞いなんだぞ」

「小隊内の戦力バランスを考慮して決めていると言った」

「ハッ。結局足手まといを抱えろってのは否定しないか。まあ良い……質問は以上かね」

「ああ。フン、ありがとうございました」

不服ではあるが納得はしてやるといった様子であった。

「うむ。他に質問の有る者は？」

「あ、はい……よろしいですか」

気の弱そうな女子生徒が手を挙げた。

「名前は」

「はい、フィオン・マニ、です」

「よし、聞きましょう」

「その、もし、……し、死んで、しまったら、どういう扱いになるんでしょうか……」

「今回は騎士団の作戦の一貫ですので、騎士団員として戦死扱いとなります。騎士団長から勲章が与えられるでしょう」

「あ……、わかり、ました。……あ、ありがとうございました」

フィオンという女子生徒は消え入りそうな声で質問を終えた。

「他に質問の有る者は？　……いないようですのでこれで解散とします。この後小隊メンバーで集まり打ち合わせを行っておくこと。

それでは、明後日にまた会いましょう。ボンボラ殿。我々はこれにて」

「ええ。では明後日に、またよろしくお願いします」

講堂から去っていく騎士を見送りながらショーマは、死んだらそこでお仕舞い。その言葉を噛み締める。難易度の低い作戦とは言え、命の奪い合いに違いは無いのだ。

もし死んでしまったら、どうなるだろう。痛いだろうか、苦しんだろうか。残された皆は何を思ってくれるだろうか。

レウスは、メリルは、セリアは、リノンさんは、オードランのお爺さんは。

…… 上手く想像できない。

(…… 怖いな)

だが怖がっていても進めない。やると決めたことが有るのだから。覚悟を決めようとする。

「よし、それじゃ第1小隊のメンバーは集合してくれ！ 打ち合わせを始めよう！」

レウスが集合をかける。小隊長として、彼には皆を率いる責任があるのだ。

第1小隊メンバーはショーマにも馴染みの有る人物が多い。レウスやメリルは心強い存在だし、気心の知れた友達のセリアもいる。親しいとまでは言えないが、以前見たデュランの負けん気は信頼に足るだろう。

問題は残りの3人だ。

(げ……)

その内の1人は先程の暴言とも言える言葉を発した男、バムスであった。小隊のメンバーが発表されたのは彼が発言する前だったので、同じ小隊だということには今更気付いた。

案の定、セリアは彼には近付きにくそうにしており、目を合わせないようびくびくしている。ここは何か言っただろうかと考えたが、

「足手まといにならないよう、お互い頑張りましょうね。バムス・ワグマン君」

メリルに先を越されてしまった。

「フン、……精々尽力させていただきますよ。ドラニクス嬢」

この小隊内でも、1、2を争う実力者にそんなことを言われては、バムスも大きい態度は取れなかった。そんな様子について呆けてしまいうショーマだったが、メリルがああ言ってくれたのなら、自分はセリアに声をかけるべきだと思い、立ち直る。

「セリア、あんまり気にするなよ。……今回は、みんなで協力しあう必要があるわけだし」

「あ、ショーマ君……。うん、わかってるよ。正直不安で一杯だったけど、ああいうこと言ってもらえるたら、うん。頑張れるよ。……それに、騎士の人から期待されてるって、言ってもらえたわけだし」

「そっか」

「……かっこいいよね、彼女」

「そうだな……」

凜と振る舞うメリルには、きっと誰だって目を奪われるのだろう。ショーマにだってそう感じることはこれまでもよくあった。

「ほら、そろそろ始めるよ。じゃあまず円になって集まろうか」

レウスの呼び掛けに、今回行動を共にすることとなる8人が円を描いて座る。

「では自己紹介から始めよう。僕から時計回りの順で、専攻科目や得意技、苦手なことなど有れば言ってくれ。それでは」

……レウス・ブロウブ。今回小隊長を任された。専攻は剣術科。補助に白魔法と黒魔法。どちらかと言うと白魔法の方が得意だ。

今回の作戦では、みんなには自分出来ること、出来ないことを

しっかりと把握してもらい、協力して成功させることを意識してもらいたいと考えている。以上だ」

「メリル・ドラニクス。竜操術科専攻です。補助に黒魔法科。得意なことは広範囲攻撃魔法。個別の白兵戦や補助魔法の類いは少し苦手と言えるわ。連携するとなるとこちらの都合に合わせて動いてもらうでしょうから、よろしく。以上よ」

「シヨーマ・ウォーズ力です。えっと、黒魔法と白魔法をそれぞれ。攻撃、回復、共に覚えてはいるけど、実際の戦闘に関してはまだ素人です。上手くないことが有るかもしれませんが、よろしく。

……以上です」

「あ、は、はい！ セリア・フォルです。下級黒魔法が4つ使える、だけ、です……。頑張ります……。あ、以上、です」

「ローゼ・クラリアです。専攻は弓術。スキルランクはAから9に昇級したばかりです。近接や魔法は出来ません。以上です」

「あ、えっと、フィオン・マニです……。薬師術科専攻です。爆薬とか得意です。治療薬の調査はまだ苦手ですけど、使用は出来ますので、学校から借りられるだけ、用意しておこうと思います……。以上です」

「バムス・ワグマン。格闘術科専攻だ。ランクは6。以上」

「……デュラン・マクザス。専攻は剣術と槍術。今は槍の方が主力だ。……それから、魔法は全般的に不得手。以上だ」

それが第1小隊、最初の8人の初めての顔合わせであった。

「うん。近接が3人、魔法が3人、弓が1人に薬師が1人。確かにバランスは良いね。ただ攻撃に寄りすぎかな。……それじゃシヨーマ、君には黒魔法より白魔法を優先してもらいたい。フィオンも、回復薬を優先的に準備しておいてくれ。この2人を主な回復役とする」

「ああ、わかった」

「は、はい。鞆から出しやすいように、しておき、ます……」

「うん、頼むよ。」

では次に、実際に拠点を攻める際の具体案を考えよう。各々の能力を活かすことを考えるとまず、安全な場所からメリルの大規模魔法で、ねぐらにされている建物ごと先制攻撃を仕掛け、その後撃ち漏らした敵を弓と近接隊で各個撃破して片を付ける。という形が良いと思う。

その際弓担当のローゼ、君は出来れば敵の接近できない、何か高台のような場所に陣取って、安全に狙撃出来るようにしてもらいたい。これは実際にその場に行かないと出来るかわからないけどね。

首尾よく陣取れそうな場合、護衛にセリアを付けようと思う。万が一接近された時も、魔法を待機状態にしていれば、初級魔法でも素早く対応できて、安全に迎撃出来るはずだ。接近された敵の数が多い場合は、臨機応変に他のメンバーから護衛を追加させるから、持ちこたえて欲しい。

回復役をやってもらうショーマ、フィオンは近接3人の後方で待機していてくれ。戦闘に巻き込まれないよう程度には遠く、お互いの援護がすぐ出来る程度には、近くね。場合によってはローゼ、セリアの方に向かってもらおう可能性もあるだろう。

大体こんな考えだけど、皆はどう思う?」

レウスはひとしきり自分の案を出し終わると、他メンバーの相談を仰ぐ。

「よろしいでしょうか?」

弓術師ローゼが拳手をした。

「どうぞ」

「メリル様の大規模魔法とは具体的にどの程度の破壊力が有るのでしょう。想定より敵拠点が大型だった場合、効果が薄い場合が有ると思われれます」

「うん。そこはメリル本人から答えてもらおう。君が今使える最大威力の魔法はどれか教えてくれ」

「威力と効果範囲で言えば『タイダルフレイム』かしら。最大直径

30メートルぐらいまでなら行けるわ。でも『アイススピア』の3重発動の方が効率が良いかも。こっちは1発ごとに直径8メートルつとところだけど。まあ拠点の形状次第で決まるわね」

「3重発動……」

誰かが小さく驚きを口にしていた。

「……わかりました。それほどの使い手ならば問題は無さそうですね」

その答えに頷くローゼ。レウスはついでにと補足する。

「うん。それにショーマにも黒魔法『サンダーストーム』があるから攻撃力が足りないということは無いと思うよ」

そこにデュランが異を唱える。

「待て。そこまでされたら他の連中は出る幕が無いぞ。戦果無しで帰れと言うのか」

「うーん。誰かが頑張っても誰かが頑張れなくても、上手くいけば小隊全員の戦果だし、上手くいかなければ小隊全員の失敗ということ。では駄目かな」

「ただ見ているだけなのは経験を積むとは言わん」

レウスの返答には不満そうなデュランである。

「それは僕も思うよ。まあそうだね。わざわざ手加減するようで癪かも知れないけど、メリル、一撃で終わらない位の魔法を選んで攻撃してくれるかい？」

「ええ。構わないわよ」

「ふん……まあ良いか」

それで一応は納得したようだった。

だがそれに対し何か言いたげな男がもう1人現れる。

「おいデュランとか言ったか」

バムス・ワグマンであった。

「お前、随分戦果が欲しくてたまらんようだが……。功を焦って先走って隊の和を乱したりなんかするなよ。そんなんでも不用意に負傷するようなバカがいつの時代にだっているもんだが……。そういう

のを足手まといっけ言っただ。知ってるか？」

先程の暴言を今度は直接投げつけた。だが大人しく聞いておくだけのデュランでは無い。

「俺の知っている足手まといという言葉は、口先だけ達者で何の役にも立たない奴を指す物だったが」

「フン。言うじゃないか」

「やめないか2人とも」

一触即発の空気に、さすがにレウスが割って入る。

「気がはやるデュランの気持ちも、心配してくれるバムスの気持ちもわかるが、そういう態度はお互いやめよう。さすがに戦場でまでそんな調子でいられたら困るぞ」

「……………」

「フン」

2人も本気で言い争うつもりは無いようで、その場はすぐおさまった。

「とにかく、作戦を無事に完遂させることが最大の目標だ。無事に、つていうのは全員何事も無く生きて帰るつてことだよ。良いね？」

「ええ。月並みな言葉で言えば、皆で力を合わせて頑張りましょうつてことかしら」

レウスが釘を指す。そしてメリルが補強するように続けた。

「それじゃ、特に意見や質問、代案等が無いならこの方法で行こうと思う。賛成か反対かの意見を聞かせてくれ」

「ふん。まあ足手まといの自覚がある足手まといなら抱えてやるのもやぶさかではないさ。………… 小隊長殿。あんたの案に賛成の意を表しよう」

「小隊全員の戦果。まあ今はそれで納得しておくさ。レウス、お前の案に賛成する」

バムスとデュランが一番に賛成する。

「私も問題ありません。賛成です」

「うん、お前に任せるよ。俺も賛成だ」

ローゼとシヨーマが続く。

「わ、私も、賛成……！ 未熟者ですけど、私なりに全力で頑張ります！」

「あ、あの、私も、賛成、です……」

セリア、フィオンも賛成した。

「それじゃ、後はメルル、君だけだけど。……君が計画の要となるが……。この案、どうだろうか」

「ふん。何かあったらもうとつくに言っていたわ。……私もこの案に賛成よ」

「うん。ありがとう。……では全員の賛成を受けたので目標への攻撃方法はこれで行くこととする。」

では次は当日必要となる荷物の用意に関してだけ……」

こうして彼らの初めての实战の用意は着々と進んでいった。

急な話に戸惑いのあった彼らだが、ああだこうだと言葉を交わしていくうちに、お互いのことを少しずつ知り、信頼へと繋げていった。

この仲間達とならきつと出来る。そう思えるようになっていった。

……初めての戦いは、確実に近付いてきている。

学術都市リヨール、廃村の道のり (1)

シヨーマ・ウォーズカにとって初めての实战。廃村にめぐらを持った魔族達への攻撃作戦。それが開始される日が到来した。

天気は快晴。恐らく明日もそうなるだろう。

目覚めの心地は程好いもので、適度な緊張とリラックスした気持ちが入り交じる。

……良い感じだ。

大した物の置かれていない殺風景な部屋を見渡す。もう1ヶ月と半分をここで過ごした。時間が経つのは早いものだ。

……部屋の隅に置かれた1つの鞆。あの中には色々と大事な物が入っている。だが、今日はそれを置いていく。今日と明日の自分には必要無い物だ。……だが必ず取りに戻ってくる。そう決意を固めて、部屋を出る。

「おはようございます。リノンさん」

「おはようございます。シヨーマさん。今日は少しお早いですね」「ごく自然に挨拶を交わす。……この笑顔を見納めにはしたくないと思う。」

「はい、鍵です。……今日は、その、用事があって。帰るのは明後日ぐらいになるかもしれないです」

「あ……」

リノンにも、その用事には思い当たるものがあつた。件の作戦に関して、詳細こそ伏せられているものの、既に学生達の間では噂になっていた。学生達の間で噂になっていけば、自然とリノンの耳にも入る。シヨーマがそれに参加するとまでは知らなかったが、すぐに気付いた。

「あ、あの、ちょっとだけ待っててもらえますか？」

「あ、はい……」

受付の奥にリノンが引っ込んでいく。2、3分で戻ってきた。

「これを……」

リノンが差し出したのは、ペンダントのようであった。

「えっと……？」

「お守り、みたいなものです」

「いや、結構高価そうに見えますけど……こんなの」

「そうですね。だから……、ちゃんと返してくださいね」

いつもの優しい笑顔に、ほんの少し意地悪っぽさを混ぜたような笑顔だった。

「……わかりました。必ず」

シヨーマはペンダントを受け取る。その手にリノンはもう片方の手を重ねた。

「……あ、あの。そろそろ行かないと」

予想もしていなかった行為に、顔が熱くなる。

「はい、そうですね……」

そう言うリノンだったが、中々手を離そうとしてくれない。

どれくらいそうしていただろうか。数分か、数秒か。こんな状況では、どうにもその辺の感覚があやふやになってしまう。

やがて、名残惜しそうにその手が離れた。

「ごめんなさい。引き留めてしまって」

「いえ、良いです。……それじゃあ、行ってきます」

「はい。……行ってらっしゃい」

シヨーマはもう1度だけ、その笑顔を目に焼き付けてから寮を出た。

集合時間、0730時となった。リヨール士官学校校庭には16

名の作戦参加者と、随伴する2人の騎士。そして指導教員のボンボ
ーラが揃っていた。そして彼らを見送ろうとする同じ学生達が15
人ほど集まっていた。

「全員いるようだな。よろしい。では出立時間まで、所持品の最終
確認を行いなさい」

作戦参加者達は、各々が専攻していた『クラス』の装備に身を包
んでいた。

シヨーマは簡単なプロテクターを着けた服の上に、『白魔導師』
のローブと、回復魔法の効果を高めるヒーリングワンドを。リノン
に預かったペンダントは服の下にしまいこんでおく。

レウスは要所にのみ金属板を当て、軽さを維持しつつ防御力を高
めたレザーアーマーに、小隊長の証として用意された、紋章の入っ
た赤いマント。腰にはバランスの良さに定評の有るブロードソード
を挿す、『剣術士』の出で立ちだ。

メリルはいつも着ている高そうなブラウスとスカートの上に、ド
ラニクス家専用で作られた高級感の有る『竜操術師』のコート。

セリアは一般的な『黒魔導師』のコートと三角帽子に、魔力を集
めやすくするマジックワンド。

デュランはレウスと同じタイプのレザーアーマーに、大きめのガ
ントレットを装備している。腰には刃渡りが短めの剣、グラディウ
ス。背中には羽飾りが特徴的な軽めの槍、フェザーランス。少し正
統とは異なるスタイルの『槍術師』の姿だ。

バムスは身軽なレザージャケットに、ゆったりとしたズボン。そ
して拳を保護する装甲板の付いたグローブと、丈夫なスパイクが付
けられた攻撃用レガース。西の海の向こうから伝来されたという独
特の格闘術、テオ式の装備をまとった『拳術師』だ。

ローゼは金髪をつむじの辺りで結わえ、金の糸で装飾された上着
に、ベルトには矢筒を装着し、その上から腰布を巻く『弓術師』の
姿だ。背中には長距離用弓、レーザーロングボウを装備する。

フィオンは大きな鞆を提げ、腰のベルトには開きやすい小型のポーチを2つ付ける。衣装は外気を通しにくい、厚手のジャケットと活動しやすいズボンにブーツ。『薬師』の姿だ。目深にかぶった大きめの帽子は自前で用意したと思われる。

その他には、余裕を持って用意された2小隊4日分の食料や、夜営用の資財。予備の武装。それを乗せる運搬用荷車と、それを引く馬が2頭。

特に準備に不備は無いことが確認され、出立の時間を待つのみとなった。

「えーあと5分ほどとなりましたね。日頃の成果を發揮し、作戦を成功させることはもちろん。小隊での行動や、日を跨ぐ長時間活動、そして殺し殺される戦場。学校では中々教えにくいこともあります。良い経験を全員が揃って持ち帰られることを期待しています。それでは」

ボンボーラ教員が、出立前のメンバーに声をかける。

それを聞き、皆は改めて不安や自信、色々な物を感じる。自分達の遠くと近くの未来を。

「さあ、時間です」

「それでは、リヨール士官学校1期生、第1、第2小隊。作戦を開始します！」

0800時。第1小隊長レウス・ブロウブの号令と共に、16名の学生達は歩を進める。

リヨール市街を1周する城壁を、騎士団専用の門から抜ける。一般の者は使用できないため、彼らを見送るのは士官学校の教員と生徒達、城門の見張りのみという少数である。

「まずは南東、鉦山都市デンホールに向かう街道を進む。その途中

で街道を逸れ、目標の廃村に向かう。街道を行く間は楽なものだから、リラックスしていこう。多少の雑談も認めるよ。……ただし言い争いにはならない程度にね」

レウスが代表して指針を示す。先は長い。まだ緊張している者もいるようだし、必要以上に構えるのも疲労を増やすだけだ。まずは落ち着くことから始めさせたかった。

隊列は馬車の前を第1小隊が、後ろを第2小隊が進むが、第2小隊長のリシウスは最前列、レウスの隣を進んでいる。随伴する騎士の2人は、ルーシエが前、ロックスが後ろだ。

「我々騎士2名は極力手も口も出さない。君達の判断で行動したまえ。助言を求めるのは構わないが、最低限にすること。ただし夜営の準備においては、我々も食事と休息を取る必要があるので協力させてもらおう」

「はい。よろしくお願いします」

街道に行くこと約1時間。この辺はまだ緑豊かで雄大な草原が広がっていた。何も無いだけとも言えるが。

「最初はちよつと景色に感動もしたけど、退屈と言えば退屈だね」

「はは。そだね」

シヨーマは隣を歩くセリアと話していた。

「でも今日までずっとときどきしっぱなしだったから、私としては落ち着けてありがたいかな」

「そういう考えもありか」

「うんうん。ところでシヨーマ君、この格好。どうかな」

セリアは黒魔導師装束をひらりと振って見せる。

正直着るより着られているという感じではあったが、

「うん、まあ中々似合っているんじゃないかな」

とりあえずおだてておいた。

厚みのあるコートの上からでも分かる、相変わらず主張の激しい

胸元だとか、裾からちらりと覗く健康的な足だとか、気になるところもあるが、口にしたら怒られる気がしたのでやめた。

「シヨーマ君はなんかいつもより知的に見えるかも」

「普段はそんなに見えないんだね」

「ふふふ」

白いローブで足まで覆った姿は、眼鏡と相まってまあ清潔で知的な印象を与えるというのも分かる話ではあるが。

ちなみに魔導師の着用する衣服は、大抵裏地や繊維そのものなどに、魔力や簡易術式が刻まれており、魔力を行使することで防御力を強化できる付加効果がある。

「メリルさんのコート、すごくかっこいいよね」

セリアが前を歩いているメリルに声をかける。

「ええ。ドラニクス家のためだけに、一流の職人を雇って作り続けてもらっている、伝統と格式のある逸品よ。術式も防寒耐熱に加え防刃、防魔の4重の完備。ここまでしてあえて攻撃強化を付けないのが術者への信頼を感じて心憎いわね」

「……………」

どうやらさつきから聞き耳を立てていたようで、自分の衣装の自慢をしたくて仕方なかったようだ。

「貴方達のその服を作ったのはこの服を作った職人のお弟子さん達だそうよ。信頼性に関しては問題無いと言えるでしょうね」

自分の自慢だけしないで、いちいちこちらも立てようとするのがまた慣れているというか。

そのコートは上品なダークブルーの地に、金色のラインがアクセントになっている。下に着ている白いブラウス、リボンと同じ色に揃えたスカート、そしてリボンに添えられた碧色の宝石が付いたブローチ。それらと合わせて、あまり派手すぎずにいながらも高級さを感じさせて、何より身に纏うメリルの気品を引き立たせている。

「へー、そうなんだ。思ってた以上にすごいんだねえ」

そんなメリルの自慢話にも、セリアは無邪気に感心していた。

陽がもつとも高くなつた頃、食事を行うために1度休憩を挟み、さらに小隊は歩を進める。

そして街道の別れる場所があつた。片方の街道はそのまま。もう片方の街道は舗装がひび割れ、隙間から草が生い茂っている。傍らには『この先何も無し』の看板がある。

「この先だ」

レウスの指示で、一行は進路を変える。

「足場が悪いから気を付けてね。特に馬車」

道が変わるだけで、誰もが自然と気が引き締まりだしていた。

廃村になり、人が通らなくなつてかなり経つようだが、草木の生え具合はそこまでひどくはなかつた。

「この感じは人じゃ無く動物の物だね。動物か、魔族の出入りがあるってことだ。騎士団はこのことから潜伏先を発見できたんだろう」
先頭に行くレウスが分析する。

「近くに身を潜めている可能性もあるから、警戒を怠らないこと」
「了解」

周囲に警戒をしながら、さらに進む。

気がつけば雑談の声はもう無い。

陽が山にかかろうとしていた。間もなく夕暮れが始まる。

「そろそろ夜営の準備を始めたいな。一旦停止してどこか開けた場所を探そう」

「そうだね。では私達第2小隊が、2人ずつに別れて探してこようと思うが、どうかな」

「うん、それじゃあ僕達第1小隊はここで荷を守ろう」

レウスとリシウス、2人の小隊長が相談をする。ある程度の問題は隊員を介さず代表者が相談を行うのが騎士団の決まりである。

リシウス率いる第2小隊は2人ずつ4つの分隊に分れると、それぞれ散っていった。第2小隊に随伴する騎士ロックスはその分隊の1つに付いていく。

「それじゃあ第1小隊はここで荷物番だ。彼らに場所が分かるように煙を炊こうか」

「了解」

周辺から集めた木の枝や落ち葉などを使って焚き火を起す。

第1小隊は、周囲に警戒を維持しながら軽く休憩をする。

「確か、魔族って敵の存在を察知しても、そんなにすぐには逃げようとはしないで迎え撃とうとするんだったよな」

シヨーマは魔族の基本習性について習ったことを思い出す。

「ああ。まだ例の拠点には距離があるし、煙のせいで僕らの存在が割れても、どうこうしようとかは思わないだろう。明らかに数の差を感じる時は逃げるそうだけど、この人数ならそれも無いだろうね」
レウスは返答して焚き火に小枝を投げ込んだ。

……魔族。人間が行使するような『魔法』とは異なつた形で魔導エネルギーを行使する獰猛な生物を指す。既存の動物が何らかの手段で魔導エネルギーを得て、肉体が変質したものと言われているが、詳細はまだわかっていない。

体内の魔導エネルギーが消滅、つまり死亡するとその肉体は変質前の動物に戻ってしまうため、研究が難しいのだ。かといって生きたまま研究するのはさらに難しい。今分かっていることの多くは、観察によってのみ明かされたことだ。

討伐する上で注意するべきは2つ。

魔族はあまり逃げないこと。敵意を感じた相手は返り討ちにしようという基本思考なのでは無いかと予想される。だがこちらの数が多いと逃げることもあるという。

次に同じ魔族ならば別の動物とも生活できること。複数の種族が混在となって襲い来るのは対策が難しい。魔法で一掃するのが好ましい。

的確な対処を行えば、十分に對抗できる存在である。

「それにしても、落ち着いた指揮をしてくれるからこっちも安心出来るよ」

「そうかな。まだ歩いているだけだよ？」

「それだけでも何となく分かるさ。頼りにしてるぜ小隊長殿」

冗談めかして2人は笑いあう。

少しすると、茂みの向こうから分隊の1つが戻ってきた。

「川沿いにちょうど良さそうな開けた場所がありました」

「わかった。それじゃ他の皆が戻るまで休んでいてくれ」

「はい」

他の分隊も良い場所を見つけているかも知れない。とりあえずは全員の帰還待ちだ。

分隊が全て帰還し、結果2ヶ所の候補地が見つかったことが報告される。相談した結果、何かと都合が良い川沿いに決定、移動を再開する。

川沿いの場所は確かにそれなりの広さがあり、少し高めの雑草が生い茂っていたが、簡単にでも刈り取れば夜営を行うには問題無さそうだった。

「よし、それじゃあ始めようか。第1小隊はまず草を何とかしよう。第2小隊は荷を下ろしてくれ。両方済んだらテントの設置と簡易結界の準備する。……ああそうだ、フィオン、君は川の水質調査を頼む。変な物が混ざってないか調べておいて」

「あ、はい。了解です……。あ、でももう、1人、手伝ってくれる人がいると、ありがたいのですが」

「ん、そうかい？ それじゃあ……シヨーマ、よろしく」

「え、俺？」

「ああ、頼むよ」

小隊長が命令する。

「す、すみません。荷物持ち程度ですので……」

「あ、ああ……」

謝るフィオンに申し訳無い気持ちになり、シヨーマは彼女の後に続いた。

荷車から水質調査器材を取り出したフィオンと川に向かう。彼女とはまだ話をしたことが無いのでちょっと戸惑う。

ぱつと見の印象は小柄で地味な子だという印象だった。肩まで伸ばした色の濃い茶髪を左右に分け、先の方でちゃんと縛っている。背が低い上、大きめの帽子を深くかぶり、うつむき気味でいるため顔が全然見えない。

フィオンは川のそばに屈み込むと、器材の入った木箱から透明な瓶を4つ取り出し、3つをシヨーマに渡す。

「えっと、この中にまず、水を汲むので、瓶、預かって貰えますか」

「ああ、良いけど……水くらいなら俺が汲もうか？ 何か注意なきやいけない汲み方でもある？ あっいたら困るけど」

「あ、い、いえ、特に、普通に汲めば良いですけど……」
「そっか」

それを聞くとシヨーマは瓶をローブのポケットにしまい、ブーツとソックスを脱ぎ川に入っていく。

「あ、ああ、あの」
「良いって」

まだ少し冷たさを感じる。もうちょっと暖かくなれば気持ち良いかも知れない。

ポケットから取り出した瓶のコルク蓋を開けて、川の水を8分目のあたりまで汲む。

「はい」
蓋を閉め、瓶をフィオンに渡す。

「あ、どうも……あの、すみません」
「良いって良いって」

2本目と3本目にも汲み入れ、受け取り直した4本目にも汲む。
「あ、もう川から出ても大丈夫です。すみません」

「ああ、うん」
川から上がり、水を払おうと足をぱたぱたと振る。

「あ、あの、これで、拭いてください」
フィオンがハンカチを手渡す。

「あ、ありがとう」
水を拭き取り、ソックスとブーツを履き直す。

「水を汲んだら、どうするの？」
「ふえっ、あ、は、はい。えっと、これはですね」

「がちゃがちゃと木箱から薬品を取り出す。
「飲み水として問題が無いとか、魔力の痕跡が無いとかを、こ

の粉薬を混ぜると分かるんです」
「へえ」

フィオンが瓶の水に粉薬を混ぜていく様子を、瓶を3つと薬品を3つ預かった状態で見つめる。変化は無い。

「これは、問題無いみたい、です」

「ふんふん」

その後も粉薬を混ぜ続けたが、4つとも特に変化は無かった。

「これはつまり？」

「えっと、つまり、飲み水としては、問題無い、ってことになりま
す」

「そうなのか。良かった」

「あ、は、はい。それから、魔力の痕跡も無かったので、ここ一帯
から、上流は、魔族が潜んでいるとかも、無さそうです」

「そんなことまで分かるんだ。すごいな」

「い、いえ、そんな。全然……1番最初に教わることです、し」

「それでも、君のお陰でこの川は安心できるって分かったわけだし。
謙遜することじゃないさ」

「そ、そう、でしょうか……」

「そうだよ。……それで、他に何かやることはある？」

「あ、いえ、もう無いです」

「うん、わかった。じゃあ戻ろうか」

「は、はい、そうですね」

木箱を手にし、その場を後にする。この程度の会話でフィオンの
ことが理解できたとは思わないが、初めての会話ならこんなものだ
ろう。多分。

「あ、あの……」

フィオンが何かを言おうとしていた。

「ん？」

「ありがとうございます……」

お礼を言われた。水汲みくらいでどうとどうということも無いが、黙っ
て受け取っておく。

「どういたしまして」

草刈りを終え、水の調査も済ませ、テントの設置も済ませ終える。続いて簡易結界の準備だ。簡易なだけあって効果時間は精々丸二日ほど。魔族による攻撃があれば10分と保たない。だが一晩二晩明かすだけなら十分なものだ。10分あれば眠りから目を冷まして迎撃の準備も可能だ。

「よし、夜営の準備はこれで完了だ。予想より早く終わってしまったけど、その分は休憩に当てよう」

陽が暮れるにはまだもう少しありそうだった。

「これならもうちょっと先まで進めたんじゃないか？」

「そうだね。でも遅れるよりは良いさ。準備中に真っ暗になられても困るし。明日の攻撃も少し遅れるかもしれないが、陽が昇っている間に出来るのは変わらないと思うよ」

「そっか。まあ1時間かそこらの違いだもんな」

「うん。さ、君も休んでおくと良い」

「ああ、そうするよ」

レウスとの会話を終えたシヨーマはテントに戻る。

……さて、夜まで何をしていようか。

学術都市リヨール、麿村の道のり (2)

シヨーマは、地面に座り込んで川の様子をぼーっと見つめながら休んでいたセリアに声をかける。

「よっ」

「あ、シヨーマくん。……なんだかまたどきどきしてきちゃったよ」

「ああ、もう結構近くまで来てるんだもんな」

今は確かに落ち着いて休めるはずの状況ではあったが、やはり敵の近くというのは、緊張してくるものだ。

「シヨーマくんは、……怖くない？」

戦うこと。命の保証が無いこと。……命は1つだ。もし何かのミスで落とすようなことがあれば、拾い直すことは出来ない。だが。

「俺は、うん。まあ。意外とリラックス出来ているよ」

「そっか……。私は、もっと真剣に勉強しておきたかったな。って思ってる……」

セリアはこれまで修練を積んできた日々を思い返す。シヨーマやメリルに出会えたこと。友達と一緒に頭を捻ったこと。その時は真剣で一生懸命だったと思っていたが、今考えたら、もっと脇目も振らずにいれば、もっともっと頑張っていたような気もする。

じつとシヨーマの顔を見つめる。

「……ん、何？」

でも、本当に脇目も振らずにいたら、この出会いは無かったかもしれない。そう思うと、気持ちが目まぐるしい。

「……今回の結果がどうでも、私、ちゃんと帰れたら今まで以上に勉強、頑張ろうと思う」

もっと自信を持ちたい。……今は、そう。余裕が無いのだ。もっと自分に自信を持てれば、脇目を振る余裕を持てるかもしれない。

「そつか。……俺もセリアが頑張るの、手伝いたいよ」

「……………うえ？」

「だから、絶対無事に帰ろうな」

「あ、う、うん、……………はい」

そう伝えると、こちらに向けていた視線を、逸らすかのように川の方に戻してしまった。傍らに置いていた帽子もかぶって表情を隠してしまう。

(ちよつとクサかったかな……………)

そういう反応をされると、それはそれでこっちが恥ずかしくなる。そのまま特に話らしい会話も無く、食事の準備が始まるまで、2人は川の流れる様子を見ていた。

芋と野菜のシチューに、川で捕まえた魚という夕食を食べ終わる頃には、もう陽が暮れようかというところだった。

一行は焚き火を囲んで今夜の予定を立てていた。

「2100時より明朝0500時までを睡眠時間としよう。早いかもれないけどちゃんと眠っておくこと。1時間ごとに2名ずつ交代で火の番と結界の警戒をしよう。睡眠時間が半端になるけど、こういう遠征の時にはよくあることだろうから、これも経験だと思って」

組分けとそれぞれの担当時間は小隊長2人が決める。随伴騎士の2人は、それぞれ4時間で交代して見張りに付き添うと言ってくれた。

テントで眠るショーマの肩を揺さぶる誰かがいた。

「あ、あの……………起きて、ください……………あの、お願いします……………」

「……………んあ」

本当に起こすつもりがあるのか疑うような、か細い声に反応する。

フィオンだった。外はまだ暗いというのに女子1人で男4人の寝るテントにやって来るとは何事か。

「……って、ああ見張りか……」

シヨーマの見張りの担当時間は0300時からだった。その前がフィオンとローゼの担当だったので、交代を告げに来たのだろう。

「あ、えつと、あの」

「うん、起きる起きる」

まだ少し眠気が残るが、ちゃんと布団から出る。

「あ、もう1人の方も……」

「ああ。おい、バムス……君。起きてくれ」

シヨーマと一緒に見張りを行うのはバムスであった。正直彼に良い印象は無いので勘弁してほしかったが、小隊長のレウスが決めたのだから仕方が無い。

他にレウスとデュランも寝ているので、大きい声を出さないように肩を揺すって目を冷まそうとする。が、手が触れる直前、バムスはむくりと体を起こした。起きていたのだろうか。

「交代の時間か」

声にも寝起き特有の淀みは無い。

「あ、ああ。呼びに来てくれたよ」

「そうか。では行くぞ」

すっと立ち上がると、さっさとテントを出て行ってしまった。驚きながらシヨーマとフィオンもそれに続く。

「御苦労」

「おはようございますバムス様、シヨーマ様。見張りの結果ですが、異常は特にありませんでした」

焚き火のそばに立っていたローゼが引き継ぎを行った。

「わかった。後は任せる」

「よろしくお願いいたします。それでは私は休息に戻らせていただきます」

「あ、そ、それじゃ私も。……あ、後は、よろしく、お願いします」
ローゼとフィオンは自分達のテントに戻っていく。

「御苦労様だったね」

「随伴していた騎士ロックスも彼女らを見送る。」

「それじゃあ君達、頑張るように。僕はいないものと思ってくれて結構だから」

「あ、はい。頑張ります」

「シヨーマは軽く頭を下げる。」

……とはいえ実際は見張りと言っても何かすることがあるわけでも無し。火の勢いを絶やさないうよう、時々木の枝を放り入れる位だ。すぐに退屈になる。

……やはり、彼と少しは話でもしていた方が良さだろうか。

「良い機会だし少し話でもしないか。シヨーマ・ウォーズカ」

等と考えていたら、向こうから話しかけてきた。

「な、何か聞きたいことでも……？」

「ああ、ある。色々とな」

「挑戦的な目付きのバムスである。これは逃げられないなとシヨーマは覚悟を決める。」

「噂に聞いている記憶喪失とやらは、まあどうでもいい。魔法の才覚とやらも、まあ事實は事実だ。俺が気にしているのはな。シヨーマ。お前のその力を、お前は どう思っているか。ということさ。」

……念のため1つ聞いておくが、お前、その『能力』とやらは自分で望んで得た物か？」

「違うよ」

「だろうな」

「今は『必要』だと思っているけどね」

「フ。自分の力をいらんなどと抜かしていたなら、話すことが無くなっていたところだ。」

……まあいい。さて、お前も知っての通りだろうが、俺達の隊に

は無謀にも素人の身でありながら戦場に身をやつすことを望んでいる者が幾人かいるな」

「足手まといだ、って笑うのか？」

「笑いなどしないさ。……我がワグマン家ではな、自らを鍛える人の姿は『貴い』物だと教わってきた。大望を抱き、それに向けて切磋琢磨する姿は、例えそれが達せられなくとも、美しい物なのだ。そして我らワグマンはその姿を守るためにこそ強くあれ。ともな」

「頑張る姿が、貴い、か……。ならなんでデュランに突っかかるよ
うなことしたんだ？」

「あの男は間違っている。貴さにはほど遠い」

「……、どういうことだよ」

「ヤツの姿は何度か見たことがあるがな。見たところヤツには抱くべき大望が無い。ヤツを突き動かすのは恐らく、外圧による強迫観念か何かだ。……自分はこうしなければいけないからこうしている。そう考え自分に鞭を打っているのだ。それは貴さでは無い。醜くもがいている無様なだけだ。そんな間違った努力では、実を結ぶことは無い。」

「……俺はそんな姿が、見るに耐えん」

ただデュランが、未熟な者が嫌いで見下していたというわけでは無かったようだ。……口が悪いのは確かなようだ。

「その点あのセリアとかいうのはまだまだが十分に『貴い』と言えるな。あれはお前の女か」

「え！？ いや別にそんなんじや……」

「フ、そうか。ならさっさと惚れさせてやると良い。好いた男のためにならどんなことだって出来る類いだぞ、あれは。お前が甘い言葉でもかけてやればすぐだろう」

「何を言い出すんだアンタ……」

「ああいうのは好みでは無いか」

（何で真夜中の好きな女子談義みたいになりつつあるんだよ……）
「そういうのじゃ無くて……。そんな人の気持ちを利用するみたい

な真似、良くないだろ……」

「既に意中の女でもいたか？　だが1人くらい余計に受け入れるくらいの甲斐性を見せてみるよ」

「いや、だから……」

なおも口答えを試みるが、何となく絶対引かないような気がしたので諦めた。

「まあ良いさ。話をお前の力に戻すぞ。」

単刀直入に言うが……お前の力、俺の下で活かすつもりは無いか？
「……………は？」

予想外の提案に間抜けな声を出してしまう。

「お前の能力は1つ間違えれば嫉妬を集め、諦めを誘う物だ。あんな才能の下では自分の努力などカスみたいな物だ、やるだけ無駄だ。諦めよう。という風にな。」

人の『貴さ』を、お前がお前の望まないところで潰してしまう。

それは許されないことだと思わないか。

……だが俺の下につくならば、俺の指示でお前の能力を羨望の的にさせてやれる。お前に憧れ、お前のようにになりたいと願い、お前を目指して己を磨く。多くの者に『貴さ』を抱かせてやれる。素晴らしいことだ」

「それは……………」

それもまた、シヨーマの力の『使い道』だった。そんな風には考えたことが無かった。

嫉妬しか集めないかもしれない。そんなのは嫌で、これまで隠すようにしていた。でももっと良いことに使えるかもしれないと、道を示された。

「どうだ？　待遇は決して悪くもしないぞ」
だが……………」

脳裏に1人の少女の顔が浮かぶ。

「ごめん……………先約がいるんだ」

シヨーマはバムスの誘いを断った。

「そうか……」

いつだって自信満々で高圧的なバムスが、ほんの少し表情を曇らせる。

「いや、いい。今はそう思うだけだ。気が変わったのならいつでも言え」

「うん……、ありがとう。バムス」

「ああ」

そうしてシヨーマはまた1人、心の内に秘めた気高い信念を持つ者を知った。

そのまま見張りは何事も起こらず、交代の時間となったので、次の当番をシヨーマが呼びに行かされる。次の……最後の当番に当たるのはメリルとセリアだった。

(うーむ……)

当然女子用のテントに行く必要がある。

(作戦！ 作戦の一環だから！)

誰にともなく言い訳をしてしまう。

「……おい」

念のためテントを開ける前に声をかけておく。が、反応無し。

「開けますよー……」

小声で注意しつつ中の様子をつかがう。みんな眠っているようだ。メリルはすぐに見つかった。すうすうと寝息を立て、穏やかに眠っている。

暗がりだがその美しい金髪や柔らかかそうな肌ははっきりと分かり、ついじつと見てしまう。

(いやいやいや、落ち着け)

余計な声を出さないため耳元に口を近づける。良い匂いが漂ってきて無駄に心臓が高鳴る。

「こ、交代の時間だぞー……」

「ん……………」

メリルは艶かしい声を上げ、ゆっくりと目を開ける。すぐさま顔を耳元から離し何食わぬ顔をしておく。

「……………え、」

シヨーマがいることに気がつくのと、驚き、顔を赤くする、声を上げそうになりかけたところでシヨーマはもう1度慌てて伝える。

「こ、交代、見張りの。呼びに来ただけ」

「あ、ああ…………。そう、ね、見張り…………」

メリルもすぐに理解して、驚きの声を押し込めた。体を起こす。

「うん、すぐ、行くから。ちょっと外に出てて。セリアも起こすから……………」

「う、うん。分かったよ」

シヨーマはそそくさとテントの外に出て待つ。

…………無駄に溜め息が出た。

「……………びっくりした……………」

それを見送ってから、メリルは小さく呟いた。

「お待たせ」

「ああ、うん」

メリルに続いてセリアもテントから出る。

「え？ わ、びっくりした」

セリアは外でシヨーマが待っていることを知らなかったのか驚いた様子だ。

「ああ、うん。おはようセリア」

「あ、あ、うとうん。おおおはよう」

慌てた様子で髪を手櫛で撫で付けている。

その様子にシヨーマは、先程のバムスとのやりとりを思い出ししてしまっ。

(あーいかにいかに…………)

「それじゃ、行きましようか」

「あ、そうだね」

「はい……」

「御苦労様。交代に来たわ」

「ああ。異常無しだ。見張りの引き継ぎを行う」

「ええ、確かに引き継ぎました」

メリルとバムスが淡白なやり取りを交わす。

「あと1時間で起床時間なんだけど、これならいっそ起きてたほうが良いんじゃないか？」

「睡眠の調節など基本だ。俺は寝る」

「そ、そうか……」

バムスの言う基本とは、あくまで彼の学んだテオ式格闘術における基本であつて、シヨーマの考えた夜営での基本というわけでは無いのだが、それは誰も知る由が無かつた。

「まあ1時間くらいなら大差無いでしょうし、良いんじゃない？」

「じゃあ、騎士の方も入れて4人で見張り？」

「そういうことになるかな」

3人が確認をする。

そろそろ空が白んでくる頃だつた。

「いよいよだな……」

「うん……」

夜明けが近付き、緊張も高まってくる。

「あんまり気を張りすぎるのも良くないと思うけど」

メリルは落ち着いた様子で言う。

「未だ知らないシヨーマの出身でも予想してみましようか」

「え、なんで？」

全然関係無い話を振ってくるメリル。

「何だかんだでもう結構経つでしょう？ そろそろ名前以外にも何

か思い出せないの？」

「いや……残念ながら」

「最近思ってたけど貴方、今の生活に満足して記憶のことちょっとどうでも良くなってきたりしてないでしょうね」

「お、思ってたないよ」

嘘だが。

今の生活には充実感もあったし、具体的ではないが、ぼんやりと将来のことを考えてもいる。記憶も無いなら無いで、何とかなってしまうのがいけないのかもしれない。

「あ、それなんだけどね。私もちよつと予想してたんだけど、……実は王家の隠し子で、すごい魔法の才能があったから混乱を起こさないよう内緒で育てられたけど、戦後のどさくさで記憶を消されて捨てられちゃった。って言うのはどうかな。その黒い髪は特殊な魔力による影響なの」

「無理があるよ……」

セリアが変なことを言い出した。

「じゃあお国の跡取り問題をめぐる壮絶な争いから逃げるため、西の海の間こつから命からがらやって来たけど長旅の疲れと混乱で記憶が消えちゃった、とか」

「突飛すぎる……」

「それならまだ私の考えていた違法魔導研究者に人体改造されただけど命からがら逃げ出した、とかの方が説得力あると思うわ」

「怖いこと言わないでくれよ……」

メリルまで変なことを言い出す。

「でも王子様との素敵な出逢いは外せないんじゃないかなと思うの」
「巨大な陰謀に共に力を合わせて立ち向かっていく方が良いじゃないの」

「何の話……？」

本当に何の話をしているんだかわからなくなってきた。

結局、最後までそんな弛緩した空気は続いた。

0450時。まもなく起床の時間だ。しかし皆、見張りをしていた4人が号令をかけるまでもなく、自然と起き出していた。

「おはよう、皆。見張りお疲れさま。疲れは無い？」

レウスが焚き火のもとへやって来る。

「ああ、うん。大丈夫大丈夫……」

「ん？ 何かあるなら言ってくれないと困るけど」

「いや、ちよつと小1時間変な話を聞かされたくらいで」

「変な話って何よ」

「そーだそーだ」

口答えされたが無視した。

「はは。……あ、そろそろだよ」

「ん？ あ……」

遠くに見える山の向こうから、1日の始まりを告げる陽が登り始めた。

朝食を食べ終わると、いよいよ目的の魔族拠点への進行が再開される。第2小隊はこのまま待機し、この拠点を守る。

第1小隊は現在武装の最終確認を行っていた。

「よし。じゃあそろそろ行こうか」

「……了解」

準備を整えた8人が立ち上がる。

「それでは、第1小隊、出立します」

「了解。ご武運を祈ります」

小隊長同士が挨拶を交わし、第1小隊は進行を再開。騎士ルーシエがその後続いた。

馬車を引かないため、悪路でも比較的ペースを落とさずに進むことが出来た。

獣道を行き、時間は0830時。……かつて村があった場所へ到達する。

「思っていた以上にボロボロだな」

「都心部の発展と、その後の戦争で若い人はどんどん出ていった時期があつたんだ。小さな村には老人だけが残され、最後には誰もいなくなった。そういう廃村は、結構多いみたいだ。

……さ、我々の目標は南方向にある風車塔だ。行くよ。魔物が隠れられそうな場所が多い。警戒は怠らないように」

「了解」

かつては人の通りがあつたであろう道。そこは今では草が生い茂っていた。獣達が踏みしめ出来た獣道を頼りに、さらに進んでいく。

先を進むが風車塔は中々見えてこない。方向を確認するが、間違つてはいないはずだ。

「どういふことだ」

「………………。ああいうことみたいだよ」

少し進むと崖に行き当たった。そしてその下には土砂崩れにより崩れ落ち、斜めに傾いた元・風車塔が突き立っていた。

「……………なるほど」

周囲を見下ろす。ちょうどここから回り込むように進めば下に降りられそう。木の板で作られた階段の形跡がある。

「よし。じゃあ魔法担当のメルルはここで待機。あの風車塔を建物ごと攻撃する。狙撃担当のローゼと護衛のセリアは…………、あそこに

見える小屋の屋根の上が良さそうだ。あの位置じゃあ、狙われる可能性も少し上がりそうだから、フィオンもあそこに待機してもらう。残りのメンバーはここから下まで降りて、足下の安全を確保できる地点で待機しよう。土砂崩れした地面は緩いからね」

「ちよつと待って。あんな風に建物が斜めになつてると、少し面倒だわ」

レウスの提案にメリルが異を唱える。

「シヨーマをこっちに回してもらえる？　まず私が『アイスピア』を斜め上方から叩き込んで、完全に横倒しにしましょう。でもこれだけだと威力が足りなさそうだから、シヨーマの『サンダーストーム』で追撃をかける。これでちよつど良い具合になると思うわ」

「そうか……うん。横倒しにした衝撃でもいくらか仕留められるかもね。ただこれだと近接班に回復役がいなくなるな」

「魔法を放つたらすぐに向かつてこさせれば良い。その程度の時間でやられはすまい」

「ああ、問題無いさ」

レウスの不安をバムスとデュランは否定した。

「そうか、わかった。それで行こう」

ではこれよりレウス、バムス、デュランを　分隊、メリル、シヨーマを　分隊、ローゼ、セリア、フィオンを　分隊と呼称する。

分隊は崖の下で安全な足元を確保して待機。　分隊は弓による狙撃と魔法による迎撃の準備を行い待機。

分隊はこの場で待機。　分隊と　分隊が準備完了したら、それを確認後、魔法攻撃を敢行。　分隊と　分隊は以降、自分達に向かつてくる魔族を各個撃破する。　分隊は魔法攻撃を敢行後、　分隊に合流。以上だ」

「了解！」

7人が声を合わせる。

「逃げる敵は無闇に追わなくて良い。一匹残らず殲滅させる必要は無い。全員自分の役割を果たし、無理はせず、必ず生き残ること。」

良いね」

……いよいよ、初めての戦いが始まるうとしていた。

(あそこに……いるんだ)

未だ姿を現さない敵。だが気配はひしひしと感じた。……獣の唸り声。微かな魔力の気配。そして今か今かと待ち構えているような、殺気。

(これが、戦場の空気)

その気配を感じ、ショーマはぐっと拳を握りこんだ。

朽ちた風車塔における戦い

分隊、分隊、分隊の3つに別れた第1小隊は、所定の位置で待機し攻撃の開始を待っていた。

分隊。シヨーマとメリルが魔法の準備を開始すると、分隊に随伴していた騎士ルーシェがやってきた。

「私は君達のそばにすることにした。攻撃開始の号令も兼ねる班だからな。それにここからなら他の分隊も目に入れやすい」

「はい。こちらはそろそろ開始しようと思っていたところです」

「うむ」

メリルが確認を取る。

「じゃ、始めましょう、シヨーマ。『サンダーストーム』を待機状態にして。私が攻撃した後、合図を出すからそれに合わせて撃ち込んで」

「ああ」

魔力を練り上げ、術式を組み上げる。

何度も練習してきた。狙った場所に正確に撃ち込む自信はある。

怖くも無い。

メリルも同様に魔法の準備を行う。襟のリボンに添えられた宝石が淡く輝き、竜の力が引き出される。

『竜操術』は例えるならば1人で2人分の魔法を使うような物である。人と同じように魔法を使う竜という生き物。その力を借り、1つ上のステージに行く魔法の使い方だ。

メリルの頭上に1つ、2つ、3つ。長さは1メートル、幅は30センチメートルはあろうかという氷柱が浮かぶ。中級魔法、『アイススピア』の3重発動だ。

複数の魔法を同時に発動させるのは初級魔法でも難しいとされる。それを、中級魔法を3つも同時に発動させる。それだけのことが出るのが竜操術であり、メリル・ドラニクスという少女であった。

「じゃあ、行くわよ」

「ああ。こつちも大丈夫だ。」

最後の確認をする。これが初めての戦闘。その開始の合図だ。

「それじゃ。……ッ！」

3本の氷の槍が、1本ずつ連射される。目標の風車塔、頂点付近に1本目が突き刺さり、ぐらりと傾かせる。2本目、3本目はその位置から一定の間隔を開け突き刺さり、傾きの勢いを加速させる。

「今よ！」

「！」

氷結の魔力が氷の槍から完全に伝わり、風車塔自体が氷に包まれる直前、シヨーマの『サンダーストーム』が発動する。

「行けッ!!！」

拡散しようとする氷の魔力は竜巻を起こす暴風によって閉じ込められる。さらに雷撃が発生。氷を伝導し、さらに威力を増した雷撃は破壊の限りを尽くそうとしていた。

「……来た！」

崖の下で待機するレウス、デュラン、バムスの分隊は、巨大な魔力の奔流を目にする。

轟音と共に、朽ちかけていた風車塔は、氷と雷の暴風により木っ端微塵に爆砕されていく。

「よし、行くぞ！」

レウス達は暴風がおさまり始めると、武器を手に駆け出し、すぐに慌てて塔から飛び出したであろう1匹の獣を発見する。狼の魔族だ。敵もこちらに気付き、牙を剥いて飛び掛かってくる。

レウスはそのまま駆け抜け、すれ違い様に一閃。肉を斬り裂く確かな手応えを感じる。一瞬だけ反転し、確かに仕留めたことを確認。そのまま勢いを殺さずにさらに反転、前へ向き直り、疾走を再開す

る。

「出て来ましたね」

分隊。ローゼは魔法攻撃の発動と、それを受けて風車塔から辛うじて逃げ出す魔族の姿を確認した。

「狙撃を開始します。貴方達はそのまま待機を」

「はい！」

「り、了解です」

弓を構え、矢を添え、精神を集中する。闘気を込め、狙いを付ける。

……目標は空に飛び立った鳥類の魔族。

「！」

射る。

狙い違うこと無く命中し、燃え盛る炎がその体を包み込んだ。弓術技、『烈火迅』。闘気を込めた矢の一撃で、命中した相手に炎の追加攻撃を与える技だ。

「今で他の敵にも気付かれたでしょう。……来ますよ」

「は、はい！」

セリアも腹を決めていた。

分隊は暴風のおさまった風車塔近くで、散開した敵に斬り込んでいく。迎撃を目論見、身を潜めていた所へまさかの大破壊を許した魔族達には動揺があったようだ。こちらの急襲に対応が遅れている。

……作戦通り。

だが優勢に思えた状況は、すぐに改められることとなる。

「おい……」

「囲まれているのか……？」

周囲の草むらから魔族達が続々と集まってくる。

伏兵か。否。気配は無かったはずだ。ならば風車塔から飛び出た連中か。それにしても数が多い。

……まさか。

「こいつら……氷の魔力持ちか……！」

「……では、最初の『アイスピア』が効かなかったっていうことでしょうか」

「いや。効いてはいただろう。耐えられた敵が多かった、ということだ」

騎士ルーシエの分析に、メリルは愕然とする。

「氷の魔力に耐性があった奴等は2撃目、『サンダーストーム』が放たれる前に、すぐさま逃げ出したのだろう」

潜んでいた魔族は、ほとんどが氷の魔力を持ち、それゆえ『アイスピア』のダメージを受け流したことで、仕留められると予想した数を下回ったのだ。というのが外に飛び出した魔族達の様子を見て、騎士ルーシエが推測したことだった。

「私が……失敗……？」

思いの外ショックを受けている様子のメリル。

「いや。これは異常事態だ。君の責任では無い。こんなこと今までは無かった事例だ。とにかくまずは分隊を合流させるぞ」

魔族は、少なくとも今までの調べでは、統一性という物が無いのが当たり前だった。魔力の属性や、種族の一致等、一定の法則に基づいて徒党を組むということは無かったことだ。

今回のように氷の魔力を持つ魔物が多いから、氷の魔法で攻撃す

るのは止めよう。なんて考えは持つ必要が無いのが当たり前だった。だから、このような失策は有り得ない事態なのだ。

「まずは 分隊と合流する。ここは私も剣を執らせてもらおう。さあ、行くぞ！」

「ほら、メリル。しつかりして」

「ど、どうしよう。私……」

「1回ミスしたくらいで何だよ！ しつかりするんだ！」

シヨーマは動揺しているメリルを叱責する。

責任感も自信も人一倍強い彼女だ。失敗に動揺を見せてしまうのも分かるが、これは……。

「ほら、行くぞ！」

強引に手を取って駆け出す。まずはレウス達と合流する。孤立することになるセリア達が不安だが、ならばこそ急がねばならない。

「……！」

駆け抜ける途中、魔力の流れを察知する。こちらに向かって、
「危ないっ！！」

視界の端に敵が見えた瞬間、メリルを押し倒して庇う。

「ぐ……痛……つてえ！！」

右腕に激痛が走る。すれ違い様に二の腕から肩にかけてをやられたようだ。

（う、腕……、き、斬られた……。ヤバイ……。ま、まだくつついてる……？）

初めて感じた痛みに、もしや腕を丸ごと斬り落とされたのでは無いかと思った。だが、自分の目で確認すると、そこまででは無い様子だった。

（あ、でもうわ、すげえ血……）

まさに鮮血と呼ぶにふさわしい真っ赤な血が白いローブを染めていた。自分のことながら気が遠くなりそうだった。

「クツ……!」

前を走っていて対応が遅れた騎士ルーシェが舌打ちする。すぐさま閃光のような斬撃で、襲撃した魔物を斬り伏せる。

「大丈夫か! 派手だが傷自体は浅いぞ。自分で治癒出来るぞ! 気をしっかり持て!」

「あ、はい……。大丈夫……」

左手を右腕の怪我にかざし、治癒魔法を使う。すぐに傷は塞がった。

治癒の魔法は、魔力を肉体の自己治癒力へ変換する。魔力が大きければそれだけ効果が増すのだ。

「ふう……」

「さあ、早く立ち上がれ。急ぐぞ。」

「は、はい」

と、そこでようやくメリルを押し倒していたことに気が付く。

「あ……う」

「あ、ごめん……。怪我とか、無いか?」

「う、うん……。平気……。……あ、貴方、血が、」

出血はもう無いが、服に染み付いた血が消えるわけでは無い。元々白いローブだったので、かなり目立つ。

「ああ、これはもう治療したから、大丈夫だよ」

「あ、うん……。また、私のせい……」

「責任感じすぎだつて。どうしても言うのなら、みんなを助けてからだ。……良いな」

「またも動揺を見せるメリルに、少し語気を強める。

「……、ごめんなさい」

「……ほら」

もう1度手を取って起き上がらせる。

メリルのこんな顔は見たくなかった。

「行くぞ」

そのまま強引に手を引いて走り出す。

……皆は無事だろうか。

分隊。ローゼの矢はここまで必中必殺を守り続け、今の所脅威は迫っていないかった。

「分隊の方に敵が集中しているようです」

ローゼはこの異常に気付きつつあった。『烈火迅』が氷属性の敵には効果的で、ここまで一撃必殺が出来ている。だがこちらが順調と言っても他の分隊がそうとは限らないのだ。案の定、地上の敵の動きを観察すると、すぐに仲間が危険に晒されているとわかった。

「え、じゃ、じゃあ、助けに行った方が良いんじゃない」

その情報にセリアは動揺を隠せない。

「駄目です。ここを離れるわけにはいきませんし、かといってこれ以上隊を分けるのも危険です」

「あ、じゃあ、どうすれば……」

「分隊が 分隊に合流して何とかしてくれるのを期待するしかありません」

「そんな……」

「信じましょう……！」

ローゼは矢を放ち続ける。

分隊の3人はお互いを背にし、周囲を取り囲む敵に備えている。状況は危機と言って良かったが……、活路はある。

「……………」

「どうするよ小隊長殿？」

「タイミングを合わせて一点突破を仕掛けよう。目標は 分隊のいたあちらの方向」

レウスは顎で目標方向を指す。2人も頷く。

「じゃあ、行くよ。……3、2、1、0！」

号令に合わせて3人は駆け出す。周囲を取り囲んでいた魔族も一斉に襲いかかる。

「破ッ！」

バムスが拳術技、『飛炎撃』を飛ばす。闘気を受けて撃ち込むことで、拳のリーチを越えた一撃を叩き込む奥義だ。

進行を妨げる敵をまずは1匹仕留める。

続けてレウスが魔族の1匹に肉薄。素早く急所を突き刺し仕留める。そのままその肉体を盾にしてもう1匹からの攻撃を防いだ。

剣に刺さったままの肉体を蹴飛ばして引き剥がし、襲い来る別の魔族にぶつけて足を止めさせる。

出来上がった隙間を、3人は一気に駆け抜けた。最後にデュランは置き土産に槍の斬撃を地面に向けて風ぎ払う。抉られた土が目潰しになり、さらにもう一瞬の隙を作る。

「行くぞ！」

開いた包囲網を抜け、その勢いで駆ける。だが、

「……追って来ない？」

不可解なことに、3人を取り囲んでいた魔族は彼らを追っては来なかった。

「……！？ おい伏せろ！」

巨大な影がレウスを覆う。反射的にその場に倒れ込と、それにわずかに遅れて巨大な腕が振り抜かれた。

「こいつ……！」

『アイスベア』。氷の魔力を持った熊である。分厚い脂肪と筋肉による防御と攻撃力を併せ持つ。氷の爪と牙で切り裂かれれば、傷口から氷の魔力が流れ込み体温を一気に奪い体の自由を奪う難敵だ。

「こいつと挟み撃ち、つてことか……」

前には身長3メートルにも及ぶ巨体と、後ろには1匹1匹は大したこと無くとも、20弱はいようかという魔族の群れ。

「……うおおお!!」

「ッ!? このバカ!」

勢いにかまけてデュランがアイスベアに突貫をかける。だがそれは余りにも無謀であった。

「ッ!!」

渾身の力を込めて突き刺す槍は、しかしその腹を貫くこと無く刃先が埋まるのみ。

「……ッ」

「バカ離せ!!」

なおもその槍を押し込もうとするが、横凧ぎに振り抜かれた豪腕がデュランを襲う。バムスの言葉が耳に届くと同時に、反射的に腕を槍から離し、頭と脇腹をガードする。

だが威力を殺しきれるはずもなく、腕の骨は砕かれ、体は浮き、地面へと無惨にも叩きつけられた。

「デュラン!!」

「デュラン!!」

シヨーマが地面に叩きつけられるデュランに声を上げたのは、レウスのそれと同時にあった。

「シヨーマか! 早く治療を!」

「ああ!」

アイスベアの脇に回ってデュランのもとへ駆け寄ろうとする。だが背後からの新たな襲撃者へ、アイスベアは破壊の豪腕を振り上げる。

「させるか!」

バムスが果敢に接近する。渾身の闘気を込め左脛に強烈な蹴りを叩き込む。若干バランスを崩しただけに終わったが、こちらに注意を向けさせれば十分だ。

「急げ！」

「すまない！」

倒れたデュランに駆け寄り寄るショーマ。さらに彼の横を騎士ルーシエが駆け抜ける。

「有象無象は私がやる！」

アイスベアと挟み込む形で展開していた魔族へと斬りかかる。

「冥剣技……『猛火霸斬』！」

抜剣の勢いと共に噴き出される炎の斬撃が魔族の集団を尻ぎ払った。

「向こうは任せて、僕達はこいつを！」

「応！」

バムスも声を張り気合いを入れ直す。アイスベアは槍の一撃を容易く防ぐ強敵であるが、バムスには策があった。

「デュラン！ おいしっかりしろ！」

気を失っている。ショーマは彼に呼び掛けながら傷の具合を確かめる。

（腕が……）

骨が砕けて有り得ない方向にねじくれている。まずは骨の位置を正常に戻す魔法をかけてから、治癒の魔法をかけなければならぬ。

すぐさま魔力を練り始める。

「デュラン！ デュラン！！！」

……仲間が倒れている。それは思いの外、心には動揺が走るものだった。これこそが恐怖なのだと気付くには、少し時間がかかった。頭を振って気合いを入れ直す。骨の形は元に戻すのには成功。腕も正しい方向に伸びている。次はこれをくつつけ、一緒に出血も治癒する。

「……………」

魔法が聞いたのか、デュランが呻き声をあげる。

「デュラン！ 気が付いたのか！ しっかりしろ！！」

「俺、は……………」

「今治してる！ 大丈夫だから！」

「お前、か……………」

デュランはまだ虚ろな目でショーマを見た。

「…………俺は、ダメ、だった…………。いけすかな、い…………貴族の、連中に、なんか…………って、思っ、てた、くせに…………」

デュランは弱々しい調子で、想いを吐露し始めた。

「あいつら、だって…………勇敢に、前に立って…………、戦って、いるのに、俺は…………、こんな、無様を晒して、いるだけ、だ…………」

「弱気になるなよ！ お前らしくない…………！！」

「…………俺らしくって、何、だよ…………。…………何だ、ったっけ…………」

「デュラン…………」

デュランの傷は問題無く治ろうとしていたが、心はそうでは無かった。

アイスベアは腹に軽く刺さっただけの槍を引き抜き、放り捨てる。その拍子にわずかに血が飛び散った。

「俺がやる。ヤツの気を引いてくれ」

「…………わかった！」

レウスはバムスの言葉を信じる。

剣を構えアイスベアに迫り、だが斬りかからない。豪腕が迫る。だが避けることにだけ集中すれば、単純な攻撃であるがゆえ、その軌道はわかりやすい。凶悪な一撃ではあるが、難しいものではない。大振りな腕を戻し、第2撃を繰り出そうとする。その瞬間が好機だ。

素早く接近するバムス。狙いは先程わずかにできた傷。

「ッ!」

地面を抉る強烈な踏み込み、全身を使って振りかぶった渾身の一撃を叩き込む。狙い違わず傷口に突き立った拳先から、衝撃が脂肪と筋肉の鎧を伝わり、内臓で弾ける。

さしものアイスベアもこの一撃には体がくず折れる。

バムスは前のめりになり頭が下がったところを狙う。再び地面を抉り、ほぼ垂直の上方へ蹴りをぶちこむ。

顎から衝撃が伝わり、脳を激しく揺らされたことで、ついにアイスベアは倒れた。

「……止めを!」

「ああ!」

まだ絶命まではしていない。また起き上がられたら、次はこう上手くは行かないかも知れない。渾身の連撃を叩き込んだバムスは息が上がっていた。止めはレウスに任せる。

「ごめんよ……」

ついそんな言葉を出してしまうレウス。しかし躊躇いは一瞬だ。喉元に剣を突き刺して絶命させる。血が吹き出し、氷の魔力の影響で青白く染まっていた体毛は褐色に戻っていく。魔力が消え本来の姿に戻ったのだ。

「こちらも片付いたぞ。何匹かは逃げ出した、劣勢を承知したのだろう。まもなく終局となるはずだ」

騎士ルーシエが魔族の群れを蹴散らし戻ってくる。

「はい。ありがとうございます。……ショーマ、デュランは!？」

騎士ルーシエには一言だけで礼を済ませ、負傷したデュランに駆け寄る。

「ああ、もう大丈夫だよ、一応は」

「そうか、ありがとう……。デュラン、すまない。無茶をさせた」

「お前が、謝ることじゃない。……俺が、俺の……」

「まだ戦いは終わっていないよ。さあ。…… 分隊に合流を急ぐ!」

レウスはデュランの弱音を遮り、全員に号令をかける。レウスはその時になってようやく棒立ちになっていたメリルに声をかける。シヨーマと一緒に合流した時から視界に入れていたが、彼女は何も出来ずにいるようだった。

「メリル、……どこか怪我でもしたのかい」

「……あ、いえ、それは大丈夫……。ごめんなさい。役に立てなくて。それに、最初の攻撃でも……」

「良くあることさ。あまり気に病まないでくれ。それより、急ぐよ」
デュランにしるメリルにしる、責任感が強いのは結構だが後悔してばかりもられない。

……これは今後の課題かな。

小隊長として、レウスはそう思った。

「来ました」

「え？ あー！」

ローゼが仲間の到着を確認する。

分隊は、何度か接近を許すも、上手くセリアの魔法で迎撃できていたため、負傷は無かった。

「おーい」

セリアが手を振る。分隊、分隊、騎士ルーシエ。全員無事だった。

「待たせてすまない。大丈夫だったか」

「ええ、問題ありません。そちらの方こそ」

ローゼが代表して答える。彼女の冷静さがあったから分隊は無事だったのかもしれない。

「こっちは少しきつかったかな。……ちょっと異常事態が起きているみたいだ」

「ええ。こちらもおかしいとは思っていました」

「……。ルーシエ殿、ここは判断を仰いでもよろしいでしょうか」
随伴騎士の存在はあくまで保険だ。戦闘や判断は基本的に小隊内で済ませなければならぬ。

だがそれは作戦が予定通り進行するならの話だ。このような異常時には積極的に頼る判断も必要だ。

「うむ。よくこの場を調べれば何かわかるかもしれないが、それは君達に任せて良いとは判断しない。魔族もおおかた散っていったよ。うだし、ここは……、ッ!？」

騎士ルーシエは状況を見定めた結果、目標は果たしたとして撤退を指示しようとしたが、急な地響きが一行を襲った。

「何かいます……!」

瓦礫と化した風車塔の残骸が盛り上がっていく。周囲の瓦礫を吸収して、それはさらに肥大化していく。

「あれは……」

「ゴーレムか!？」

瓦礫の集合体はさらに巨大化し、手を作り足を作り頭を作り、ついに人の形を取った。周囲の土を取り込み体の外側に纏っていく。やがて、8メートルにも及ぶ土と瓦礫の巨人が出現した。

ぱらぱらと自身を覆う砂をこぼしながらも巨大な足を振り上げ、こちらに向かつて踏み出す。

「……精霊種もが、魔族に堕ちたというのか」

精霊……。人とも動物とも異なる幻想的な存在で、マナエネルギーによって肉体が作られていると推測される生物である。魔導エネルギーを注ぎ込むと、その者の意のままに操れるようになるため、同じく魔導エネルギーを持つ魔族達にも操られるのではと懸念されていた。

魔族のねぐら跡から精霊が現れ、人間に襲いかかる。

それは懸念されていたその時が来てしまったのだと言っことを意味していた。

ゴーレムとの戦い

「……あのゴーレムを討伐する!」
危機を脱した第1小隊の前に、魔族へと堕ちたゴーレムが立ちはだかる。

騎士ルーシエはこれを討伐せよとの命令を出すのであった。

「あ、あんなのを、ですか……?」

フィオンが不安そうな声を出した。

「ああ。そうだ」

騎士ルーシエは告げる。

「……我々なら出来ると、そういう判断ですね」

「そうだ。……さあ、考えている時間は少ないぞ」

レウスが確認し、騎士ルーシエが答える。

「……本当にいけるのか?」

「ああ。出来るさ。僕達みんなの力を合わせればね」

まずは攻略の策を練る。とは言え、時間は少ない。

「ゴーレムは体のどこかに核がある。そいつを破壊すればあの巨体は動かせなくなる。まずは魔法部隊の攻撃で外殻を破壊しよう。」

……シヨーマ

「ああ!」

ゴーレムの歩みは遅い。さらに近くには誰もいない。となれば、
「『サンダーストーム』!」

今ある最大魔法を叩き込むのみ。暴風と雷撃が砂と瓦礫の体を削っていく。

だがコアを露出させるには至らない。しかもゴーレムは魔法が発動し終わると同時に、弾き飛ばされた瓦礫を再吸収し修復を始める。

「ピンポイントでコアを狙ってかないとダメか……?」

「かもね。恐らくは一番丈夫であろう腹部だ。等級は下がるが、『ファイアボム』の方が良いだろう」

「わかった」

「ローゼ、君も攻撃を頼む」

「了解しました」

「セリアの魔法ではこの距離じゃ届かないかな」

「は、はい。ごめんなさい」

「良いよ。……メリル、君は行けるか？」

まだ先程のことを気にして戦えずにいるかもしれない。レウスはそう考えて問う。

「わ、私……」

不安そうに声を震わす。だが果敢に挑むシヨーマとローゼの様子を見、襟元のリボンに添えられた宝石に手を添えると、決意を新たにする。

「……大丈夫。……やれるわ」

「そうか。……よろしく頼む」

「ええ」

メリルは顔を上げる。先程までの辛そうな瞳ではなく、いつものように確かに裏付けられた自信が輝く瞳がそこにはあった。

ゆつくりと歩みを進めるゴーレム。あまりの自重に動きは緩慢だが、自分の重さを勢いに乗せれば、いずれ加速し出すだろう。あの巨体ならば、体当たりひとつで壊滅的な被害となる。

そうはさせまいと攻撃を集中させるシヨーマ達。多少はあの体を削っていったが、中々コアを露出させられない。

そんなシヨーマの隣にメリルは立つ。

「メリル……」

「ごめんなさい。もう、平気だから」

「……そっか」

もう大丈夫。先程とは目の輝きが違うのを見て、シヨーマは安心する。

「さあ、見るが良いわ。……竜操術の、メリル・ドラニクスの本領

というものをね！」

宝石に手をかざすと、宝石自らが碧色の光を放ち始める。

「盟友よ、我が呼び掛けに応えたまえ……！」

その声に、輝きはさらに強まる。宝石を天にかざし、名を呼ぶ。

「その身よ今、ここに来たれ……、碧竜サフィード……！」

光の中から雷鳴にも似た咆哮を轟かせ、翼を広げた1匹の碧い竜が出現した。

「これが……」

「そう。私が力を共有する盟約を交わした竜、サフィード。……呼び出しただけで終わりじゃ無いわよ」

メリルは召喚された竜の、鱗でこつこつした頭を撫でる。

碧竜サフィードの体は、大人の間人より一回り大きいと言う程度で、恐らく先程戦ったアイスベアよりは小さいだろう。だがその勇壮に広げた翼と尻尾は、その体をより大きく見せて力強さを感じさせる。

……メリルとサフィード。2つの魔力が合わさっていく。

術式が生まれ、その力が発動する。

「これが、新たな位に立つ魔法の姿……！」

竜魔法、『ドラゴニックエレメンタルブラスト』。2重に練り込まれた魔力の塊を破壊のエネルギーに変換して放出する大魔法だ。

サフィードの咆哮と共に放たれた碧い光の砲撃は、一撃でもって頑強極まるゴーレムの胴体を貫通し、岩の肉体とその向こうの地面に大穴を穿った。

「すごい……！」
だが。

「……まだ動いてるぞ！」

体の中心に大穴を開けながらも、その巨体は健在だった。衝撃の余波で体をぐらつかせているが、尚もその体は崩れ落ちようとしていない。

「ちょっと！ お腹にコアがあるって言ってたじゃないの！」

「え、いやそれはあくまで予想で……」

メリルの剣幕にたじろぐレウス。

「思いつきり格好付けてたのに外れって……」

「な、何よ！ 格好付けちゃいけないって言うの！？」

シヨーマの呟きのメリルは顔を真っ赤にして逆ギレする。やっばり意識的に格好付けていたらしい。元気が戻ったのは良くわかったが。

「……ていうか、全力でぶっ飛ばしちゃったから魔力空っぽだし、もうこの子送還しちゃうわよ。どうするつもりなの？」

その言葉と共にサフィードは光に消えて、召喚を解除されてしまった。

「あ、消えちゃった」

「最も面倒な胴体が外れたとわかっただけでも十分だよ。他の部位はそこほど丈夫では無いだろうからね。それに今の魔力砲、あれのお陰でどうやら再生能力に不具合が起きているみたいだ。とりあえずはお疲れ様だ、メリル」

残る部位は頭に両手両足。どこを攻めるか。

「胴体じゃないなら、やはり頭かな。……フィオン、ここまで使う機会が無かった……例えば爆弾とか無いかな」

レウスがここまで特に出番の無かったフィオンに聞いた。

「そんな都合の良い物が……」

「あ、は、はい、持ってきてます」

「あるんだ……」

肩に提げていた鞆から金属の筒を取り出す。

「これでいくらか壊せるかな」

「あ、あの、でもそれを使うには、あのゴーレムに、ち、近づかないと……。それに、起爆には、導火線で火を着けないと……」

「うん。どちらにせよこいつで頭を狙うのは難しいだろう。身長が高すぎる。狙うのは足だ。転倒させられれば頭の位置も低くなるし、

行動も制限できる。そこを接近して畳み掛ける」

「それは良いけど、どうやって爆弾を置いてくるんだ？」

「そこはまあ、近接部隊の3人で頑張ろうかな、と」

レウスはデュランとバムスに笑いかける。

「3人で上手いこと敵を攪乱させながら爆弾を置いてくる。危険だけど、まあなんとかなるよね」

にやりと笑いながら無茶を振るレウスだったが、2人は反対しなかった。

「フン。爆弾を置いてくるだけで失敗するヤツがいるかよ」

「……レウス。それ、俺に任せてくれないか」

レウスが手にする爆弾を指し、神妙な面持ちで頼み込むデュラン。

「さっきのような無様はしない。……挽回の機会が欲しい」

「……責任感じて自爆とかはしないでおくれよ」

「そんなことはしない。全員無事に戻ることが、1番の成功なんだからっ？」

「ああ、その通りさ。……では君に任せるよ」

デュランの目をまっすぐに見据え、レウスは爆弾を手渡す。

「……ああ。必ずや、やって見せるさ」

デュランはそれをぐっと握りしめた。

「設置を確認したら、すぐに着火してくれ」

「は、はい。……威力、結構あって、危ないから、す、すぐに逃げて、下さいね」

導火線を爆弾に接続し、先端をフィオンに預ける。

「ああ。わかってる。……それじゃ行くぞ！」

3人は駆け出す。前方にレウスとバムス。後方に爆弾を手にしたデュランが続く。

足元に接近する敵に対し、ゴーレムは右の巨腕を振りかぶる。その威力はアイスベアの比では無い。だがレウスは冷静にそれを回避。轟音と土埃が舞う中、その腕の肘のあたりに向け斬撃を放つ。さら

にその反対側から挟撃する形でバムスが拳を打ち込む。両側から受けた力によって外殻が大きく削れた。

ゴーレムがその腕を持ち上げようとすると、削られた部位から先が自重に耐えきれずもげ落ちる。だがゴーレムはそんなことを気にすることも無く、さらに左の巨腕を叩き込もうとする。

今度は回避に専念し反撃を行わない2人。

隙は作った。

「今だ！」

デュランは一気にゴーレムの足の間に滑り込み、手早く爆弾を設置する。

「着火ー！！」

それを見てレウスが声を上げる。同時に3人は、それぞれ別方向に駆け出し爆弾から距離を取る。

声を確認したファイオンが導火線に火を付ける。15秒ほどで爆弾に到達するはずだ。

だがその時、左腕を地面に叩き付けていたゴーレムは、そのまま地面を尻ぎはらい、土を飛ばした。

それは導火線に被さるように飛び、火を消してしまふ。

「なっ！？」

ゴーレム程度の知能では爆弾の能力も、ましてや導火線の仕組みも理解出来ないはずだった。なのに足元の脅威に対し、適切な対処をとる。これは一体どういうことか。

どこかで使役している者がいるのか？ 騎士ルーシエは周囲に強く気を張る。だがそんな気配は無い。……では魔族に堕ちたから危機察知能力が増したとでも？

「どうする……！！」

この窮地に、突然セリアがゴーレムに向かって駆け出した。

正確には、その足元の爆弾に向かって。

「あ、おい！」

慌ててシヨーマも追う。

「何をやっているんだ!」

さらに続けて騎士ルーシェも2人を追った。

セリアは自分の魔法が届く距離まで接近する。『ファイアボール』を爆弾に直接打ち込み爆発させるつもりだった。

走りながら魔力の練り上げと術式の組み上げを行う。

……それは不思議と、今までのどんな練習よりも素早く正確にできた。

「危ない……ッ!」

炎の弾の発射と同時に追い付いたショーマが彼女の腕を引き寄せ、そのまま庇うように抱きしめ後ろへ倒れる。そしてその2人の盾になるようマントを広げた騎士ルーシェが立つ。

炎の弾が爆弾に命中し、起爆する。

爆発はゴーレムの足元から広がり、その両足から腰までを吹き飛ばす。大穴から上の体だけが残り、地面へと叩きつけられる。

爆発はショーマ達にも及ぶ。だが騎士ルーシェの纏う真紅のマントと甲冑は、その抗魔力によって爆風のダメージを減じさせていた。

「大丈夫か!」

騎士ルーシェがショーマとセリアに聞く。

「は、はい……。セリア、大丈夫か!」

「う、うん……」

胸元に両腕で抱き込んだ頭からくぐもった声が聞こえた。腕の力を緩めると、見上げたセリアと目が合う。

「なんでこんな無茶を……」

「う、ごめんなさい……」

とりあえずは立ち上がる。まだ爆発の余波で土煙が舞っていた。

「私、あんまり役に立ってなかったから、その……」

「だからって無茶が過ぎる……」

「私から言わせれば君も大概だがな」

「あ、す、すいません。つい……」

騎士ルーシェに叱責される。セリアが走り出した時、危険を省み

ず彼女を追ったのは本当に『つい』やってしまったことだった。

「私も、つい……」

その時、土煙の中から鈍い音が響いた。土埃が晴れていく。

「まだ終わってはいないぞ」

いよいよ胸から上だけの存在になったゴーレムがもがいている。

その敵意は健在であった。

レウス達もゴーレムを挟んでショーマ達の反対に立っている。後方からメリル達3人も駆け寄ってきた。

「……さあ、行こうか。みんな」

「……了解！」

決着の時であった。

懲りもなく叩きつけられる左の巨腕を避け、レウスとデュランは頭部へと斬りかかり外殻を削る。そこへバムスが拳を打ち込み、さらに削っていく。そのままゴーレムの後方、レウス達のいる方向へと駆け抜ける。それを追って振り向いたゴーレムに、ショーマとセリアが魔法を放つ。ちょうど削られた部位に命中し、また削る。

「……見えました！」

集中攻撃を受け、頭部の中から青白い石のような物が僅かに覗いた。

あれがコアだ。だが、すぐさま覆い隠すように頭部が歪んでいく。

「コアが隠れる！」

「問題ありません。……あの程度なら！」

ローゼがとっておきの矢を抜く。炎の魔力を込めた赤い宝石を鏃に練り込んだ魔導の矢だ。

弓を構え、矢に闘気を込める。弓術技、『烈火迅』は、高密度に凝縮された炎の魔力を得て、更なる破壊力を備える。

「ッ！！」

赤き閃光を纏い放たれた矢は、一直線にゴーレムの頭部外殻を突き抜け、奥へと潜り込もうとするコアへと突き刺さる。

闘気と魔力が放出され、コアは頭部ごと燃え上がった。がらがらとけたたましい音を立てながら外殻は崩れ落ち、露出したコアはどろりと溶けて、やがて消える。

そしてコアを失ったゴーレムは、ただの砂と瓦礫に戻っていった。

「やった……んだよ、な」

辺りを静寂が包む。もはや敵の姿は無い。

あまりにも、静かだった。

ここはもう、ずっと昔に滅びた小さな村だった。

魔族の姿など、ここには無い。

勝利のファンファーレを鳴らす者もいない。

今ここに居るのは、共に戦った9人だけだ。

「ああ……。僕達の勝利だ」

初めての戦いは、あまりにも静かな勝利だった。

第1小隊のメンバーは、川近くの拠点へと戻ってきた。時間はもうすぐ太陽が最も高い位置に昇る1200時であった。

「おお、お帰りなさい！　なんだかすごい音してたし、心配してたんだよ」

第2小隊長を務めるリシウスは呑気に彼らの帰還を祝った。

「ああ。第1小隊、ただいま帰還しました」

「うん。みんな無事な様で何より……。無傷って訳でも無いようだけど」

リシウスはシヨーマのローブにこびりついた血痕をはじめ、メンバーのくたびれた様子に気が付く。

「ああ、それなんだけど、ちょっと話が……」

「私から話そう。ロックス、少し良いか」

騎士ルーシエが前に出る。騎士ロックスを呼びつけ、ひそひそと会話をする。

「わかりました。……第2小隊！ 重要な話がある！ 集まってくれ」

騎士ルーシエは先程の戦いについての異常事態について伝えた。

想定外の内容に第2小隊の間にざわつきが起こる。

「では、これから我々の行う予定の攻撃はどうするのです？」

「いや……第1小隊に関しては敵の情報を把握できていなかったため、危機に転じてしまったと言っただけだ。今はその情報があるため、それに対応できる、と私は判断する。攻撃は行う。」

ただし、さらに想定外の事態が起きる可能性を考慮し、ロックスだけでなく私も攻撃に随伴させてもらう」

敵が同じ魔力を持った魔族同士で集中しているという情報があれば、第1小隊もどの魔法攻撃を使うべきか、敵の調査を行うという選択肢も持っていた。だがそれが出来なかったからこそ、レウスとデュランは負傷を負ったと言えた。

だが第2小隊はそうでは無い。むしろ楽かもしれない。先程の戦いも、最初にメルルが『アイスピア』ではなく炎系の魔法を撃つていればそれだけで終わっていたかもしれないのだ。次の戦いではそれが出来る。

つまり異常事態ではあるが、好機へと転換できるものでもあるのだ。そのため随伴騎士の2人は撤退ではなく攻撃の判断を下した。

「第1小隊の拠点防衛は私抜きで行ってもらうことになるが、第2小隊の報告によれば敵の接近は無かったとのことだ。安全と判断し、私が待機する代わりに、追加結界を張っておくのみに留める。追加

結果はこちらで用意するので、君達は当初の予定通り防衛を行うこと。ただし、くれぐれも戦いが終わったからといって油断しすぎないように。

……それでは、1230時より第2小隊の行動を開始する。準備を急げ」

「了解」

騎士ルーシエの話が終わると、第2小隊は装備等の準備を開始する。彼らにとっては、朝に第1小隊が抱いた気持ちをこれから持つことになるわけだ。

「第1小隊の皆も、ひと休みしたら食事にと良い。第2小隊はもう済ませて、君達の分の用意も出来ているから。食べ終わったら片付けを頼む」

騎士ロックスが告げた。

「了解しました」

食事の話をされると、急にお腹が空いてくるものだった。時間も調度良い頃合いである。

「なんか、落ち着いたらお腹空いてきちゃった」

セリアが笑って言った。他の皆も笑みをこぼす。

「はは。俺もだよ」

「装備を置いて第2小隊を見送ったら、いただくのか」

「うん、そうしよう」

「ふう、ごちそうさまと……」

第2小隊が出立して、食事を済ませる。皆黙々と食べていた。

「なんだか、今頃になって……勝ったんだ。って実感がわいてきたよ」

シヨーマはゆったりとした心地で、そんなことを呟いた。

「あ、私もなんかわかるかも。終わった時は、なんかまだ緊張が解け切れなかったっていうか」

セリアも同意する。隣でフィオンもこくこくと頷いている。

「なんだろうなあ、この感じ」

達成感、というのとは違うような。

「私は、まあ、皆無事で終わって良かった。って感じだったわ」と、メリル。

「実戦は訓練通りにはいかない、ってよく言うけど、やっぱりその通りだったわね」

「そうですね。皆様無事で本当に良かったです」

ローゼが同意する。

「俺は、……随分と情けない結果に終わってしまった。正直あまり良い気分では、無いな」

デュランは目を伏せて言う。

「……さっきは言いそびれたが、ショーマ。治療してくれたこと、礼を言わせてもらう」

「ああ、うん……。ちゃんと上手くいって良かったよ」

デュランの口からそんな言葉が出るとは。ショーマは少し意外に思う。そういえば彼とちゃんと言葉を交わしたのも、あの時が初めてだった気がする。

「ま、少々無鉄砲が過ぎたな、お前は。何だったらこの俺が鍛え直してやるうか」

「笑えない冗談はよせ」

バムスが嫌味っぽく言う。デュランは否定したが、バムスが割りとは本気で言っているというのはショーマにはわかる。何だかんだで放っておけないのだろう。

「レウスはどうだった？」

「僕は……、まだ終わったという気にはなれないよ。帰りの道中もあるし、今だって結構気を張ってるんだよ？」

弛緩した空気に釘を指すように言うレウス。とはいえ面持ちは穏

やかである。

「リヨールに戻って、報告を済ませて、家のベッドに倒れ込んで、ようやくと実感が持てるんじゃないかな」

「そっか。うん。まだ終わりじゃないもんな。気を引き締めるよ」「そうしてくれ」

こうして第1小隊の8名は、それぞれ思い思いの『初めての戦い』を噛み締めていた。

……そしてまもなく、初めての旅もまた、終わりを迎える。

ひとつ終えて、

第2小隊が帰還する。時間は1530時。

「予想通り、君達と似た状況だったよ。ゴーレムも現れた」

「そうか……でも無事で良かったよ」

2人の小隊長が挨拶を交わす。

「時間は少し遅いが、状況が状況だ。これよりリヨールに帰還する。速やかに撤収作業にかかってくれ」

「今からですか？」

「ああ。リヨールに辿り着くのは深夜になるだろうが、仕方無い。

日の出ている内に街道まで行けば夜道でも何とかかなろう」

「わかりました」

騎士ルーシエの指示を受け、第1小隊は夜営設備の解体を始める。

あまり日が暮れるまで時間は無かったが、仕方無い。一同は手早く作業を済ませ、一夜を明かした川縁を後にする。

獣道を抜け、路面の荒れた街道跡を進み、リヨールへ続く、舗装の整った街道に到着したのは夕陽が眩しい時間だった。

「後は楽そうだな……」

「夜盗が出る可能性もある。恐れるほどでは無いだろうけど、油断しないだね」

「り、了解……」

街灯が所々にあるため、街道は夜間でも比較的安全だ。だが既に日は完全に落ち、街道の向こうは闇が広がるばかりだ。一同は歩みを速めて進む。

結局、リヨール市街の灯りが見え始めたのは、2200時前であった。こんな時間では門を開けてもらうにも一手間かかってしまう。

「やっと帰ってきた……」

誰ともなくそんな呟きが漏れる。

「申し訳無いけどまずは学校に向かうよ。報告を済ませなきゃ」

レウスが告げる。ようやく帰れたという安堵の気持ちだった一同はまた少し気が滅入っていく。

「ほら、あとちょっとだ。最後まで気を抜かずに行こう！」

街を進み、リヨール士官学校に到着する。学生はもはや誰も残っていないが、残っていた数名の教員達が集まりだし、凱旋する騎士候補生達を出迎えた。

代表して、出立時にも彼らを見送ったボンボラ教員が前に出る。

「リヨール士官学校1期生、第1、第2小隊。作戦を完遂させ、ただいま帰還しました」

代表してレウスが報告をする。

「はい。皆無事に帰ってきてくれて本当に良かった。もう遅い。詳細な報告は明日にでも。……良い経験になりましたかね」

「……はい」

レウスは力強く頷いた。

それにあわせて、職員達から拍手が送られる。初めての戦いを終えた彼らに精一杯の賛辞を込めて。

そのささやかな賛辞を受け、ようやくと勝ち得た物を実感するシヨーマ達は、照れ笑いを浮かべた。

「みんな、ここまでお疲れ様だった。本当に、ありがとう」

レウスも笑みをこぼす。ようやくと肩の荷が降りたという感じだ。「こちらこそ。お前が引つ張っていつてくれたお陰で上手く行ったんだから。……本当にありがとう。レウス」

「ええ。良い小隊長だったわよ」

笑い合う第1小隊の一同。

きつと誰にとつても得難い経験になつたはずだ。

この8人が揃つたからこそ、この2日間があつたのだから。

荷車は個人的な荷物を除いて、教員や職員達が片付けることとなっている。実際の騎士団でもこういつた作業は専門の者が行うことになっている。今回はその役を教員達が担当したというわけだ。

ボンボーン教員と話をしていた騎士ルーシエが一同の前に立つ。

「まずは皆、今回の作戦、ご苦労であつた。

今回の異常事態に関しては先程私から報告を済ませた。君達は明日にでもその件を含めた作戦報告書を小隊ごとに作成し、教員の方に提出をすること。それをもって本作戦は終了となる。

……この件に関して色々気になることもあるだろうが、騎士団の方で情報を精査し終えたら、いずれ君達にも情報は回す。だから今日はもうゆっくり休み、また明日から学業に勤しむことだ。

この経験を糧に、いずれ騎士となつた君達とともに戦う日を待っている。私からは以上だ」

その後、明日の報告書作成を行う集合時間を決めて、第1小隊は解散となつた。シヨーマは皆と別れを済ませ、寮に戻る。

大所帯で2日を過ごし終えた今、1人で歩いていると妙に寂しさを感じてしまう。

「お、帰ってきたのか」

「あ……、お疲れ様です」

寮近くにいた警備兵と出会い、挨拶する。なんだかとても懐かしいことのように思つてしまう。

外から寮を見上げると、灯りの付いている部屋はほとんど無かつた。……あの人もきつともう眠っているだろう。

しかし、期待せずに誰もいないロビーに入ったシヨーマを優しく

出迎える女性がいた。

「あ……」

「お帰りなさい。シヨーマさん」

たった2日会わなかっただけだ。

なのに、その笑顔を見て、ようやくと帰ってきたんだという思いが込み上げてくる。

「ただいま。リノンさん……。もう、こんな時間ですよ。まだ起きてたんですか？」

「ええ、……起きてました」

「……はは」

「……ふふ」

冗談めかして笑い合うと、なんだか気持ちが悪くなる。

何か話したいと思ったが、中々言葉が出てこない。

「あ、そうだ、これ……」

シヨーマは胸のポケットから預かっていたペンダントを取り出す。

「それは……、まだ、返さなくて良いです」

「え、でも」

「これから先、まだ一杯こういうことはあるんですよ。だから……」

……

「……わかりました。もう少し、預かせてもらいますね」

ぎゅっと握りしめ、またポケットに戻す。

「あ、鍵……持ってきてますね」

「はい」

そうだ。今回は最初の始まりでしか無い。今後もまだまだずっと続くこと。また何日も彼女の顔が見られない日が来るのだろう。その時このペンダントを見れば、思い出せるかもしれない。

「お待たせしました」

受付の奥から戻ってきたリノンが鍵を手渡す。

「あ、どうも。……えっと、それじゃあ、お休みなさい」

段々気恥ずかしくなってきたので、自分の部屋へ向かおうとする。

だが、背中から抱き締められ、足を止めてしまっ

(え、抱き……、え?)

リノンがシヨーマを背後から抱き締めていた。

「ちゃんと帰ってきてくれて……良かった……」

背中に顔を押し付けられているので表情は見えない。だが、さすがにここまで直接的な行動に出られると……、困る。

こんなことまでされたらもう、今までのやりとりやらこの行動から推察した彼女の気持ちに、ここで応えてしまうべきなのだろうか。だが、またも頭の中に誰だかの顔が浮かびそうになる。そしてちよつどそうなつたところで、彼女の方から体を離されてしまった。

「ごめんなさい。今日はもう、ゆつくり休みたいですよね。……変なことしちゃって、すみません。私ももう、休みますね」

「え、は、はい……」

「そ、それじゃ……」

リノンは俯いて早口に言うと、そそくさと受付の奥にある部屋に引っ込んでしまった。わずかに見えた顔が真っ赤だったのは気のせいではあるまい。

追いかけてしまうべきだろうか。

しかしみつともない話だが、やはり疲労は激しかった。朝から歩いて戦って怪我して勝利してまた歩いて……。そして今のやりとりだ。

どつと疲れが吹き出してくる。今すぐこの場で倒れこみたい気分だった。さすがにそれはまずいので、ここは諦めて自分の部屋まで戻る。

なんとか辿り着いたベッドに倒れこむと、そのまま沈むように、眠りに落ちていつてしまった。

(……まあ、いいや……)

いずれまた機会があるかもしれない。今はただ睡魔に身を委ねるだけだった。

……翌朝受け付けにいたのはリノンではなく彼女の父親だった。顔を合わせずにすんで良かったのか、悪かったのか。

翌日昼頃。再集合を果たした第1小隊は、作戦報告書を書き上げていた。

「うん、不備は無いね。これで提出して良さそうだ」

レウスが皆で相談しながら書き上げた報告書を確認する。

「これで今度こそ作戦終了だ。みんな、本当にありがとう」

「ああ。一時はどうなるかと思ったけど、皆無事に帰ってこれて良かったよ」

改めて振り返ると、色々な経験が出来たものだと思う。まだ話したことも無い人物を知れたり、危ない目にあったり。知っている人の知らない部分を見たり。

報告書作成が終了したので、これで解散となった。昨日の今日ではあるが、皆はまだまだ自分を鍛えるため、各々授業を受けに行く。……第1小隊は今回限りの組み合わせというわけでは無い。また何か作戦に参加するとなれば召集されるだろう。その時はまた誰もがもう一回り成長していることだろう。……それまでは、しばしの別れだ。

「シヨーマ」

廊下に行くシヨーマを呼び止める声があった。メリルだ。

「ん、どうかした？」

「うん、あー、その……」

「？」

珍しく歯切れの悪い様子だ。

「あの、そのね。昨日の、こと。なんだけど。あの、私をかばった、せいで、その……」

……腕を怪我した時のことだろうか。

何となく怪我した腕の辺りをさすってみる。傷はすぐ治療したので痛みも傷痕ももう無い。強いて言うならロープには跡が残っているが、学校に返却したので今はたぶん修繕作業でもしているだろうか。

「お詫び、ってわけでも無いんだけど、その……」

……ずいぶん殊勝なことを言い出すものだと思った。

「あれはまあ、うん……。確かにすっげー痛かったけど。あんまり気にしすぎるなよ。もう治ってるし」

「そ、そういう問題じゃないでしょ……。だから、その。……こ、ここ今夜、しょ、食事でも、一緒に、どうかな、って……」

何を言い出すかと思えば。

「それなら……」

第1小隊の皆で行けば良いんじゃないか。と言いかけそうになって止める。さすがにシヨーマもそこまで失礼では無かった。言いかけたのは事実だが。

「今夜？」

「え、ええ。お店、予約してあるから……」

中々どうして仕込みが速い。断られたらどうするつもりだったんだ。まあそんな気は無いが。

「うん。わかったよ。どこかで待ち合わせる？」

「そ、そうね。それじゃあ……」

約束を取り付けるとメリルはその足で竜操術科の授業に行ってしまったので、1人で黒魔法科に向かう。

教室に入った途端、シヨーマに視線が集まる。何事かと思ったが、

選抜の16人の1人だからかとすぐに気付く。ちらちらと様子を見るばかりで、皆あまり話しかけてこようとは思わないようだ。

とりあえずセリアの姿を探し、隣の席に着く。16人の内の2人が揃いさらに注目が集まったが、こちらも気にしないことにする。

「よし」

「あ、ショーマくん」

熱心に魔法の教本に目を通してている。

「昨日の今日で、ずいぶん頑張るな」

「むー、話したこと覚えて無いのかな」

「覚えてるよ」

結果がどうあれ今まで以上に頑張る、という話だったはずだ。

確か自分も手伝いたいとも言った。

「俺に出来ることあるかな」

「ショーマくんは教本の解き方教えるの苦手でしょ」

「そうだけどさ……」

中々鋭いところを突いてくるものだった。

「もっと他の所なら手伝ってもらえるかもだしさ。今は私なりに頑張ってみるよ」

「そっか。ならせめて邪魔にならないようにしておくよ」

「あはは。ありがと」

そう言ってセリアは意識を教本に戻す。ずいぶんと集中しているようで、やっぱりあの戦いは良い経験になっているのだろう。

(俺もそろそろ新しい上級魔法にも手を付けてみようかな……)

やはりまだ強力な魔法には恐れがある。だが『サンダーストーム』以外にも大きいのがあったほうが良いとは、あの戦いで感じた。

恐がっていないで自分も前へ進まなくては、と覚悟を決める。

授業が終わり廊下を歩いていると、向こう側からフィオンが歩い

てくる。彼女もこちらに気づき、頭を下げる。

ふと、川縁でのやりとりを思い出し、あることを思い付く。

「なあ、フィオン」

「あ、はは、はい。な、何でしょう」

相変わらずよくつかえて喋る子である。

「あー、まずは昨日までの、お疲れ」

「は、はい。こちらこそ……」

「えっとさ、ちょっと頼みがあるんだけど、聞いてもらえる？」

「え、えっと、私に出来ること、なら……」

「……紅茶の成分の解析とかって、出来るかな」

「はあ、……紅茶、ですか」

「水筒に入ってる紅茶を分析して、例えば、使ってる葉が何かとか、どこで作られてるか、とか。ほら、川の水調べたときみたいにさ」

「……普通の紅茶じゃ無いんですか？」

不思議そうなフィオンである。まあ普通は紅茶にそんな調べる理由があるとは思わないだろう。

「ああ、えっと……。俺の記憶に関わってるかも知れなくて……」

あれ、俺の記憶喪失の話ってしたっけ」

「え？ そうだったんです、か。……いえ、聞いてないです」

「ああ、まあ、実はそうなんだよ。で、その前から持ってた紅茶があつてさ……」

「あ、はい。そういう事情なら、私、頑張つて、みます」

あっさりと承諾してくれた。

「そっか。良かった。ありがとう。……今は寮に置いてあるから、また明日持つてくるよ」

「はい。あ、私は、いつもは薬師術科にいると思うので」

「うん。本当にありがとう。じゃ、また明日」

「は、はい。……また明日」

別れを告げて、その場を立ち去る。

メリルとの約束もあるし、一旦寮に戻ることにする。

「あ……」

寮に戻ったレウスを迎えたのはリノンであった。

「お帰りなさい、シヨーマさん」

昨夜のことなど何も無かったかのような様子だ。切り替えの早いことというか。

しかしシヨーマはそう早くも無いので、対応に困る。結局ろくなことも話さずそそくさと鍵をもらってその場を立ち去る。

この後外出するならもう1度、その帰りにさらにもう1度会うことになるというのに気付いたのは部屋に着いてからだった。

「あら、お出掛けですか？」

着替えを済ませ、再びリノンと顔を合わせる。彼女がいつも通りに過ごすなら、シヨーマもそうしようと考えた。

「ええ。ちよつと今日は外で食べてこようと」

何気無い風を装う。まあ嘘は言っていない。

「女の子ですか？」

「え」

いきなり凶星を突かれた。

「あ、ええ、まあ、そうなんですけどそうじゃ無いって言うか、いや無くは無いですけど、あ、そう。ほら、昨日までのあれで、打ち上げ、みたいなものであって」

「そうなんですか。楽しんで来てくださいね」

いつもの笑顔なのに全然違うように見えたのは、この何となく抱える後ろめたさのせい……だとはい、思いたくなかった。

待ち合わせ場所のユニコーン像の前で待つこと10分ほど。

(そういえば街をうろついたことって、全然無いな……)

学術都市と呼ばれるこのリヨールは、その名の通り、士官学校を始め、魔法の研究所や数学や理科学を研究する機関が多く存在する。そのうち彼ら研究者に向けた商店街が発展していき、やがては王国の中心に近い地の利を活かして、貿易の仲介業などでも発展していき、今では王国でもかなりの大都市にまで発展した。

そんな結構な都会だというのに、シヨーマはほとんどの時間を学業に費やして遊ぶこともしないでいた。そんな余裕など無かったのだが。

何てことを考えている内に、待ち合わせより少し早めにメリルが到着した。

「あら、もう来てたの」

メリルの格好はいつもより落ち着いた感じがする、シンプルなワンピースタイプのドレスにストールを巻いた、気取りすぎず、それでいて気位を感じさせる出で立ちだった。

(俺はこの格好で良かったのか?)

一応それなりの服を選んだつもりだったが、所詮は初めてこの街に来た時に、着替えとしていくつか適当に買った物の1つである。

「じゃあちよっと早いけど行きましようか」

「ああ、うん」

特に何も言われなかったし、問題無いのだろうか。それなら堂々としていたほうが良いかもしれない。あれこれ考えながら、メリルの隣を歩いて行く。

「実はあんまり街を出歩いたこと無いんだ」

「あら、そうなの。じゃあこの辺りにどういいうお店が並んでいるか

もわからないかしら」

「……お金持ちの人向けなのはわかるよ」

貴金属や高級な服が並ぶ店がたくさんあることくらいはシヨーマにもわかった。街はそろそろ暗くなってくる頃だが、この辺りには洒落たデザインの街灯が多く、まだまだ賑やかだ。

辺りを歩いているのも着飾った人ばかりで少し居心地が悪い。

「せっかくだし少し寄ってみる？」

「俺が行っても良いところなのかね」

「さあ。どうかしら。ふふ」

楽しそうに笑うメリル。ちょっと緊張していたが、その様子を見て少し落ち着く。

「この赤いジャケットとか案外似合うんじゃないかしら」

「……派手すぎないかい？」

「そんなこと無いんじゃないかしら」

……はて、なんだか以前にもこんな会話があったような。

「ま、いいわ。そろそろ予約していた時間だし、行きましようか。

……シヨーマ？」

ぼーっとした様子のシヨーマにメリルは声をかける。

「あ、ああ。ごめん」

「……もう」

連れてこられたレストランは40年もの歴史がある老舗だという。上流貴族御用達の高級店であった。

窓辺の席で、街灯の灯りが輝く街の様子を見下ろしながら食事が用意されるのを待っていた。

「……こういう所には、よく来るのか？」

「毎年私の誕生日に来ているわ」

「……、へえ」

そんなところに呼ぶとは、お礼にしてもやりすぎでは無いだろうか。

「……あんな風に助けられたんだもの」

「考えていることを見透かしたのか、メリルは自分から話し始める。とつさに体が動いたんだよ」

「それでも、私の代わりに怪我をさせてしまったわ。もし助けて貰えなかつたら、命を落としていたかも知れないし」

「ん、まあ……そうかもしれないけど」

「それに、私が落ち込んでいた時にも、声をかけてくれた」

「あれは……うん……」

「あんな風に言ってもらえたから、私、最後に立ち直れたんだと思う」

「シヨーマは、あんな落ち込んでいるメリルの姿が、嫌だった。だから何とかしたかっただけだ。」

「俺はさ、メリルはすごい自信家で、それに見合う力を持った、立派で……、何て言うのかな。非の打ち所が無いって言うか、……憧れるような存在だと思ってた。……でも、意外とそうでも無かった」

「……がっかりさせちゃった？」

「そんなこと無いよ。ちゃんと自分だけで立ち直れていたし。それはやっぱりすごいと思う。」

「……それでも失敗してへこたれる弱いところもある。」

「そんなだから君のことを、俺は……」

「君のことを……？」

「……何？」

「聞き返すメリルの顔を見る。」

「透き通る碧い瞳は、強くて、気高くて、優しく、か弱い。」

「メリルは以前、自分を『上に立つ者』と言った。『強い者』として『弱い者』を導く『責任』があると。」

「彼女は確かに『強い者』だと思う。とても立派で、頼りになる。」

「自分の信念に基づき、するべきことを果たす。その迷いの無い姿に人はきつと心を打たれ、彼女の後を行くだろう。」

でもそれはまだ、完璧な物じゃない。まだどこかに至らない物を、『弱い』部分を抱えている。

失敗もする。失敗して後悔もする。後悔して自信を無くしかけたりもする。

この重荷を背負うにはまだ、彼女の両肩はか弱すぎる。

シヨーマにはそんなメリルが、とても儚く感じられたのだ。

か弱くも、凜々しくあろうとする少女メリル。

君のことを……。

「俺は、君のことを……支えて、あげたいんだ」

また次の始まりへ。

君のことを、支えてあげたい。

彼は、そう言った。

メリルは自分の弱さを見透かされたことを、しかし不思議と情けないとは思わなかった。

……この人だから、だろうか。

彼は自分の言葉に興味を持ってくれた。自分もこうなりたいた言ってくれた。

だが、彼以外にも自分のことを肯定してくれる人はいた。自分のようになりたいと言ってくれた人もいた。

別に、彼もその中の1人というだけだ。

シヨーマという人の、どこが特別なのだろう。

……良くわからない。どうしてこんなに彼のことが気になるのだろう。

魔族から体を張って庇ってくれたから？ 落ち込んでいた時、叱責してくれたから？ それだけ？

そういう良い所も確かにあるけれど、まだまだ全然頼りになるとは言えないし、頑張らせようとしたら泣き言を言っし、能天気だし、すぐ他の女の子に良い顔しようとするし……。

頑張っている癖に、情けない所も多いから、ということだろうか。

目指すべき道が知らなくて、ふらふらと真っ直ぐ前だけを見ていないから、それが危なっかしくて、しょうがないから。

……そうなのかな。

……それなら。私は……。

「一丁前なこと言って……。生意気」

「……そう、かな」

ずいぶん恥ずかしい発言への返答に、彼は照れ臭そうに笑った。

「……そうよ。……でも」
「ん？」

「私も、そんな貴方のことを、……支えてあげたい」

その頃、リヨール士官学校、槍術科の訓練室では、槍を手に鍛練に励むデュランと、その様子を黙って見ているバムスの姿があった。
「……用があるなら言え」

じつと見ているだけのバムスがいい加減鬱陶しくなり、デュランは自分から声をかける。

「ん？ お前の方こそ俺に話すことは無いのか？」

「……」
「いちいち嫌味な物言いをする奴だと思つ。」

「……昨日は、迷惑をかけたな」

「違つ。それはただの事実だ。他に言うことがあるだろつ」

「……」

謝罪でないなら、俺はもっと強くなる、とか、そういう決意表明でも聞きたいとかならうか。それはそれで腹が立つが。

「お前はなぜ強くなるつとするんだ？」

沈黙するデュランに、バムスは言葉を誘つ。

「俺は、……弱いからだ」

デュランは昨日の戦いで、自分の弱さを認めた。

恐ろしい敵を前に震え、後先も考えずに突っ込み、ひどい怪我を負った。力も弱いし、心も弱い。

「お前は当たり前前のことしか喋られんのか？ そうじゃない。強くなつて何がしたいのか聞いているんだ」

「……俺は」

「無いんだろつ」

「……ッ」

デュランは言葉に詰まる。

「精々生意気な貴族の鼻を明かしてやりたいとか、そんな所だろ？」

「そんなんじゃない……！」

「何が違う。お前はしがない平民で、貴族には誰彼構わず敵愾心を見せて、そしてその癖騎士やら將軍やらを目指している。これで違うなら何だと言っんだ。何か？ 貴族に家族でも殺されたか？ フ、そんなわけ無いよな。」

お前の父は先の戦争で平民から徴兵され、功績を上げ、どこぞのブロウブ家の騎士とは身分や年の差を越え『親友』とまで呼ばれていたそうではないか」

「……なぜ知っている」

「お前の嫌う貴族というステータスを活かした情報網だよ。」

フン。……そんな父を持ちながら何が気に入らんというのだお前は。名のある騎士と『親友』と呼ばれるほどであっても、結局平民のままで終わったことか？ 騎士になれるかも知れなかったのにならなかつた父が憎たらしいのか？」

「親父は……悪くない」

「だろつよ。あの騎士と『親友』などと呼ばれる男だ。さぞかし立派な傑物であろうさ。息子が尊敬してやまなくらいにはな。」

ではお前は何を原動力にして、この険しい騎士への道を進む？

下らない嫉妬か？ それすらももう無さそうだな。あんな戦いの後では」

次々と自分の心をさらけ出していくバムスに、デュランは我慢の限界であった。

「いい加減にしろ！ お前は俺に何を言わせたいってんだ！」

「フン。気が短いヤツだ。まあ良い。なら俺の方から言っつてやる。」

お前の方から頼み込んでくるのが理想だったのだがな」

しかして、バムスの口から出た言葉は、デュランにとっては何は意外な物だった。

「俺の下に付け。デュラン」

「……………!?!」

「俺がお前に『目標』を与えてやる。お前はそれを持っていない。だから強くなれない。進む方角がわからないからフラフラして前へ進めない。」

「……………お前は進むべき道を知れば、強くなれるんだ」

「何を……………言っている?」

「狼狽するデュランに、バムスは言う。」

「お前の『貴さ』を、俺に見せてくれ」

翌朝。

シヨーマの目覚めが健やかだったのは、昨夜美味しい料理をたらふく頂いたからというだけでは無かっただろう。

やっと、自分にも目指す物が出来たような気がした。

自分の力を誰かのために役立てる。その相手がまずは1人、見つかった。

頑張る理由がある。それだけで随分と1日の目覚めが違った。

出掛ける準備を始める。鞆から例の紅茶が入った水筒を取り出す。フィオンに調べてもらおうよう約束した物だ。

フィオンといえばふと、あることを思い出す。そう言えば彼女からハンカチを借りたままだった。川で水を汲んだ時、足を拭くのに使った物だった。

（洗って返した方が良いよな……………）

とはいえ今から洗っても乾くまでは時間がかかる。仕方無い。そこは素直に詫びて明日渡すことにする。

取り急ぎハンカチの洗濯は今の内に済ませて、部屋を後にする。

「あ、おはようございます、リノンさん」

「おはようございますシヨーマさん。昨日は楽しめました？」

昨日帰ってきた時はまた彼女の父が鍵の受付に立っていたので、話をすることは無かったのだ。

「ええ。すごい美味しい物ご馳走になっちゃって」

今まで食べたことの無いような物ばかりだった。たぶんしばらくありつけない物だろうから、舌が忘れないようにしたいところだ。

「そうなんですか。羨ましいですね。……つかぬことをお伺いしますが、お帰りは何時頃でした？」

「確か20時くらいでしたけど、それがどうかしました？」

「……。いえ、別に」

「はあ」

何かあったのだろうか。まあ深くは聞くまい。

「あ、これ鍵です」

「はい、お預かりしますね」

「お願いします。……あの、リノンさん」
出来るだけ何気無い風を心がけて言う。

「俺、ちゃんとあなたのこと守れるように、頑張ります。……それじゃ」

そして言うだけ言ったら逃げるように立ち去る。やっぱり少し恥ずかしい。

「あ……」

何か言いかけたその言葉も、聞かないでおく。

リノンが『2人目』に出来たら。

そう思って、今日の1日に取り組んでいこう。

まずは薬師術科のフィオンの所に向かう。

「フィオン、おはよう」

「あ、おはよう、ございます」

「これ、昨日話した紅茶」

例の透明な水筒を渡す。

「はい。あの、すぐに、とは行かないですけど……」

「ああ、そんな急ぐことでも無いから」

「はい、じゃあ……お預かりします。……変わった素材の水筒ですね」

透明で、厚みの無い容器を不思議そうに眺めているフィオン。

「そうなんだよ。そっちの方が手がかりとしては重要そうだけど、

……調べられないよな」

「ええ、これはちよつと、専門外です」

くるくると蓋を開けて中の臭いを嗅ぐ。

「……う」

「あ」

「ちよつと、その、ちよつとですけど、……腐ってますね
しかめっ面になるフィオン。

「ごめん……」

「いえ……、ほんのちよつとですし」

「あ、ごめんと言えば、ハンカチ、借りたままでごめんな。明日には返すから」

どさくさ紛れみたいで何だが、ここで謝っておく。

「え、あ、ハンカチ、ですか……。それは、別に良いですけど」

「ちゃんと洗って返すから」

「あ、そんな、お構い無く」

「良いから良いから。それじゃ、俺はそろそろ。それ、よろしくね」

「あ、はい」

「そのうち、何かお礼するから。じゃ」

「え？ えつと……」

お互いに譲り合っていては進まないの、適当な所で強引に切り上げることにした。

「あら、シヨーマ様。ごきげんよう」

「あ、どうも」

廊下を歩いていると、ローゼとすれ違う。

「先日はお疲れ様でした」

「ああ、いえ、こちらこそ」

彼女とは同じ小隊で2日を過ごしたが、直接話をすることは無かった。誰にでも様付けで呼んだり、随分と丁寧な物腰が印象的である。

「そう言えば、あのゴーレムに最後止めを刺したのはローゼさんだったよね」

戦闘では結局傷1つ負わずに事を進めていたし、結構な実力者なのかもしれない。

「ええ、そうですね。でも、まだまだですよ」

「そうかな」

「そうですね。私も、シヨーマ様も、他の皆様も。もっともっと成長できるはずですよ」

「……うん、そうだね。もっと頑張らないと」

「ええ。それでは私は授業を受けに行きますので、これで」

「ああ、それじゃ」

「またお会いしましょう。では」

物腰は優しいが、話している内容は自分にも他人にも厳しい、といった感じである。

まだまだ知らない所のあるローゼだが、彼女とはまたいずれ話す機会もあるだろう。

白魔法科の教室を前にしたところで、レウスと出会った。

「あ、シヨーマ。授業が始まるところで悪いけど、僕達に召集がかかったそうだよ」

「召集？ また作戦？」

「いや、僕と君の2人だけらしい」

「2人だけ？」

「ああ。……君に関することかもしれないよ」

確かに。シヨーマ本人のことなら彼のサポート担当のレウスも呼ばれるのはありえる話だ。

能力のことか、記憶喪失のことだろうか。

「……まあ、行ってみればわかるか」

廊下を歩きながら、シヨーマはレウスに問いかける。

「レウスは、騎士になるつもりなんだよな」

「ああ。そうだよ。ブラウブ家は代々騎士の家系として、王国に仕えてきた。僕もそうなるつもりだ」

シヨーマの知るレウスと言えば、気さくで良いやつで、自分のような面倒な経歴の持ち主にも文句一つ言わず力になってくれて、貴族の身でありながら誰にでも分け隔てなく接し、剣を振るえばその腕はかなりの物、隊長になれば積極的に仲間を率いていく。

要するにまあ、隙の無い好人物。といった具合であった。

「家の決まりに従って、騎士になれば国に仕えて……って、何て言うか、自分のやってみたいこと、とかそういうのは考えたりしないのか？」

「うーん。僕なりに考えた結果でもあるよ。国に仕えることは民に仕えるとも言えるし、民が平和なら国は栄える。巡り巡って民でもある僕自身にも恩恵があることになる。そうだろ？」

「そういう物、かな？ ……いや、ほら何て言うか、もうちょっとこう、具体的な物とか、無いのかなって」

レウスの言うことはまあわかるが、どことなく話のスケールを大きくして誤魔化されたような気もしていた。シヨーマが聞いてみたかったのはもつとこう、個人的なことだった。

「中々痛いところを突くね、君は……。恥ずかしい話だが、そういう具体的なことと聞かれると、正直答えにくい。確かに僕はそう言った物を、持ち合わせていないんだよ」

「……そうなのか」

「ああ。でもいつか持てる日が来るかもしれない。だからそのいつかに備えて、日々の努力は重ねていたいと思っている」

「目標が無いのに頑張れるのか？」

それで悩んでいたシヨーマには気になる話であった。

「……目標と言うのもないけど。亡くなった父に聞かされた言葉を、大事にしているよ。……『勇気ある者であれ』。父はいつもそう言っていた」

「勇気……」

「そう。意味は僕なりに考えた物ではないけどね。……先が見えない物にはどんな物にも多かれ少なかれ『恐怖』がある。戦いなら命を失うかもしれない恐怖。商売なら資産を失うかもしれない恐怖。人との付き合いなら、嫌われてしまいかもしれない恐怖。……自分の苦労は、結局何の結果ももたらさないかもしれないという恐怖。

……恐怖にも大小色々あるだろうけど、恐れずに、自分を信じて進もうとする心。それが勇気だ。って、僕はそう思う。そして、どんなことにも勇気を持って恐怖に立ち向かえる。そういう人物になれ。……父はそう言いたかったのかな。って思っている」

勇気があるから、レウスは誰とでもすぐ仲良くなるうとするし、戦いにおいても積極的に前に出る。自分を信じて、突き進める。そういうことだろうか。

「……やるうと思ってそう簡単に出来ることでも無いと思うな、そ

れは」

口にするのは簡単だろう。なんとなく思い当たる節もある。だが実際に行うとなると、そうも行くまい。

「……それなら僕は、勇気ある人間だと胸を張って良い。と言うこと、かな？」

「……ああ、俺で良ければ、保証するよ」

「ありがとう。君にそう言ってもらえると、誇らしいよ」

「そんな大した物か？ 俺の評価って」

「君は人のことを深く知ろうとしてくれるからね。偏見や思い込みが少ない」

「よく見てるな……。俺は、ただ……。自分の記憶が無いから。人を知って穴埋めしたいって、思ってるだけなんだと思う」

「それでも君の真摯さは本物だよ。……記憶喪失と言えば、最近はどうなんだい？ 何か思い出せているかな」

「まだまだだよ。でも、何となくだけどき、記憶喪失でも、何かするたびに、これは始めてすることだ、とか、これは前にもやったことがあるな、とか。そういうのはわかる気がするんだ」

昨夜もそうだった。以前にも街を歩いていた時、誰かにジャケットを薦められたことがあった気がしたし、綺麗な街灯に照らされた夜景を見たことがあった、気がした。

「魔法とか戦いとかは、初めてのことだな、って感じてたし」

「へえ、中々良い兆候なんじゃないかな、それは。故郷の景色や、以前からの知り合いに出会えれば、もっと思い出せるかも知れないよ」

「そう、なのかな」

「そうだよ。僕も手伝えることがあるなら協力するし、頑張ってみようよ」

「ああ……。うん、そうだな」

そうして、また新たに決意を固めたところで丁度良く、召集をかけた部屋の前にたどり着く。

「ああ、ここだよ」

第3応接室。外来の客人をもてなす部屋だ。シヨーマに会いに来る人物の候補など、多くは無い。

レウスは扉をノックし、中からの返事を待って、扉を開く。

「レウス・ブロウブ、シヨーマ・ウォーズカ、ただいま参りました」

「入りなさい」

「失礼します」

第3応接室は比較的手狭で質素な部屋で、あまり重要ではない客人をもてなすのに使われる部屋だった。だが稀にそうでない場合もある。

「お待ちしてましたよ。……粗相の無いようお願いしますね」

扉を開けてすぐそこにいたボンボーラ教員が、シヨーマとレウスを呼び出した人物を紹介する。

「第1王女、フェニアス様です」

「!?!」

上座のソファに座っていた、フェニアスと呼ばれた同年代くらいの少女が立ち上がり、頭を下げた。

あまりにも予想外な人物に驚きを受けるレウス。すぐさまその場に跪く。

「ほら、君もとりあえず真似してくれ」

「え？ あ、えっと……」

その少女が何者かも知らないし、どう対応すれば良いのかもシヨーマにはわからなかった。……王女？

地味な茶色のローブに身を包み、腰まで届こうかというほど長く、そして美しい金髪を肩の辺りで結わたその少女は、海のように深く透き通る蒼い瞳でこちらを見つめていた。

「はじめまして。今回は内密の用向きで来ましたので、そのような

「ことはおよしく下さい」

「……はっ」

「どうぞ、お掛けになってください」

レウスは立ち上がり、薦められるままソファに座る。シヨーマもその後が続いた。

「王女がどういう存在かはわかるよね」

レウスが耳打ちする。

「それはわかるよ。でもこの人のことは……」

「とりあえず失礼の無いようにね」

珍しく焦っている様子のレウスであった。

「申し遅れました。レウス・ブロウブと申します。……君も」

「あ、シヨーマ・ウォーズカです」

「ブランジア王女フェニアスです。あなた方のことは、すでにうかがっております。……今日は、シヨーマ様。貴方とお話がしたくて参りました」

ブランジア王国第1王女フェニアス。現国王のただ1人の娘で、いずれは王位を継ぐことになるであろう少女だ。国民の前に出ることはまだ少ない。

「俺……じゃない、わ、私に、ですか？」

意外に思ったが、落ち着いて考えれば、まあ思い当たることは少なくない。学校も国が運営している物だし、どこかでシヨーマのことが王女の耳に入るのには不思議では無い。

「はい。シヨーマ・ウォーズカ様。……いえ、オオツカ・シヨウマ様とお呼びすべきでしょうか」

「……はっ」

その呼び方にレウスは首をかしげる。だがシヨーマには、なんだかとても慣れ親しく感じられた。

自分は普段そついう風に、名前と名字を逆に呼ばれていた気がする。

「……単刀直入に申し上げさせていただきます。」

シヨウマ様、……貴方は私が召喚し、時空を越えこの世界に来訪した、異なる世界の住人なのです」

その言葉には正直な所、ちっとも驚けなかった。

……周囲と全然違う見た目。この国には無い持ち物やお金。変わった名前。

……別の世界から来た。なるほど。ばっちり説明が通るじゃないか。

どちらかと言うと、今までみんなが頭を悩ませてくれたことや、フィオンに頼んだ調査が無駄になってしまって申し訳無いな、なんてことの方が、よほど気になっていた。

「あー……。そういつ……」

そんな、間の抜けた声しか出なかった。

かくして、『始まり』は終わりを迎える。
そして物語は、次なる局面へと続いていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8617z/>

ブランジア人魔戦記

2012年1月13日23時49分発行